鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書62

一般国道９号（鳥取西道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸＸⅡ

鳥取県鳥取市鹿野町

OTSU GA SE OH SUMI

乙亥正大角遺跡

２０１６

鳥取県埋蔵文化財センター

鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書62

一般国道９号（鳥取西道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸＸⅡ

鳥取県鳥取市鹿野町

OTSU GA SE OH SUMI

乙亥正大角遺跡

２０１６

鳥取県埋蔵文化財センター

序

山陰自動車道は、一般国道９号の交通渋滞の緩和、災害時や緊急時における緊急輸送路の確保を目的として、国土交通省により整備が進められている自動車専用道路です。この道路は山陰地方を東西に結ぶ大動脈として、地方都市間の連携を強化し、環日本海交流の一翼を担うことも期待されています。

鳥取県埋蔵文化財センターでは、鳥取市本高から同市青谷町を結ぶ事業区間である「鳥取西道路」の改築に伴う発掘調査を、平成20年度から実施しています。平成27年度末時点で調査した遺跡は７遺跡、調査面積は延べ７万平方メートル以上に及んでいます。

本書に掲載した、鳥取市鹿野町に位置する乙亥正大角遺跡は、平成26年度に発掘調査を行い、縄文時代から近世にかけての遺構や遺物を確認するに至りました。特に、古墳時代前期の集落跡や中世の掘立柱建物跡などを確認したことは、この地域の歴史を解明するうえで欠くことのできない調査成果といえます。

さらに、発掘調査により明らかとなった遺跡や出土品を活用し、その普及啓発に努めることも当センターの重要な業務であり、こうした調査成果が郷土の歴史を解き明かしていく一助となることを期待しています。

本書は、その調査結果を報告書としてまとめたものです。本書をまとめるにあたり、国土交通省中国整備局鳥取河川国道事務所並びに、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成２８年１０月

鳥取県埋蔵文化財センター

所　長　中　原　　斉

例　言

1．本報告書は、国土交通省鳥取河川国道事務所の委託により、鳥取県埋蔵文化財センターが、一般国道９号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、平成26年度に行った乙亥正大角(おつがせおおすみ)遺跡の発掘調査報告書である。

2．一般国道９号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、鳥取県が受託したものは、県埋蔵文化財センターと県教育委員会(公益財団法人鳥取県教育文化財団へ再委託)が分担して実施した。

このため、両者が刊行する発掘調査報告書を一連のものとするため、巻次を下記のとおり振り分けている。

巻次Ⅰ、Ⅱ、XXXⅡ～：発行者　鳥取県埋蔵文化財センター

巻次Ⅲ～XXXⅠ　　：発行者　鳥取県教育委員会

なお、このほかに一部の発掘調査については公益財団法人鳥取市文化財団が受託し実施したものがある。

3．本報告書に収載した遺跡の所在地及び調査面積は以下のとおりである。

鳥取市鹿野町乙亥正128外　　調査面積：3,800㎡

4．本報告書の執筆は原田雅弘、坂本嘉和(以下、「調査担当職員」)が分担して行い、編集は坂本が行った。執筆者名は、目次に記した。

5．発掘調査は、島田組・アイコンヤマト共同企業体の支援を受け実施した。掘削作業や記録作業、測量作業は埋蔵文化財センターの指示のもと、同企業体が行った。

6．本報告書に掲載した遺物の実測・浄書は埋蔵文化財センターが行った。

7．本報告書で使用した遺物写真は調査担当職員が撮影した。

8．発掘調査によって作成された図面・写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターで保管している。

9．本報告書で示す標高は、東京湾平均海面(T.P.)を基準としている。本文中ではT.P.は省略している。方位は公共座標北を示し、磁北は、座標北に対し、7°30′西偏する。なお、X：、Y：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅴ系の座標値である。

10. 本報告書に掲載した地形図には、下記の地図を使用した。

「鳥取市都市計画図」鳥取市作成、「1/25,000地形図『鹿野』『浜村』国土地理院発行

11. 本報告にあたり、自然科学分析(放射性炭素年代測定、樹種同定)を株式会社パレオ・ラボに委託した。

12. 現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々に御助言や御支援、御協力をいただいた。記して深謝いたします(五十音順)。

国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、鳥取県土整備局鳥取県土整備事務所、鳥取市教育委員会

凡　例

1．遺物の注記における遺跡名は「乙オオスミ」の略語を用い、併せて「遺構名、遺物番号、日付」を記入した。

2．乙亥正大角遺跡では本調査における遺構番号(新)は発掘調査時のもの(旧)と変更している。新旧の遺構名・番号の対応は下記の遺構名新旧対照表(表１)で示すとおりである。

3．本書における実測図の縮尺については、特殊なものを除き基本的に以下の縮尺としている。

遺　構　図　テラス・掘立柱建物跡：1/60、1/80、集石土坑・土坑：1/40

遺物実測図　土器：1/4、石器・石製品：3/4・1/2・1/3、木製品：1/8

4．本書における土層名称は、基本的には『新版 標準土色帖』による。

5．本書における遺物番号は算用数字を種別毎に付している。ただし、土器以外の遺物には数字の先頭に以下のアルファベットを付している。

石器：S、木製品：W、銅製品：B、古銭：C

6．遺物実測図の断面は須恵器を黒塗りとし、それ以外のものは白抜きで示している。また、遺構図や遺物実測図におけるトーン及び記号は、基本的に各図に凡例を示す。ただし、説明がない場合は以下のとおりである。

遺構図　　：地山　　**遺物実測図**　　：赤色顔料付着範囲

→：ケズリの方向(砂粒の動き)

7．遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。

8．本報告書における遺構・遺物の時期決定については下記の文献を参照した。

弥生土器：清水真一　1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社

土 師 器：牧本哲雄　1999 「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第６遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団

須 恵 器：岡田裕之・土器検討グループ　2010 「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター

陶 磁 器：重根弘和　2003 「中世備前焼に関する考察」『山口大学考古学論集』近藤喬一先生退官記念事業会

上田秀夫　1989 「14から16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究２』日本貿易陶磁研究会

森田勉　1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究２』日本貿易陶磁研究会

横田健次郎・森田勉　1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』

表１　遺構名新旧対照表

新	旧	新	旧	新	旧
集石土坑１	S２	溝１	S122	ピット10　ピット群３	S381
集石土坑２	S１	溝２	S125	ピット11　ピット群３	S361
集石土坑３	S３	テラス１	S124	ピット12　ピット群３	S344
土坑１	S116	テラス２	S123	ピット13　ピット群３	S343
土坑２	S141	テラス３	S25	ピット14　ピット群３	S180
土坑３	S423	テラス４	S132	ピット15　ピット群３	S184
土坑４	S374	埋没谷５	S4	ピット16　ピット群３	S179
土坑５	S360	ピット１　ピット群１	S337	ピット17　ピット群３	S155
土坑６	S191	ピット２　ピット群１	S338	ピット18　ピット群３	S172
道１	S40	ピット３　ピット群１	S339	ピット19　ピット群３	S167
道２	S40	ピット４　ピット群２	S107	ピット20　ピット群３	S394
道３	S126	ピット５　ピット群２	S31	ピット21　ピット群３	S154
道４	S127	ピット６　ピット群２	S72	ピット22　ピット群３	S334
掘立柱建物１	S41～S46	ピット７　ピット群２	S36	ピット23　ピット群３	S356
掘立柱建物２	S223,S225,S227,S229	ピット８　ピット群２	S69	ピット24　ピット群３	S407
	S298,S304,S305,S308	ピット９　ピット群３	S416	ピット52　ピット群２	S329

目　次

目次
巻頭図版
序
序文
例言
凡例

第１章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯 ……（原田）１
　第２節　発掘調査の方法と経過 ……（原田）２
　第３節　調査体制 ……3
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境 ……（坂本）５
　第２節　歴史的環境 ……（坂本）５
第３章　発掘調査の成果
　第１節　遺跡の概要 ……（坂本）９
　　１　遺跡の立地と基本層序 …… ９
　　２　調査成果の概要 …… 14
　第２節　第１遺構面 ……（坂本）17
　　１　概　要 …… 17
　　２　集石土坑 …… 17
　　３　道路遺構 …… 18
　第３節　第２遺構面 ……（原田・坂本）20
　　１　概　要 …… 20
　　２　段状遺構 …… 20
　　３　掘立柱建物跡 …… 22
　　４　土坑 …… 25
　　５　溝状遺構 …… 28
　　６　ピット群 …… 29
　　７　埋没地形と包含層出土遺物 …… 32
　　８　その他の出土遺物 …… 45
　遺物観察表 …… 46
第４章　自然科学分析
　第１節　放射性炭素年代測定 ……（株式会社パレオ･ラボ）51
　第２節　樹種同定 ……（株式会社パレオ・ラボ）57
第５章　調査のまとめ ……（坂本）63

写真図版
報告書抄

挿図目次

第１図　鳥取西道路関係遺跡位置図 …… 1
第２図　調査地位置図 …… 2
第３図　遺跡位置図 …… 5
第４図　周辺遺跡分布図 …… 6
第５図　勝見15号墳経塚外容器 …… 8
第６図　調査前地形測量図 …… 9
第７図　調査区中央土層断面図（１） …… 10
第８図　調査区中央土層断面図（２） …… 11
第９図　斜面部土層断面図 …… 12
第10図　調査区南壁土層断面図 …… 13
第11図　第１遺構面遺構配置図 …… 14
第12図　第２遺構面遺構配置図 …… 15・16
第13図　集石土坑１ …… 17
第14図　集石土坑２ …… 17
第15図　集石土坑３ …… 18
第16図　集石土坑１・道１出土遺物 …… 18
第17図　道１・２ …… 19
第18図　道３・４ …… 20
第19図　テラス１・２ …… 21
第20図　テラス３ …… 22
第21図　テラス４ …… 23
第22図　掘立柱建物１ …… 24
第23図　掘立柱建物２ …… 25
第24図　土坑１ …… 26
第25図　土坑２ …… 26
第26図　土坑３ …… 27
第27図　土坑４ …… 27
第28図　土坑５ …… 27
第29図　土坑６ …… 27
第30図　土坑６出土遺物 …… 28
第31図　溝１ …… 28
第32図　溝２ …… 28
第33図　ピット群１分布図 …… 29
第34図　ピット群１・２ …… 30
第35図　ピット群１・３出土遺物 …… 30
第36図　ピット群２分布図 …… 31
第37図　ピット群３分布図 …… 32
第38図　ピット群３ …… 33
第39図　ピット群出土柱・杭材 …… 34
第40図　埋没谷１ …… 35
第41図　埋没谷１Ⅱ層出土遺物 …… 35
第42図　埋没谷１Ⅲ層出土遺物（１） …… 36
第43図　埋没谷１Ⅲ層出土遺物（２） …… 37
第44図　埋没谷１Ⅳ層出土遺物（１） …… 38
第45図　埋没谷１Ⅳ層出土遺物（２） …… 39
第46図　埋没谷１Ⅱ～Ⅳ層出土遺物 …… 39
第47図　埋没谷２～４ …… 40
第48図　埋没谷５ …… 41
第49図　埋没谷５遺物出土状況図 …… 42
第50図　埋没谷５出土遺物（１） …… 43
第51図　埋没谷５出土遺物（２） …… 44
第52図　表土・撹乱土等出土遺物 …… 45
第53図　暦年較正結果 …… 54
第54図　遺跡周辺の地形と地質 …… 62
第55図　乙亥正大角遺跡試掘トレンチと出土五輪塔 …… 64

挿表目次

表１　遺構名新旧対照表
表２　土器・土製品観察表（１） …… 46
表３　土器・土製品観察表（２） …… 47
表４　土器・土製品観察表（３） …… 48
表５　土器・土製品観察表（４） …… 49
表６　石器・石製品観察表 …… 50
表７　木製品観察表 …… 50
表８　金属器観察表 …… 50
表９　測定試料及び処理 …… 53
表10　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果 … 53
表11　樹種別同定結果 …… 58
表12　樹種同定結果一覧 …… 58

文中写真目次

写真１　調査前の地形（南西から） …… 4
写真２　表土剥ぎ後の状況（南西から） …… 4
写真３　ピット群３ピット13検出状況（西から） … 33
写真４　斜面部調査風景 …… 45
写真５　遺跡内に集積された五輪塔 …… 63

図版目次

PL.1　1　調査後航空写真(北から)
　　2　調査後航空写真(西から)
PL.2　1　調査後航空写真(上が東)
　　2　斜面部第１遺構面完掘状況(東から)
PL.3　1　集石土坑１検出状況(東から)
　　2　集石土坑１半裁状況(東から)
　　3　集石土坑２検出状況(北から)
PL.4　1　集石土坑３検出状況(南から)
　　2　道１完掘状況(北から)
　　3　道２完掘状況(北から)
PL.5　1　道３・４完掘状況(北から)
　　2　斜面部第２遺構面完掘状況(東から)
　　3　斜面部第２遺構面完掘状況(西から)
PL.6　1　埋没谷１土層堆積状況(北西から)
　　2　平坦部埋没谷５完掘状況(北西から)
PL.7　1　テラス１・２完掘状況(北西から)
　　2　テラス３完掘状況(北西から)
PL.8　1　テラス４完掘状況(南から)
　　2　掘立柱建物１完掘状況(西から)
　　3　掘立柱建物１柱穴５土層断面(西から)
　　4　掘立柱建物１柱穴６土層断面(南西から)
PL.9　1　掘立柱建物１完掘状況(東から)
　　2　土坑２完掘状況(西から)
　　3　土坑３完掘状況(南東から)
PL.10　1　土坑６完掘状況(南から)
　　2　ピット群１ピット２・３土層断面(南から)
　　3　ピット群２ピット４土層断面(南西から)
　　4　ピット群２ピット7検出状況(南から)
　　5　ピット群２ピット８土層断面(西から)
　　6　ピット群２ピット６土層断面(西から)
　　7　ピット群３ピット12土層断面(南から)
　　8　ピット群３ピット13土層断面(南から)
PL.11　1　ピット群３ピット19土層断面(南から)
　　2　ピット群３ピット21土層断面(南西から)
　　3　埋没谷５遺物出土状況(１)(北から)
　　4　埋没谷５遺物出土状況(２)(南東から)
　　5　埋没谷５遺物出土状況(３)(北西から)
　　6　埋没谷１遺物出土状況(１)(南から)
　　7　埋没谷１遺物出土状況(２)(南西から)
PL.12　1　道１出土磁器
　　2　道１・ピット群・埋没谷１出土土器
　　3　埋没谷１出土土器(１)
PL.13　1　埋没谷１出土土器(２)
PL.14　1　埋没谷１出土土器(３)
PL.15　1　埋没谷１出土土器(４)
PL.16　1　埋没谷１出土土器(５)
PL.17　1　埋没谷１出土土製支脚
　　2　埋没谷５・表土出土土器
PL.18　1　集石土坑１・埋没谷５出土遺物
PL.19　1　表土等出土土器
　　2　鉄製品・銅製品・古銭
　　3　剥片石器・玉作関連遺物
　　4　石器
PL.20　1　掘立柱建物１・ピット群出土柱・杭材
　　2　ピット群出土柱・杭材

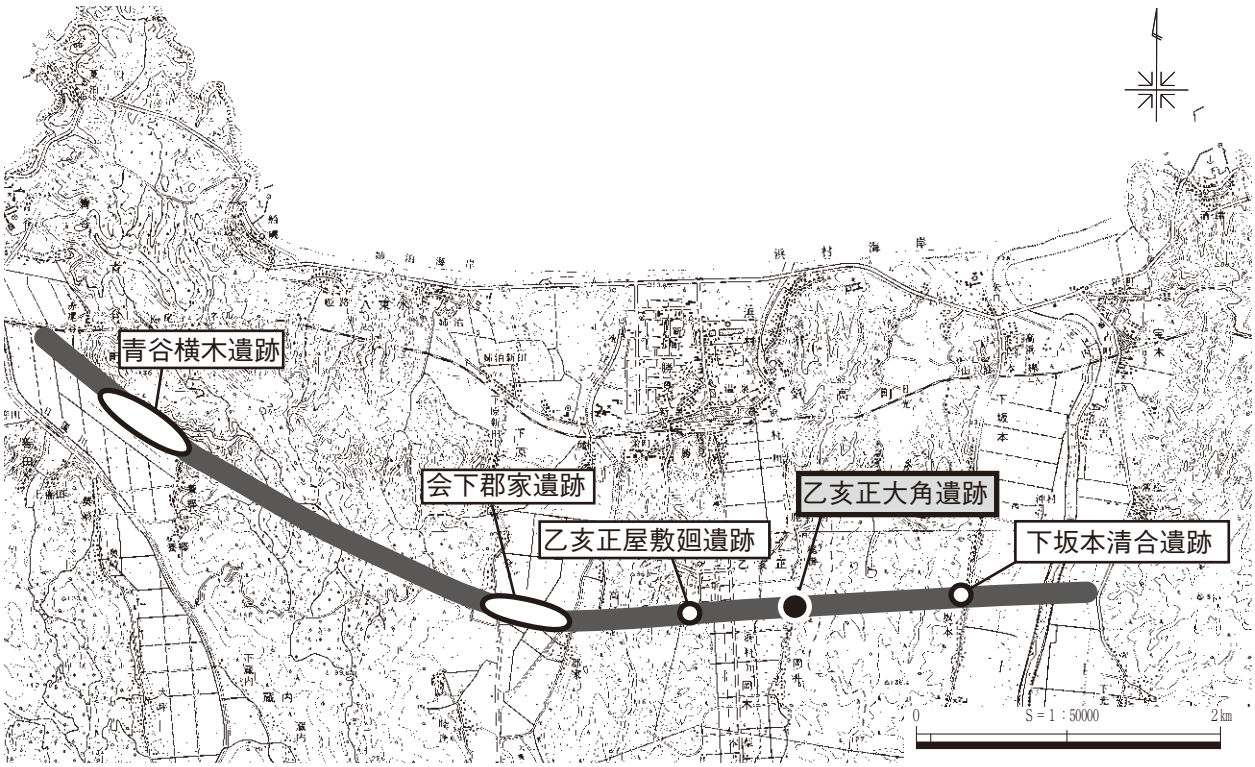
第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

山陰自動車道は、鳥取県鳥取市を起点とし、山口県美祢市を終点とする、延長約380キロメートルの自動車専用道路である。この道路は、鳥取・島根・山口３県の主要都市を東西に結び、山陰地方の産業経済の発展や観光振興、交通渋滞の解消と緩和、災害時の緊急輸送路の確保を目的として、国土交通省により整備が進められている。鳥取西道路は、山陰自動車道のうち鳥取市本高と鳥取市青谷町青谷を結ぶ全長19.3kmの区間で、鳥取インターチェンジで鳥取自動車道（中国横断自動車道姫路鳥取線）に、青谷インターチェンジで国道９号「青谷・羽合道路」に接続し、高速道路ネットワークの一翼を担う。

鳥取西道路の計画地内には周知の埋蔵文化財包蔵地が数多く認められていたため、道路建設工事に先立って国土交通省、鳥取県、鳥取市で協議し、計画地内に存在する埋蔵文化財の状況を把握する必要性が確認された。そこで、平成17年度からは計画地内の踏査（分布調査）や鳥取市教育委員会による試掘調査及び確認調査が進められ、調査結果に基づき道路事業と埋蔵文化財保護との調整が図られている。

乙亥正大角遺跡は、浜村川中流域東岸の沖積平野に面した丘陵斜面裾部に位置する（第１・２図）。平成25年度に鳥取市教育委員会が文化庁の国庫補助と県費補助を受けて試掘調査及び確認調査を行った。その結果、弥生時代から中世にかけての遺構や遺物が確認されたため、道路盛土部分及びトンネル坑口部分となる計3,800㎡を対象として記録保存のための発掘調査が行われることになり、文化財保護法第94条による手続きを経た後、平成26年度に鳥取県埋蔵文化財センターが国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所の委託を受けて発掘調査を実施した。



第１図　鳥取西道路関係遺跡位置図

発掘調査に当たり発掘作業や調査記録作業等について、島田組・アイコンヤマト共同企業体の支援を受けた。

第２節　発掘調査の方法と経過

１　調査区の名称と調査方法（第２図）

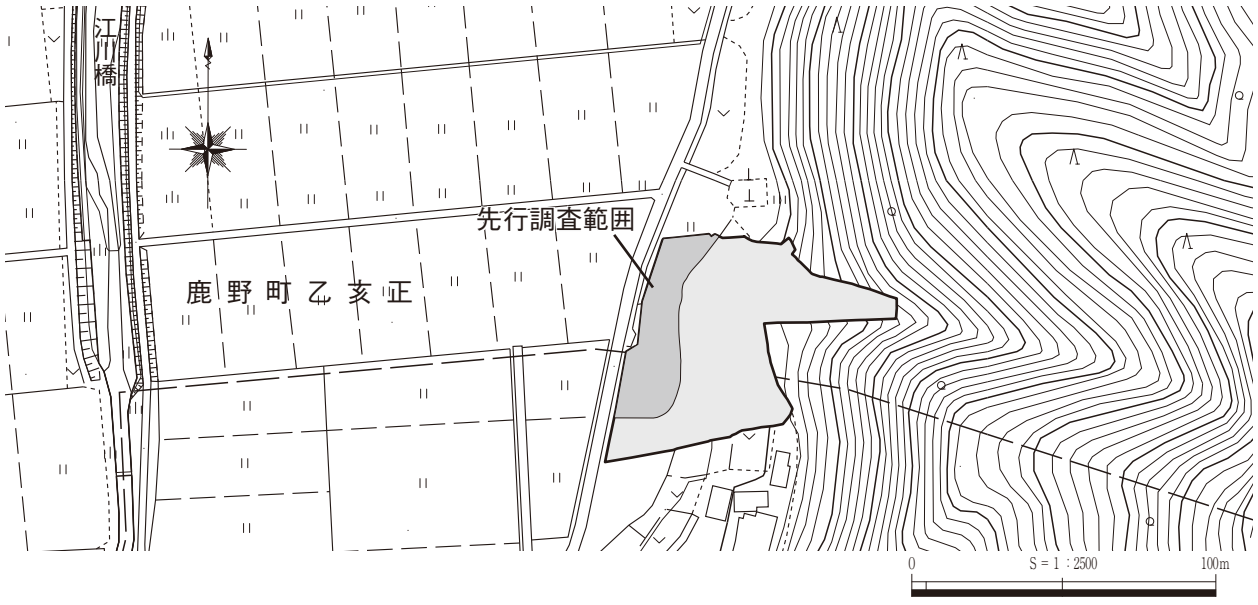
乙亥正大角遺跡の調査前の状況は水田・畑地・山林である。丘陵斜面の谷部と、そこから広がる平坦部を段状に開墾しており、丘陵斜面部と平坦部の境には３ｍ程度の比高差が生じていたことから、調査区を便宜的に斜面部と平坦部に区分けした。

調査対象範囲を含む範囲の調査前地形測量を、平成25年度末に業者委託により実施した。表土剥ぎ終了後、世界測地系国土座標第Ⅴ系に載るように調査区内に10m方眼の基準杭を設定しグリッドを設けている。グリッド名は、Ｘ＝－55510m・Ｙ＝－25020mの交点を基点とし、南北方向にアルファベット、東西方向に算用数字を用い、各交点の北東杭名を採った。座標は、斜面部ほぼ中央Ｄ４杭Ｘ＝－55540m・Ｙ＝－25050m、平坦部ほぼ中央Ｅ８杭Ｘ＝－55550m・Ｙ＝－25090mなどである。

検出した遺構や遺物の記録は、トータルステーションによる電子測量を現地で行い、CADを使用し図面作成を行った。必要に応じて写真測量も併用した。現地での写真撮影は35㎜判、ブローニー（６×７）判カメラ、４×５判カメラを用い、地上または写真用足場上から行った。いずれも白黒ネガフィルム並びにカラーネガフィルムを使用し、デジタル一眼レフカメラも併用した。調査後の航空写真撮影はブローニー（６×６）判カメラを用い、併せてデジタル一眼レフカメラも使用した。遺物写真撮影についてはブローニー（６×７）判カメラ、４×５判カメラを用いた。

２　発掘調査の経過

平成26年６月５日に調査前地形測量を行い、６月16日には重機による表土掘削を開始した。６月17日には表土掘削と並行する形で発掘作業員による人力掘削に着手し、まず、基本層序を把握するために調査区壁面及び調査区中央付近にトレンチを設定し、掘削した。斜面部の調査は７月18日に第１遺構面の調査を終え、10月17日には第２遺構面の調査を終えた。平坦部の調査は、着手後に調査区西側



第２図　調査地位置図

の市道岡井梶掛線ボックスカルバート工事に伴う地盤改良工が10月に着工される工程が示されたことから、工事の影響が及ぶ概ね９ライン以西の調査を先行することとした。９月22日には地盤改良工影響範囲の調査を終え、11月21日に現地での調査を全て終了した。

調査の結果、古墳時代前期の段状遺構４基、中世から近世の掘立柱建物跡１棟、集石土坑３基、道路遺構４基などを検出した。調査面積は3800㎡である。

第３節　調査体制

下記の体制で発掘調査、報告書作成を行った。

平成26年度

鳥取県埋蔵文化財センター

所　　長　　中原　　斉

次　　長　　中村　靖浩(兼総務係長)

総　務　係

係　　長　　白岩　準市

主　　事　　松浦　広美

事務職員　　坂本　真奈美、高橋　優、市村　篤則

発掘事業室

室　　長　　山枡　雅美(兼調整係長)

調 整 担 当

発掘調査員　　長谷　琢也

事務職員　　中村ゆかり

調査担当(気高調査事務所)

係　　長　　原田　雅弘(主任発掘調査監理者)

文化財主事　　坂本　嘉和(発掘調査監理者)

事務職員　　竹内　努、新　ともみ

支 援 業 者

島田組・アイコンヤマト共同企業体

現場代理人：大山　徹、現場副代理人：田中武雄(７月まで)・矢部正幸(９月から)

支援調査員：野津　旭・清岡廣子、調査補助員：小泉　健・西本成希

平成27年度

鳥取県埋蔵文化財センター

所　　長　　中原　　斉

次　　長　　近藤　　健(兼総務係長)

総　務　係

係　　長　　白岩　準市

主　　事　　岡　　梓、水本　裕子

事務職員　　坂本　真奈美、高橋　　優

事務職員　　植木　朋子

発掘事業室
　室　　長　　山枡　雅美（兼調整係長）
調 整 担 当
　文化財主事　　岩垣　　命
　発掘調査員　　平井　克知
　事務職員　　坪内　恵子
調査担当（気高調査事務所）
　係　　長　　原田　雅弘
　文化財主事　　坂本　嘉和
　事務職員　　田淵　由樹子、中谷　沙織

平成28年度

鳥取県埋蔵文化財センター
所　　長　　中原　　斉
次　　長　　近藤　　健（兼総務係長）
総　務　係
　係　　長　　港　　浩二
　主　　事　　水本　裕子
　事務職員　　坂本　真奈美、中森　貴子、西澤　直子
発掘事業室
　室　　長　　松井　潔（兼調整係長）
調 整 担 当
　文化財主事　　岩垣　　命
　発掘調査員　　平井　克知
調 査 担 当
　文化財主事　　坂本　嘉和

写真１　調査前の地形（南西から）

写真２　表土剥ぎ後の状況（南西から）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

乙亥正大角遺跡が所在する鹿野町は、鳥取県東部、県庁所在地である鳥取市の西部に位置する。平成16年の鳥取市との合併以前は隣接する青谷町、気高町とともに気高郡に属し、鹿野町はその南部域にあたる。町域は東西9.1km、南北14kmで、総面積は52.83㎢である。

鹿野町の地勢は、中国山地から派生した独立峰である鷲峰山(920.6m)に代表される山地と河川の浸食によって形成された谷底平野からなるが、山地が大部分を占めている。河川は鷲峰山を水源とする河内川が本流をなし、永江川や浜村川、末用川の支流が北へ派生し、逢坂谷、勝谷、宝木谷、瑞穂谷の河谷平野を開析している。河内川は第四紀沖積世中葉まで流下していた逢坂谷から勝谷へと流れを変えたとみられ、現在では宝木・瑞穂谷を通水し、日本海へと注いでいる。沿岸部の河口付近には砂丘が発達し、日光池や水尻池などの潟湖が数多く形成されたとみられるが、その多くは干拓により現在は水田となっている。

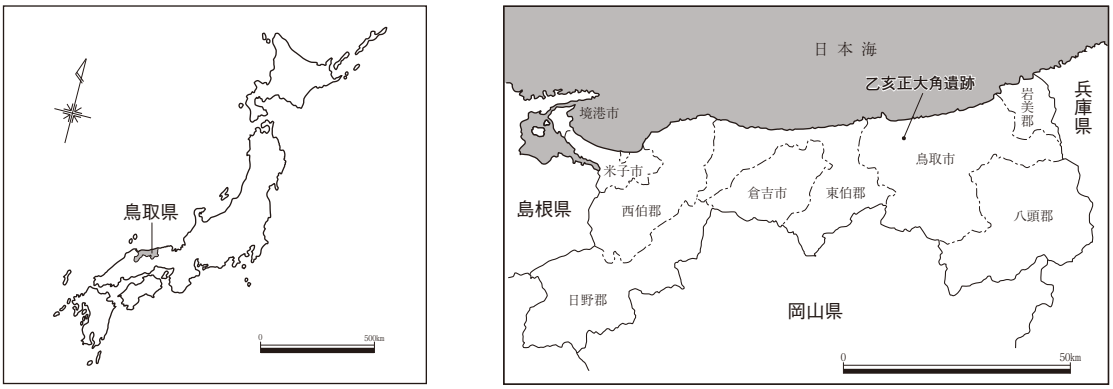
乙亥正大角遺跡は勝谷に位置し、海岸線から2.2kmほど内陸にある標高約７～21ｍの丘陵裾に立地する。谷底平野を挟んだ西側の丘陵には弥生時代後期を中心とする集落跡である乙亥正屋敷廻遺跡が、同一丘陵の東斜面には下坂本清合遺跡が営まれている。

第２節　歴史的環境

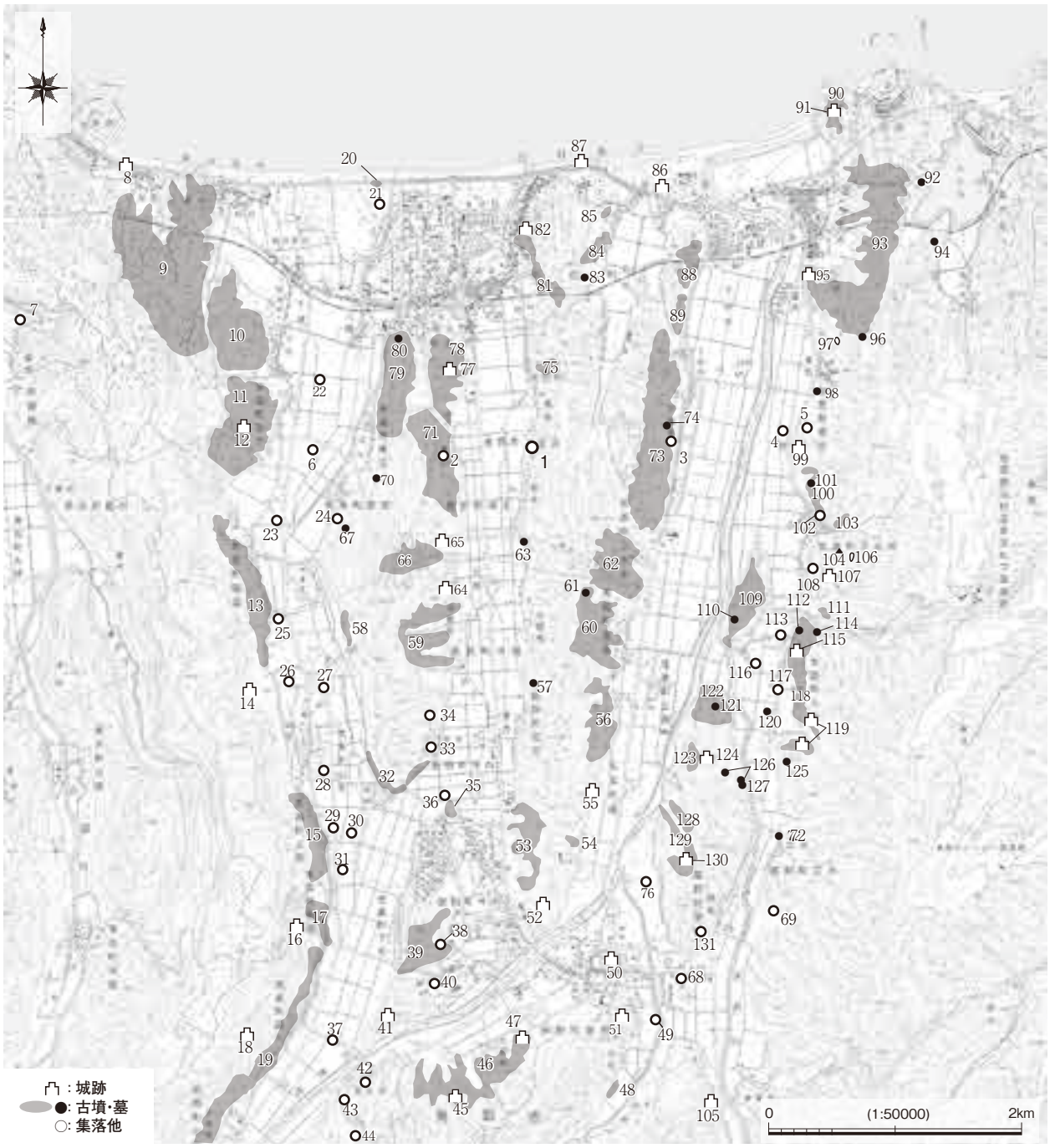
旧石器・縄文時代

当該地域では旧石器時代の遺構や遺物は今のところ見つかっていない。

縄文時代は草創期では八束水の砂丘地で黒曜石製の有茎尖頭器が、閉野では局部磨製石斧が採集されている。早・前期では遺構は確認されていないが、僅かに柄杓目遺跡(76)で早期の押型文土器を確認することができる。中期では土井11号墳の調査で土坑が検出され、浜村砂丘の短尾遺跡(21)では当該期の土器が出土している。後期は山宮茶山畑遺跡(27)で土器が出土しているにすぎないが、晩期に入ると、集落や狩猟場の一端を窺うことができるようになる。山宮笹尾遺跡(26)では落とし穴や炉跡などの遺構が検出された他、黒曜石やサヌカイト製石鏃、蛇紋岩製首飾りなどが出土している。常松管田遺跡(４)では焚火跡と考えられる土坑や土器溜が確認されている。



第３図　遺跡位置図



１乙亥正大角遺跡　２乙亥正屋敷廻遺跡　３下坂本清合遺跡　４常松菅田遺跡　５常松大谷遺跡　６会下郡家遺跡　７青谷横木遺跡　８姫路城跡　９八東水古墳群　10下原古墳群　11会下古墳群　12会下城跡　13睦逢古墳群　14篠尾柵跡　15上原古墳群　16飯山城跡　17飯里古墳群　18風情城跡　19殿古墳群　20北短尾古墳群　21短尾遺跡　22会下の土囲　23睦逢遺跡　24郡家遺跡　25山王尻遺跡　26山宮笹尾遺跡　27山宮茶畑山遺跡　28山宮阿弥陀森遺跡　29上原西遺跡　30上原遺跡　31上原南遺跡　32田仲古墳群・寺内古墳群　33寺内廃寺　34宮内宮谷遺跡　35今市古墳群　36寺内京南遺跡　37殿遺跡　38今市馬の池所在遺物出土地１　39馬の池古墳群　40譲伝寺庭園跡　41下石城跡（譲伝寺山城）　42古仏谷遺跡　43会下谷遺跡　44奥会下谷遺跡　45出百姓西砦跡　46出百姓古墳群　47出百姓東砦跡　48口水谷遺跡　49興国寺跡　50杉原土園跡　51鹿野城跡　52持西山砦跡　53神越谷古墳群　54宿古墳群　55丸山城　56土居古墳群　57宮方古墳　58山宮古墳群　59西中園古墳群　60重高古墳群　61漆谷横穴墓　62二本木古墳群　63岡井谷所在中世墓　64観音山城跡　65藤山城跡　66岡木古墳群　67郡家１号墳　68鹿野所在古墳　69閉野出土地遺跡1　70郡家寺ノ上横穴墓群　71重山古墳群　72閉野古墳群　73下坂本古墳群　74下坂本横穴　75梶掛古墳群　76柄杓目遺跡　77勝山城跡　78勝見古墳群　79谷奥古墳群　80谷奥1号横穴墓　81浜村古墳群　82浜村城跡　83日光横穴群　84日光古墳群　85日光小池古墳群　86矢口陣屋跡　87櫛ヶ脇城　88矢口古墳群　89西山古墳群　90酒津古墳群　91湊山砦跡　92奥沢見横穴群　93宝木古墳群　94奥沢見古墳群　95宮吉城跡　96富吉横穴墓　97常松第1遺跡　98常松第2遺跡　99堤知光城跡　100下光元古墳群　101持木横穴　102夏ヶ谷遺跡　103夏ヶ谷古墳群　104堤谷横穴群　105法楽寺砦跡　106下光元第1遺跡　107大杉城跡　108下光元第2遺跡　109山崎古墳群　110山崎横穴群　111葛谷古墳群　112後谷横穴墓　113狭間遺跡　114高尾口横穴群　115弥平衛山城跡　116戸島遺跡　117馬場遺跡　118上光古墳群　119上垣城跡　120上光塚ノ上古墳　121西分横穴群　122西分古墳群　123首罫谷古墳群　124動ヶ坪城跡　125灰谷口横穴墓　126熊ヶ坪横穴群　127熊ヶ坪1号墓　128新葉谷古墳群　129柄杓目古墳群　130鹿野所在城跡　131閉野出土地遺跡２

第４図　周辺遺跡分布図

弥生時代

遺跡周辺では弥生時代前期の遺跡はみられないが、中期から後期にかけて遺跡を多く確認することができる。常松管田遺跡では中期中葉の玉作工房跡が検出されている。玉作工房跡では北陸産の碧玉

を使用した管玉製作が行われたことが判明しており、安山岩製の石針等が出土している点も注目される。会下・郡家遺跡（６）では県内でも最大規模を持つ、独立棟持柱建物が検出されている。木棺墓群や貯蔵穴とみられる袋状土坑も数多くみられ、拠点的集落と考えられている。木棺墓は睦逢遺跡(23)や上原遺跡(30)でも確認され、上原南遺跡(31)では竪穴住居跡や貯蔵穴、土坑墓が確認されている。本遺跡と同じ勝谷に位置する乙亥正屋敷廻遺跡（２）では後期から古墳時代前期を中心とする集落が営まれている。急峻な斜面に雛壇状に段状遺構が形成されており、谷底の低地部では大規模な木造構造物を伴う水路が検出されている。また、八禽鏡の破鏡や巴型銅器等の遺物も特筆される。その他では常松大谷遺跡（５）では後期の水田跡が検出されている。

古墳時代

前期では前方後円墳は今のところ確認されていない。二本木７号墳(62)では長方形を呈する方墳が築かれ、方形周溝墓の可能性も指摘されている。中期になると古墳の数は増加し、大小の古墳が築造される。大型の古墳では全長47ｍの前方後方墳西山１号墳(89)が知られ、当該地域では最大規模を誇っている。また、八束水７号墳（９）、重高４・５号墳(60)、宝木１・16号墳(93)、上光10号墳(118)等の前方後円墳が築かれている。中小の古墳では勝見15号墳(78)で県中部に特徴的なＶ字状石枕を伴う箱式石棺が見つかっている。

後期から終末期では、各河谷平野に面した丘陵上に群集墳が数多く築かれようになる。気高郡域では東部と西部で墓制に違いが認められ、西部では板状に割れる安山岩を玄室奥壁に１枚、側壁に２枚、天井石に２枚使用する「逢坂型石室」と呼ばれる横穴式石室が、東部では横穴墓が主体的に築かれる。前者では谷奥１号墳(80)が傑出した副葬品を有しており、銅鏡、金環、直刀の装具に加え、馬鐸や銅椀が出土している。線刻壁画をもつ古墳も多く、山宮14号墳や睦逢11号墳(13)、殿15・25号墳(19)等が挙げられ、漆谷横穴墓では(61)では綾杉文の線刻が確認されている。

古墳時代の集落については不明な点が多いが、会下郡家遺跡では前期から中期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。また、常松菅田遺跡や常松大谷遺跡では後期から終末期にかけて、礎盤や根石等をもつ掘立柱建物群が営まれており、平野の低地部にも集落が形成されたことが窺える。

古　代

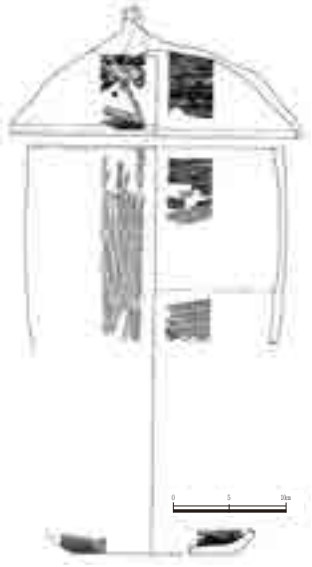
律令制下では因幡国気多郡に属する。『和名類従抄』によると、気多郡は大原、坂本、口沼、勝見、大坂、日置、勝部の７郷で構成される。気多郡衙は発掘調査により上原遺跡群に置かれたことが確実とみられる。上原遺跡群では長大な掘立柱建物群や廂付建物が整然と並び、郡庁、正倉、曹司などの各諸施設が南北500m、東西300ｍに及ぶ範囲に分散して営まれたと考えられている。山宮阿弥陀森遺跡(28)では「郡家一」と記された墨書土器なども出土している。上原遺跡群から北東約800ｍの位置には寺内廃寺(33)が造営され、郡衙周辺寺院として「郡寺」の性格も有していた可能性が高い。ただし、塔心礎が確認されたのみで、伽藍配置等の詳細は明らかではない。

気多郡では郡衙より下位とみられる官衙関連遺跡が複数確認されている。まず、戸島・馬場遺跡は郡東部に置かれた郡衙の出先機関と考えられている。馬場遺跡(117)では８～10世紀の長大な掘立柱建物や倉庫群が検出され、隣接する戸島遺跡(116)では７世紀末頃の布堀掘立柱建物がコの字状に整然と配置されている。一方で、郡西部では近年調査された青谷横木遺跡周辺に日置・勝部郷を統括す

るような末端官衙が置かれた可能性が高まってきている。青谷横木遺跡（７）では青谷上寺地遺跡と同様に古代山陰道とみられる道路遺構と条里遺構が一体で確認され、税や出挙に関する木簡や墨書土器、人形や馬形など膨大な量の木製祭祀具が出土している。

その他では、睦逢遺跡では倉庫群を含む掘立柱建物が検出されており、豪族居宅としての性格が考えられている。また、会下郡家遺跡では10～11世紀の大型建物群が検出され、緑釉・灰陶釉陶器が出土するなど、気多郡衙廃絶後における官衙関連施設としての性格や機能が注目されている。

平安末頃には末法思想により各地に経塚が造られるようになり、当地域では勝見経塚（勝見15号墳）（132）が知られる。経塚内に経筒は残っていなかったが、陶製（土師質）の外容器が出土し、『藤井□□　惣廾造候也』という墨書銘が記されている。



第５図　勝見15号墳経塚外容器

中・近世

中世では会下郡家遺跡で掘立柱建物跡や地下式横穴が数多く確認され、中国や朝鮮半島産の陶磁器等の出土から屋敷地が存在したとみられる。また、室町時代中期とみられる銅製の仏具（香炉、華瓶、燭台等）が一式出土している。中世墓では寺内廃寺跡で備前焼の蔵骨器を含む土壙墓群が検出され、周辺からは宝篋印塔や五輪塔が多数出土している。

戦国時代には尼子氏と毛利氏の勢力争いや羽柴秀吉の因幡進出などを背景に、勝山城（77）や観音山城（64）、富吉城（95）などの山城が数多く築かれている。鳥取城の落城後は、亀井茲矩が気多郡13,800万石を与えられ、鹿野城（51）に入城した。亀井氏は新田開発のための日光池の干拓や青谷町平野における亀井畷の敷設など大規模な土木事業を積極的に行うともに、東南アジアとの朱印船貿易にも力を注いだ。元和３年（1617年）、亀井氏が石見津和野藩に移封された後は池田光政領となり、寛永９年（1632年）の光仲の国替えを経て、以後幕末まで鳥取藩領となった。

【参考文献】
気高町教育委員会編1977『気高町誌』
鹿野町教育委員会編1995『鹿野町誌』上巻
※発掘調査報告書類については紙面の都合上割愛させていただいた。
【図出典】
第５図：気高町教育委員会1978『勝見15号墳発掘調査報告書』

第３章　発掘調査の成果

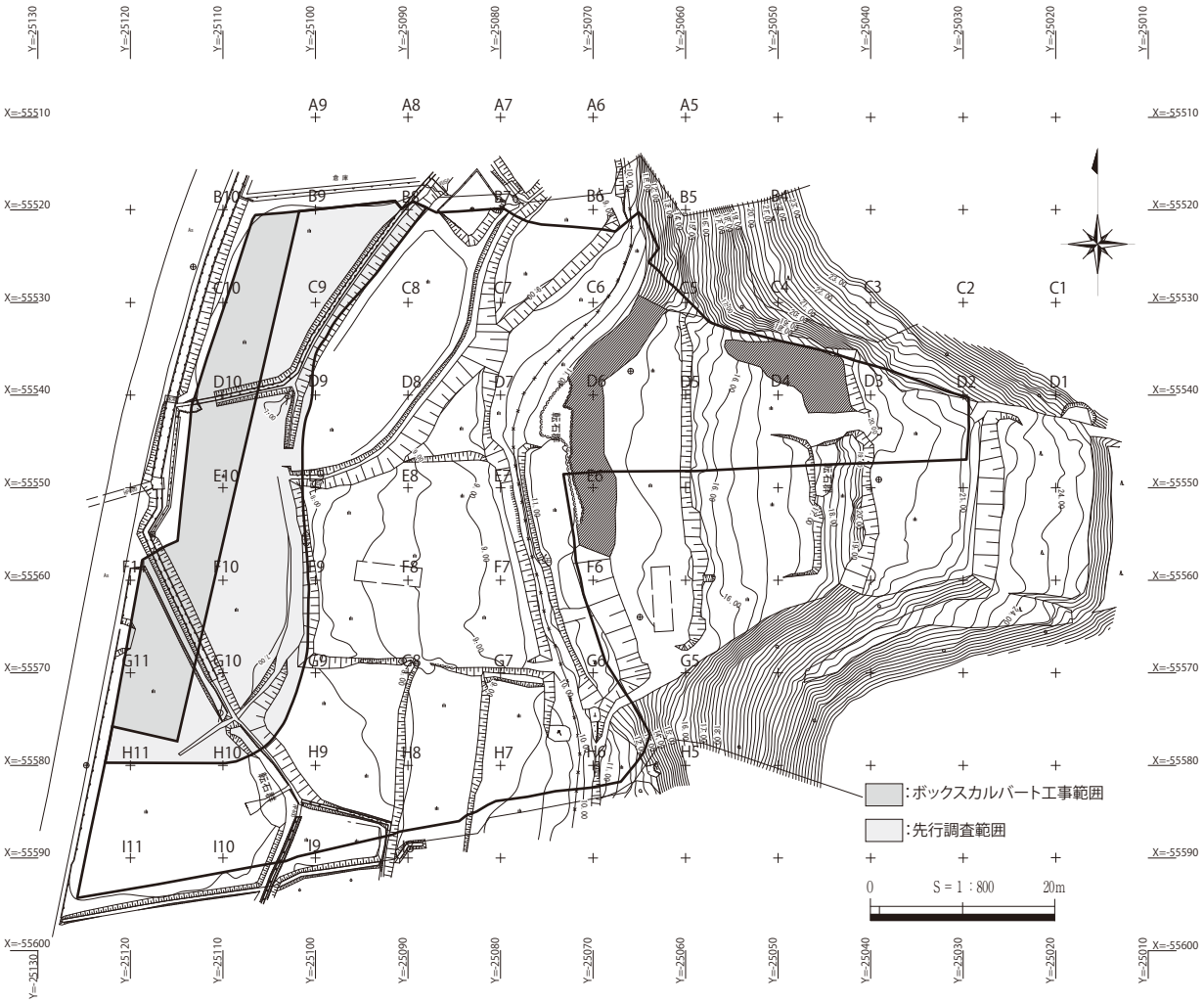
第１節　遺跡の概要

１　遺跡の立地と基本層序（第６～10図）

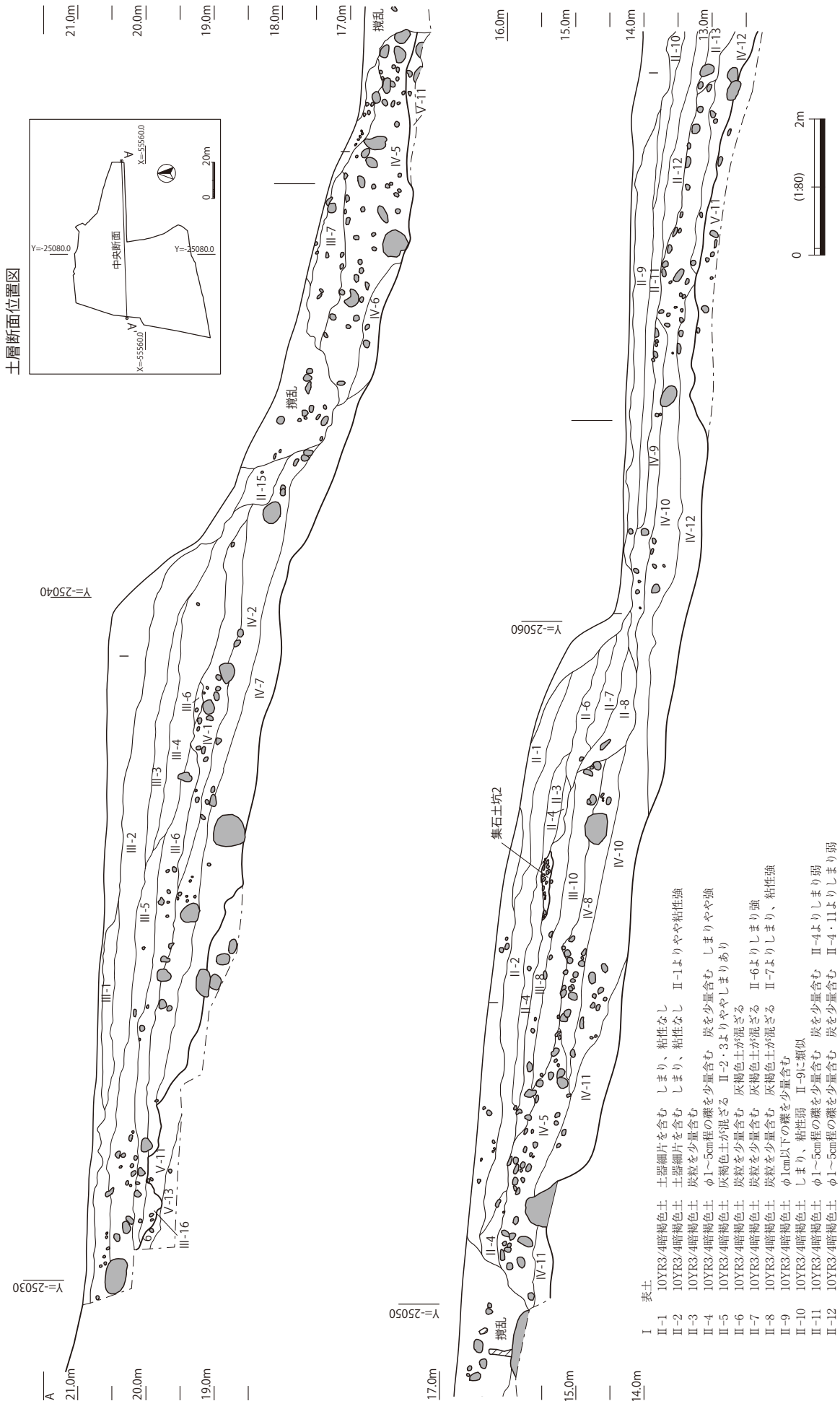
乙亥正大角遺跡は、気高平野を構成する三本の河谷平野のうち勝谷に位置し、浜村川下流域の東岸に所在する。遺跡が営まれた丘陵は東側の瑞穂谷との間に残された標高132m程の細長い低丘陵で、北側は日本海まで張り出しているが、南端は鷲峰山との間が河内川の開析により遮断されることで、独立した山帯をなしている。

調査地は丘陵裾に位置し、斜面部と斜面裾から平野部の平坦面に分けられる。標高は７～21m前後で、調査地内で最大約14mの比高差がみられる。丘陵斜面は比較的急峻であるが、小規模な開析谷にあたるため、周囲に比べやや緩やか地形をなしている。調査前の現況は、階段状に耕作地が造成され、調査地内の各所に耕作などに伴って出土した転石が数多く集積されていた。

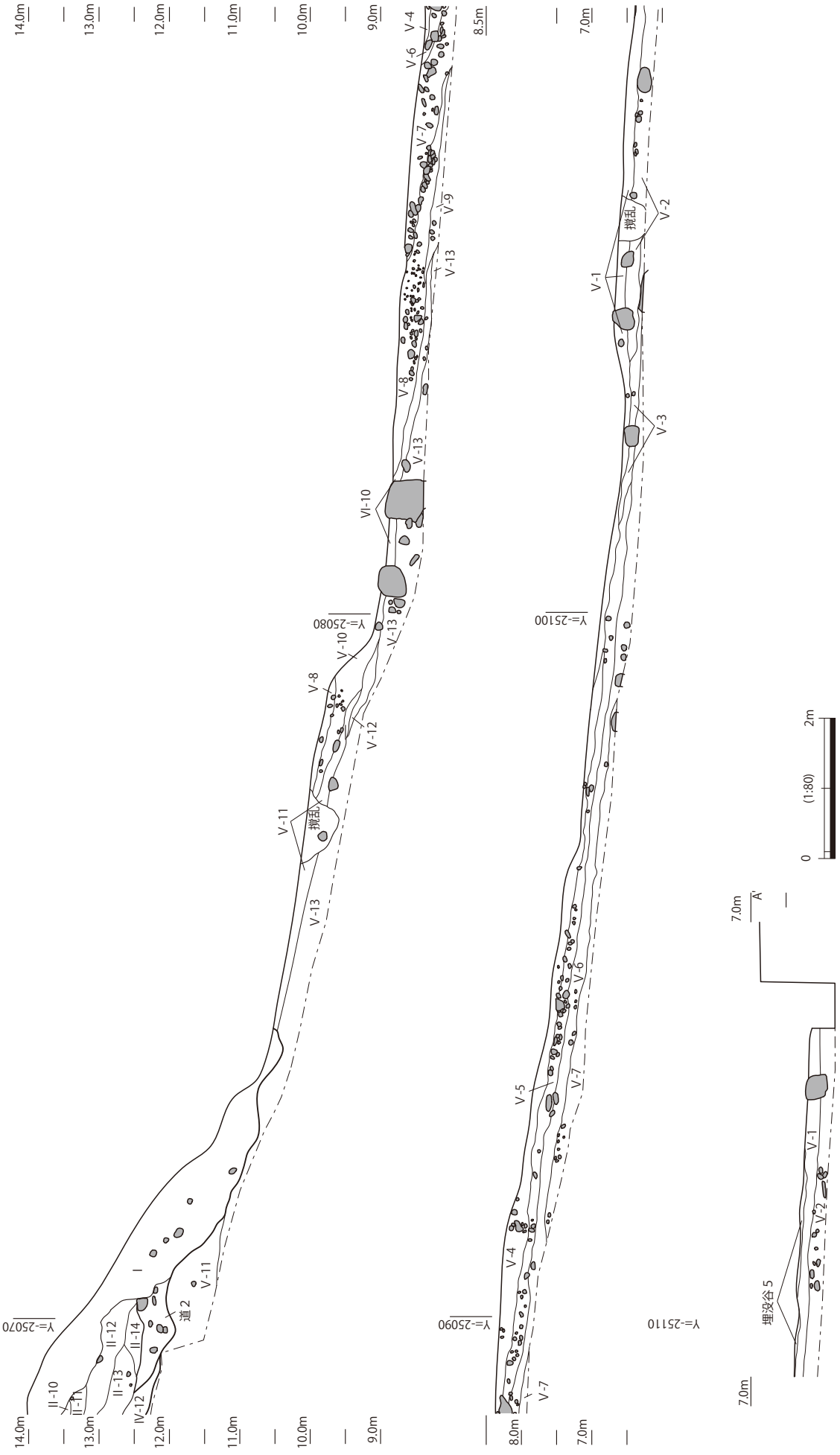
本遺跡の土層堆積は、基本的に第三紀の白兎円礫層と呼ばれる、安山岩～デイサイトや凝灰角礫岩、凝灰岩、火山円礫からなる火山砕屑岩を基盤とし、上部を大山のローム層やその二次堆積層が厚く覆っている。とくに調査地は前述したように開析谷にあたるため、丘陵裾から平野部にかけて二次堆積



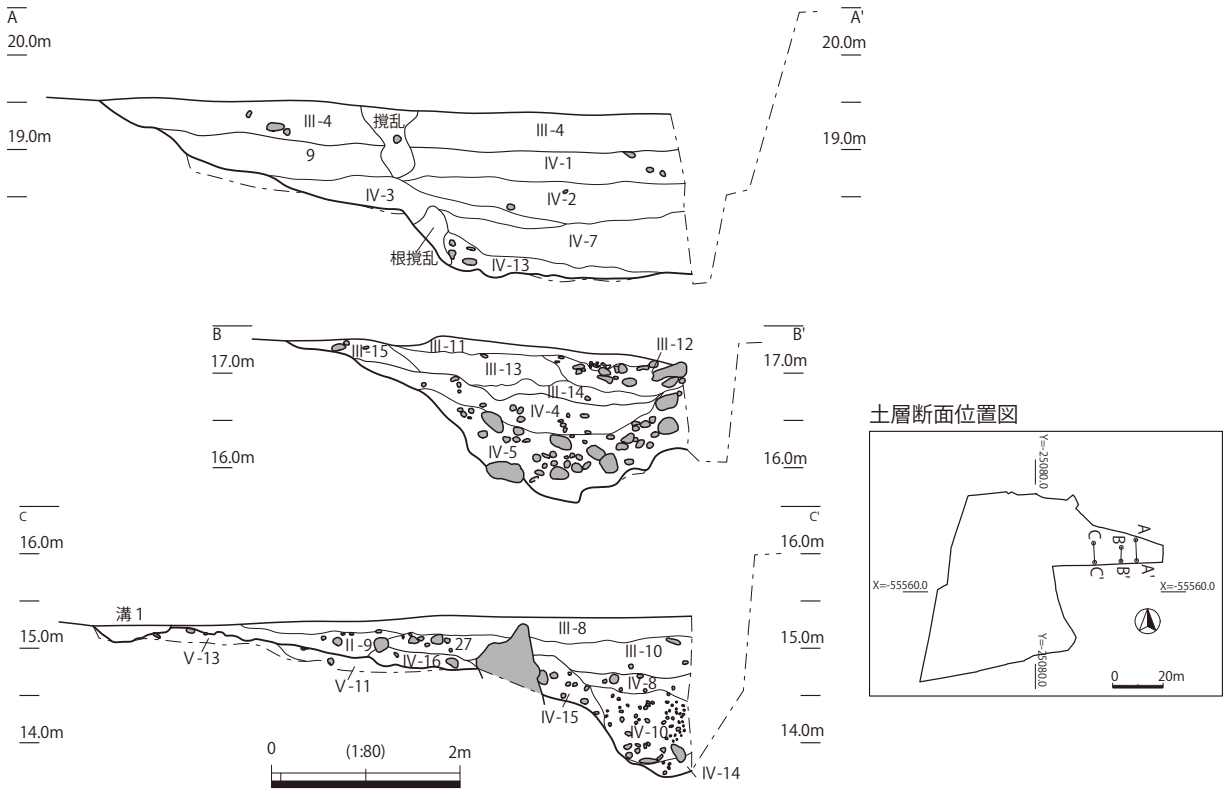
第６図　調査前地形測量図



第７図　調査区中央土層断面図（１）



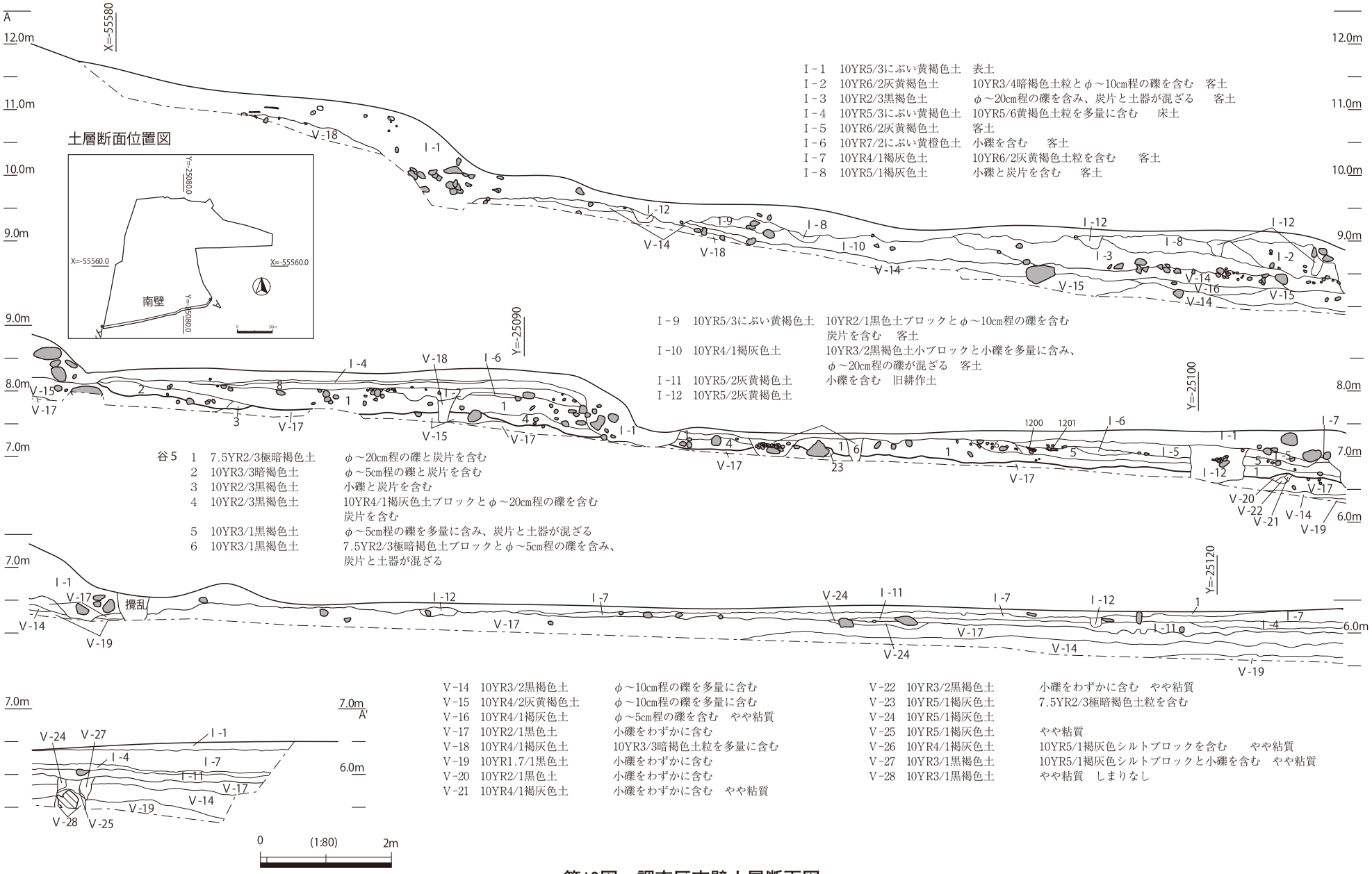
第８図　調査区中央土層断面図（２）



調査区土層断面図（３）

Ⅲ-1　10YR3/4暗褐色土　φ1cm程の礫を少量含む　炭粒を少量含む
Ⅲ-2　10YR3/4暗褐色土　φ1～5cm程の礫を少量含む　炭粒を少量含む
Ⅲ-3　10YR3/4暗褐色土　φ1～5cm程の礫を少量含む　炭粒を少量含む　Ⅲ-2よりしまり強
Ⅲ-4　10YR3/4暗褐色土　φ1～5cm程の礫を少量含む　炭粒を少量含む　Ⅲ-3より色調が僅かに明るい
Ⅲ-5　10YR3/4暗褐色土　φ5～10cm程の大きめの礫をまばらに含む　炭粒を少量含む
Ⅲ-6　10YR3/4暗褐色土　φ5～11cm程の大きめの礫をまばらに含む　炭粒を少量含む　Ⅲ-5より粘性強
Ⅲ-7　10YR3/4暗褐色土　φ5～20cm程の礫を多量に含む　炭粒を少量含む
Ⅲ-8　10YR3/4暗褐色土　φ1～2cm程の礫を少量含む　炭粒を少量含む
Ⅲ-9　10YR3/4暗褐色土　φ1～10cm程の礫を少量含む　炭粒を少量含む
Ⅲ-10　10YR3/4暗褐色土　φ1～10cm程の礫を含む　炭粒を少量含む
Ⅲ-11　10YR3/4暗褐色土　φ1～2cm程の礫を少量含む　炭粒を少量含む
Ⅲ-12　10YR3/4暗褐色土　φ5～20cm程の礫を多量に含む　炭粒を少量含む
Ⅲ-13　10YR3/4暗褐色土　φ1～5cm程の礫を少量含む　炭粒を少量含む
Ⅲ-14　10YR3/4暗褐色土　φ1～5cm程の礫をわずかに含む　炭粒を少量含む
Ⅲ-15　10YR3/4暗褐色土　φ1～10cm程の礫を少量含む　炭粒を少量含む　Ⅲ-13よりしまり強
Ⅲ-16　10YR3/4暗褐色土　φ5～10cm程の礫を含む　粘性やや強
Ⅳ-1　10YR3/4暗褐色土　φ5～20cm程の大きめの礫を多く含む
Ⅳ-2　10YR3/4暗褐色土　φ5～20cm程の大きめの礫を多く含む　Ⅳ-1よりしまり、粘性強
Ⅳ-3　10YR3/4暗褐色土　φ1～5cm程の礫を含む　Ⅳ-2よりしまり強
Ⅳ-4　10YR3/4暗褐色土　φ5～10cm程の礫を多く含む　炭粒を多く含む
Ⅳ-5　10YR3/4暗褐色土　φ10～20cm程の礫を密に含む　φ60cmを超える礫も多い
Ⅳ-6　10YR3/4暗褐色土　φ5～10cm程の礫を多く含む　しまりなし
Ⅳ-7　10YR3/4暗褐色土　φ5～10cm程の礫をまばらに含む　Ⅳ-2よりしまり強
Ⅳ-8　10YR3/4暗褐色土　φ5～10cm程の礫を密に含む　炭粒を少量含む
Ⅳ-9　10YR3/4暗褐色土　φ5～10cm程の礫を多く含む　炭粒を含む　Ⅷ-8に類似
Ⅳ-10　10YR3/4暗褐色土　φ5～10cm程の礫を密に含む
Ⅳ-11　10YR3/4暗褐色土　φ1～5cm程の礫を密に含む　地山の黒色土をブロック状にを含む　粘性やや強
Ⅳ-12　10YR3/4暗褐色土　φ5～10cm程の礫を含む　炭粒や土器片はほとんど含まない
Ⅳ-13　10YR3/3暗褐色土　φ1～15cm程の礫を含む　地山の黒色土ブロックが混ざる
Ⅳ-14　10YR3/3暗褐色土　φ5～10cm程の礫を密に含む　地山の黒色土ブロックを含む
Ⅳ-15　10YR3/4暗褐色土　φ5～10cm程の礫を多く含む　Ⅳ-10よりしまり強
Ⅳ-16　10YR3/3暗褐色土　φ1～10cm程の礫を少量含む　地山の黒色土ブロックをわずかに含む　30に類似
Ⅵ-1　10YR2/1黒色土　小礫を含む
Ⅴ-2　10YR2/2黒褐色土　φ～10cm程の礫を含み、φ～40cm程の礫も混じる　やや粘質
Ⅴ-3　10YR4/1褐灰色土　小礫を多く含む　やや粘質
Ⅴ-4　10YR2/1黒色土　φ～10cm程の礫を含む
Ⅴ-5　10YR2/3黒褐色土　φ～15cm程の礫を多く含む
Ⅴ-6　10YR1.7/1黒色土　φ～30cm程の礫を含む
Ⅴ-7　10YR3/2黒褐色土　φ～15cm程の礫を多く含む
Ⅴ-8　10YR3/1黒褐色土　φ～10cm程の礫を多く含む
Ⅴ-9　10YR2/1黒色土　φ～5cm程の礫を含む
Ⅴ-10　10YR4/2灰黄褐色土　φ～5cm程の礫を多量に含む
Ⅴ-11　10YR3/2黒褐色土　φ～10cm程の礫を多く含む
Ⅴ-12　10YR2/3黒褐色土　φ～10cm程の礫を多く含む
Ⅴ-13　10YR4/4褐色土　φ～10cm程の礫を含み、φ60cmを超える大礫も混じる

第９図　斜面部土層断面



第10図　調査区南壁土層断面図

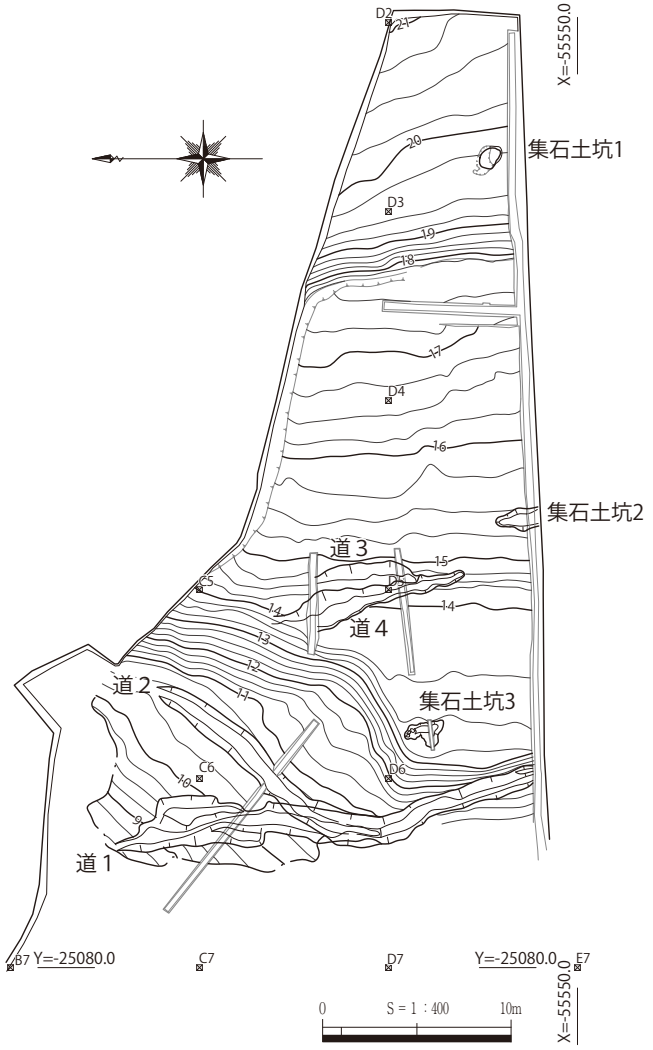
層が厚く堆積する。一方で、斜面部は後世の耕作や流出が著しく、北半部分では表土直下に白兎円礫層が露出してしまっている。

基本層序についてはすべてに通し番号の層名を付しており、以下に各層の特徴を示す。

Ⅰ層：表土、もしくは耕作土で、近現代の造成土も当層に含めている。

Ⅱ層：暗褐色土(10ＹＲ3/4)。斜面部の埋没谷(谷１)のみに堆積する、近世の遺物包含層である。ローム層を母材とする流土堆積で、15層に細分される。小礫を含む層もあるが、Ⅲ・Ⅳ層に比べ粒径が小さい。層厚は最大で80㎝を測る。Ⅱ層堆積範囲ではその下面が第１遺構面となり、時期は中・近世と考えられる。

Ⅲ層：暗褐色土(10ＹＲ3/4)。Ⅱ層と同様に斜面部の谷にのみ堆積する、古墳時代後期から古代の遺物包含層である。ローム層を母材とする流土堆積で、16層に細分される。基盤層に由来し、径５～10㎝を中心とする亜角礫を多く含んでいる。層厚は最大で１ｍを測る。



第11図　第１遺構面遺構配置図

Ⅳ層：暗褐色土(10ＹＲ3/3～3/4)。Ⅱ・Ⅲ層と同様に斜面部の谷にのみ堆積する、古墳時代前期から後期の遺物包含層である。ローム層を母材とする流土堆積で、16層に細分される。径５～20㎝を中心とする亜角礫を多量に含み、一抱え以上の巨石も流入している。層厚は最大で1.1ｍを測る。Ⅳ層堆積範囲ではその下面が第２遺構面となり、時期は弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる。

Ⅴ層：黒色土(10ＹＲ2/1)～褐色土(10ＹＲ4/4)。無遺物層で、地山である。ローム層やクロボクを母材とする、流土堆積である。薄層が互層状に堆積しており、26層まで確認している。各層とも亜角礫を一定量含んでいる。

２　調査結果の概要

乙亥正大角遺跡では、縄文時代から近世に至る幅広い時期の遺構や遺物が確認された。なかでも弥生時代終末から古墳時代初頭にかけては斜面を造成した段状遺構に掘立柱建物が確認され、当該期の土器が出土遺物の大半を占めるなど、周囲には丘陵上や斜面を中心に当該期の集落が営まれたと考えられる。また、中世から近世にかけての出土遺物もやや目立ち、各遺構の性格を具体的に示すことはできないが、平坦部は屋敷地、斜面部は墓地としての土地利用が窺える。

遺跡全体としての遺構密度は低く、出土遺物も少ない。

第12図　第２遺構面遺構配置図

第２節　第１遺構面

１　概　要

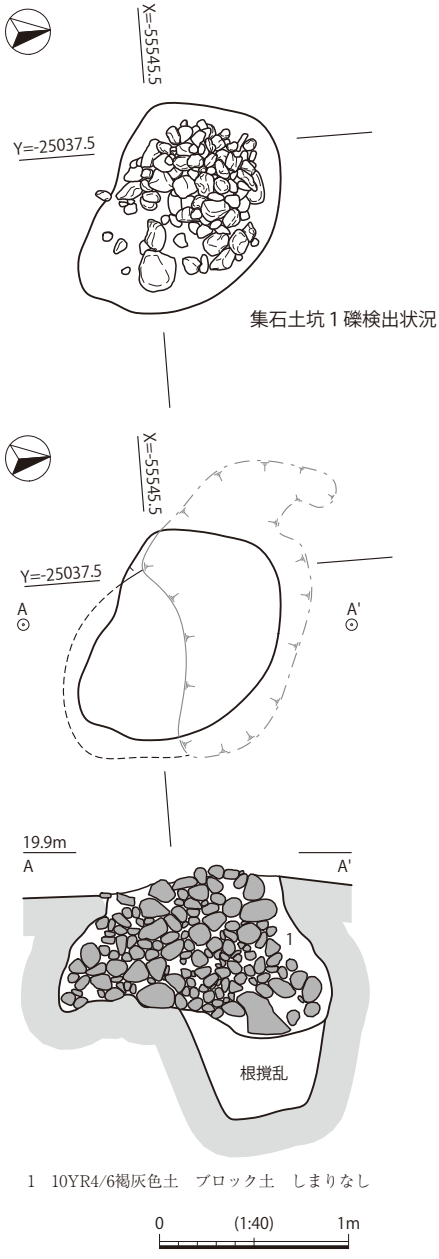
第１遺構面は、調査区東側の斜面部のみで確認し、古墳時代後期の包含層であるⅢ層上面が遺構検出面となる。斜面部には狭小な谷筋(埋没谷１)が入り込んでおり、埋没谷１が完全に埋没した後に形成された緩斜面を利用して遺構が築かれている。

検出した遺構は、集石土坑３基、道路遺構４基である(第11図)。遺構の時期は出土遺物が僅少であるため明確でないが、いずれも近世以降に帰属する可能性が高い。集石土坑２、３は構造や特徴が類似することから同一の性格を想定しうるが、性格は不明である。道路遺構は素掘りの溝のみの、いずれも簡素なつくりである。丘陵裾から斜面を横切り、延伸することから山道としての性格が考えられる。調査地内やその周辺では五輪塔が数多く点在し、少なくとも近世以降は墓地としての土地利用が考えられることから、平野部に位置する集落から墓地へと通じる道であった可能性もあろう。

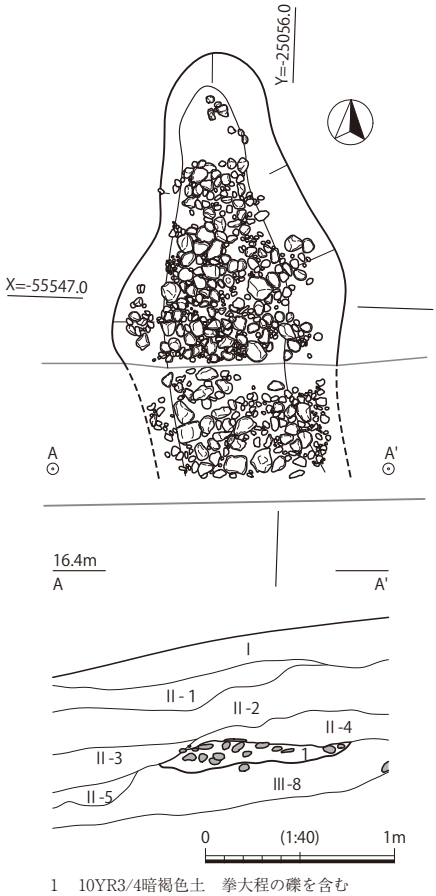
２　集石土坑

集石土坑１（第13･16図　PL３－１・２、18）

Ｄ２グリッド、標高約19.7mの斜面部に位置する。平面形はやや歪な楕円形で、断面形はフラスコ状を呈す。規模は長軸1.28m、短軸0.91m、深さ0.85mを測る。底面の最大径は1.43mである。北側底部は樹木根の攪乱を大きく受けている。



第13図　集石土坑１



第14図　集石土坑２

埋土は褐色土の単層で、遺構内に多量の亜角礫が充填されている。礫は径50㎝を超えるものもあるが、ほとんどが径15㎝以下の拳大から掌大のものが主体を占める。壁面に石組のような構築物は確認できない。出土遺物は青磁碗（１）が出土している。詳細な時期は特定できないが、埋土の状況等から、近世に帰属する可能性が高い。遺構の性格は不明である。

1　10YR4/6褐灰色土　灰褐色土ブロックを含む　しまりややあり

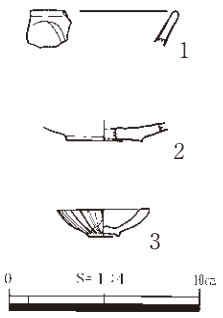
第15図　集石土土坑３

集石土坑２（第14図　PL３-３）

Ｄ４グリッド、標高約15.4～15.5ｍの斜面部に位置する。遺構の南半は調査区外の南側に延びる。10ｍ程離れた位置にある土坑３と遺構の規模、礫の充填状況が類似している。平面形は土坑、もしくは溝状で、断面は皿状を呈する。規模は長軸2.26ｍ以上、短軸1.20ｍ、深さ0.14ｍを測る。埋土は暗褐色土で、しまりはやや強い。遺構内には径10㎝以下の小礫が多量に敷き詰められている。溝状に延伸するとすれば、石敷の道路遺構の可能性もあるが、明確にしえない。遺物は出土せず詳細な時期は特定できないが、検出層位から近世に帰属する遺構と考えられる。

集石土坑３（第15図　PL４-１）

Ｄ５グリッド、標高約13.4～13.5ｍの斜面部に位置する。10ｍ程離れた位置にある集石土坑２と類似し、関連性の高い遺構と考えられる。平面形は不整形で、断面形は浅い皿状を呈す。規模は長軸2.19ｍ、短軸0.77～1.56ｍ、深さ0.07ｍを測る。褐色系の埋土で、しまりはやや強い。遺構内には径10㎝以下の小礫が多量に敷き詰められた状態で出土している。遺物は出土せず詳細な時期は特定できないが、検出層位から近世に帰属する遺構と考えられる。



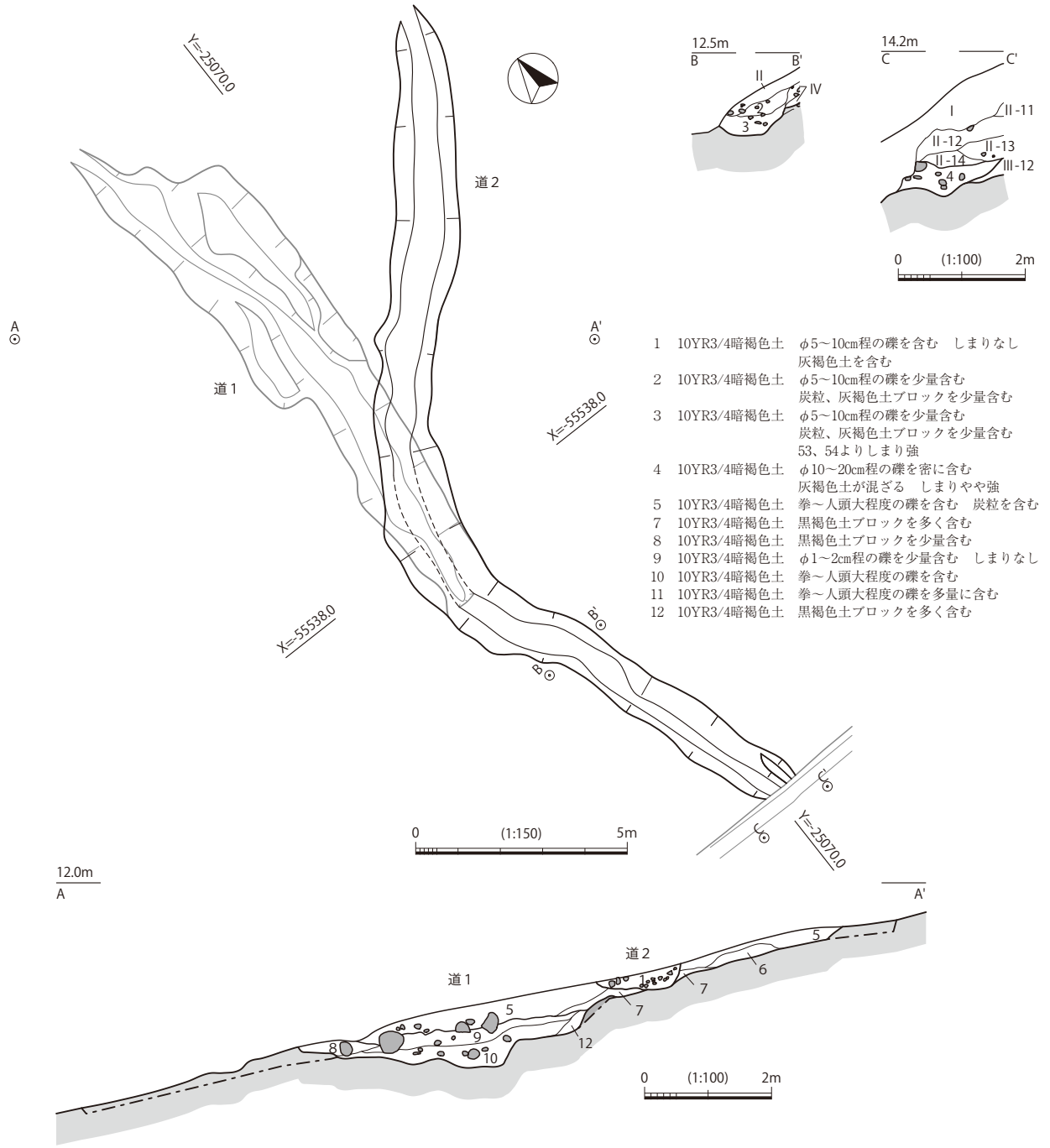
第16図　集石土坑１・道１出土遺物

３　道路遺構

道１・２（第16・17図　PL４-２・３、12-１・２）

Ｂ５・６、Ｃ５・６、Ｄ５・６グリッド、標高約8.3～12.2ｍの斜面裾部から平坦部かけて位置する。道１・２は重複関係にあり、道１から道２へと変遷する。古段階の道１が調査区中央壁から北北西方向に斜面下方へほぼ直線状に下っていくのに対して、新段階の道２は途中で屈曲し、斜面裾の地形に沿うように掘削されている。

道１・２とも素掘りの溝のみで、簡素なつくりである。検出した長さは約22ｍで、道１では幅0.95～2.65ｍ、深さ0.42ｍ、道２では幅0.96～1.83ｍ、深さ0.36ｍを測る。埋土はしまりの強い暗褐色土で拳大から人頭大の礫を多く含む。溝底面では一定せず、図示していないが、部分的に硬化している部分も確認できた。遺物は土器、陶磁器片が僅かに出土している。２は土師器皿、３が磁器の紅皿である。詳細な時期は特定できないが、斜面を登下する近世以降の山道としての性格が考えられる。



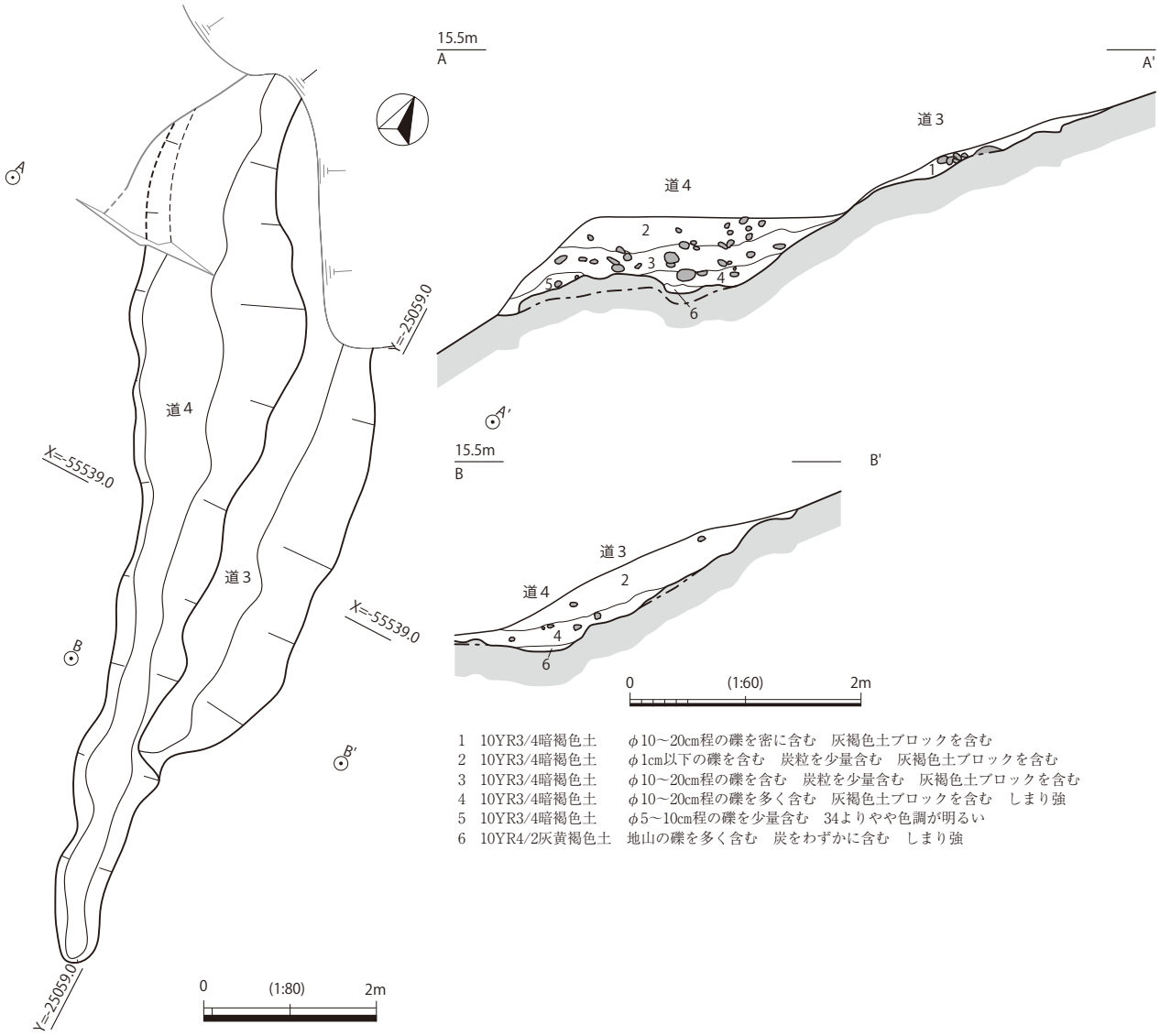
1　10YR3/4暗褐色土　φ5～10cm程の礫を含む　しまりなし
　　灰褐色土を含む
2　10YR3/4暗褐色土　φ5～10cm程の礫を少量含む
　　炭粒、灰褐色土ブロックを少量含む
3　10YR3/4暗褐色土　φ5～10cm程の礫を少量含む
　　炭粒、灰褐色土ブロックを少量含む
　　53、54よりしまり強
4　10YR3/4暗褐色土　φ10～20cm程の礫を密に含む
　　灰褐色土が混ざる　しまりやや強
5　10YR3/4暗褐色土　拳～人頭大程度の礫を含む　炭粒を含む
7　10YR3/4暗褐色土　黒褐色土ブロックを多く含む
8　10YR3/4暗褐色土　黒褐色土ブロックを少量含む
9　10YR3/4暗褐色土　φ1～2cm程の礫を少量含む　しまりなし
10　10YR3/4暗褐色土　拳～人頭大程度の礫を含む
11　10YR3/4暗褐色土　拳～人頭大程度の礫を多量に含む
12　10YR3/4暗褐色土　黒褐色土ブロックを多く含む

第17図　道１・２

道３・４（第18図　PL５－１）

Ｃ４・５、Ｄ４・５グリッド、標高13.5～14.8mの斜面部に位置する。道路遺構４はテラス４に重複し、テラス４を切っている。道３、４は重複関係にあると考えるが、土層断面では同一の埋土で埋没しており、先後関係は明らかにしえない。

道３・４とも素掘りの溝のみで、簡素なつくりである。道３は長さ8.00mでほぼ南北方向に延び、最大幅1.38mで、深さ0.16mを測る。道４は長さ10.44mで道３よりやや西方向に振り、最大幅2.06m、深さ0.24mを測る。埋土はいずれも暗褐色土で、径10～20cmの礫を多く含でいる。道４の最下層にあたる６層はしまりが強く、硬化面を形成している。遺物は陶磁器片が僅かに出土しているが、詳細な時期は特定できない。斜面を登下する近世以降の山道と考えられる。



第18図　道３・４

第３節　第２遺構面

１　概　要

第２遺構面は、無遺物層(地山)であるⅤ層上面が遺構検出面となる。遺構は調査区全体に及ぶが、散漫な分布状況を示す。古墳時代前期のテラス４基、土坑１基、中世の土坑１基、時期不明の掘立柱建物跡１棟、土坑４基を検出した他に埋没谷５カ所を確認した(第12図)。遺物は古墳時代前期の土器が多く出土しており、とくに、斜面部では当該期の段状遺構が雛壇状に構築されていた可能性が高い。平野部を挟んだ西側には弥生時代後期から古墳時代前期の拠点的集落と考えられる乙亥正屋敷廻遺跡が位置しており、本遺跡はその周囲に営まれた小規模な集落とみることができる。

２　段状遺構

テラス１(第19図　PL７－１)

Ｄ２グリッド、標高19.0～19.8mの斜面部、埋没谷１へ下る南西斜面に位置する。テラス２と重複し、テラス２に先行する。地山を削り出し平坦面を造成しているが、平坦面の大部分は埋没谷１の堆

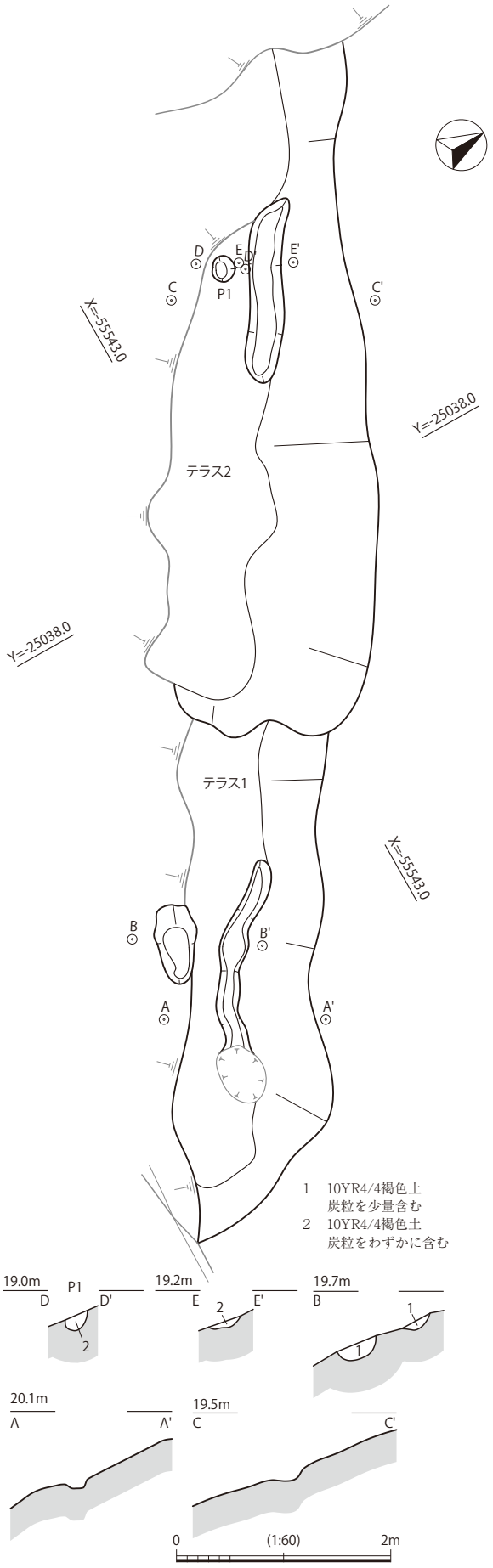
積によって流出し遺存していない。規模は長さ4.36ｍ、幅0.43～0.76ｍを測る。平坦面ではピット１基と溝１条を検出している。Ｐ１は長軸0.74ｍ、短軸0.40ｍ、深さ0.16ｍを測る。埋土は褐色土の単層で、柱痕跡等は確認できない。溝は壁際に沿うように検出されており、部分的ながら周壁溝と考えられる。規模は長さ1.77ｍ、幅0.18～0.28ｍ、深さ0.06ｍである。出土遺物は、埋土中から土師器の細片が出土しているが図化し得なかった。検出層位や出土遺物から帰属時期は古墳時代前期と考えられる。

テラス２（第19図　PL７－１）

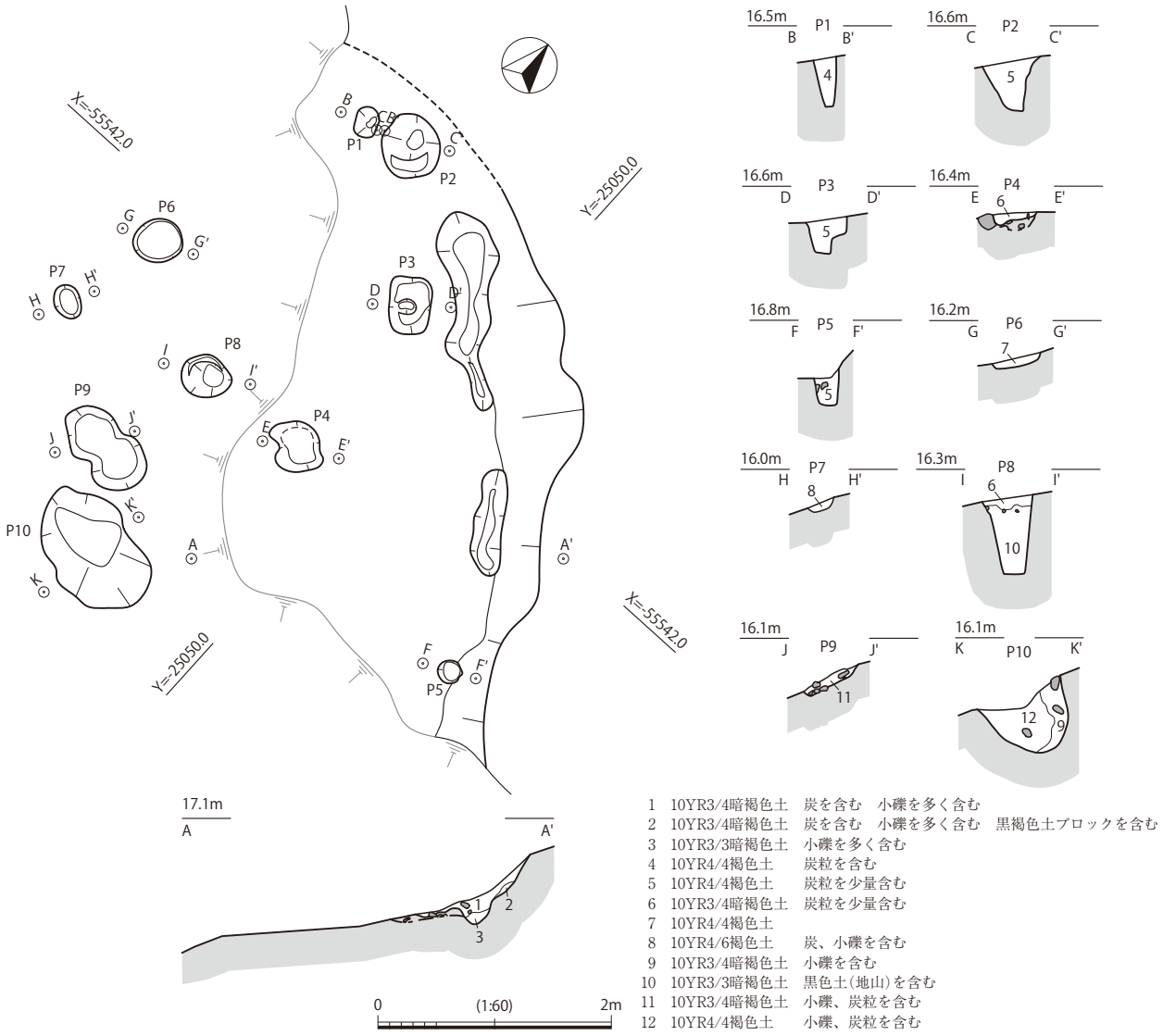
Ｃ２・Ｄ２・３グリッド、標高18.6～19.5ｍの斜面部、谷へ下る南西斜面に位置する。テラス１と重複し、テラス１に後出する。埋没谷１の堆積によって平坦部の遺存状況が極めて悪い。規模は長さ4.48ｍ、幅0.74～1.20ｍを測る。平坦面ではピット１基と溝１条を検出している。ピットは径0.21～0.24ｍ、深さ0.16ｍを測る。埋土は褐色土で、柱痕跡等は確認できない。溝は壁面に沿って延びており、部分的ながら周壁溝と考えられる。規模は長さ1.74ｍ、幅0.30ｍ、深さ0.07ｍである。遺物は出土していない。埋土がテラス１と類似することや検出層位から、古墳時代前期の段状遺構と考えられる。

テラス３（第20図　PL７－２）

Ｃ４、Ｄ３・４グリッド、標高16.1～16.7ｍの斜面部に位置する。南側は埋没谷１によって流出し遺存していない。平面形は弧状で、規模は長さ6.00ｍ、最大幅2.38ｍを測る。テラス平坦面及び周辺でピット８基、土坑２基、溝２条を検出している。溝２条は壁際に位置し、部分的ながら周壁溝と考えられる。溝の幅は0.13～0.50ｍで、深さ0.03～0.18ｍである。ピットは径0.22～0.56ｍ、深さ0.08～0.68ｍと規模にばらつきがあり、配列からも上屋は復元できない。埋土も褐色土の単層のものが多く、柱痕跡等は確認できない。遺物は土師器の細片が出土しているが、図化し得なかった。検出層位や出土遺物から時期は古墳時代前期と考えられる。



第19図　テラス１・２



第20図　テラス３

テラス４（第21図　PL８－１）

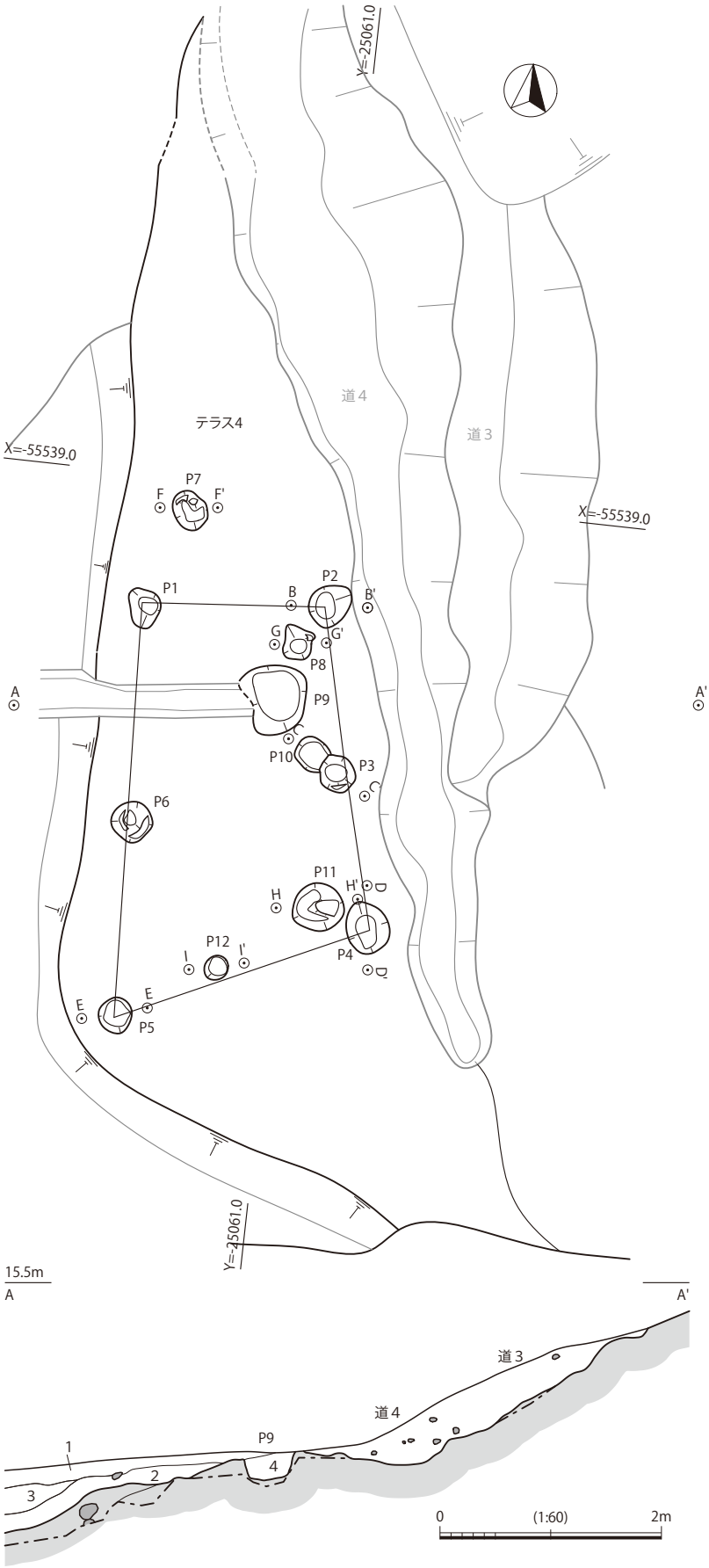
Ｃ５・Ｄ４・５グリッド、標高13.4～14.0mの斜面部に位置する。南側は埋没谷１によって流出し、壁面の大部分は道３・４によって切られている。規模は長さ10.9m、最大幅3.25mで、比較的広い平坦面が造成されている。平坦面では桁行２間(2.95～3.70m)、梁行１間(1.60～2.35m)の掘立柱建物跡が検出されている。Ｎ－４°－Ｗの南北棟で、平面積は5.27㎡を測る。柱間寸法は1.45～2.35mとかなりばらつきがある。柱穴は径0.3～0.45mの円形を呈し、深さは0.27～0.46mと底面レベルは一定しない。柱痕跡も明瞭に確認できない。その他柱穴以外にも６基のピットが検出されている。遺物は土師器の細片が出土しているが、図化し得なかった。

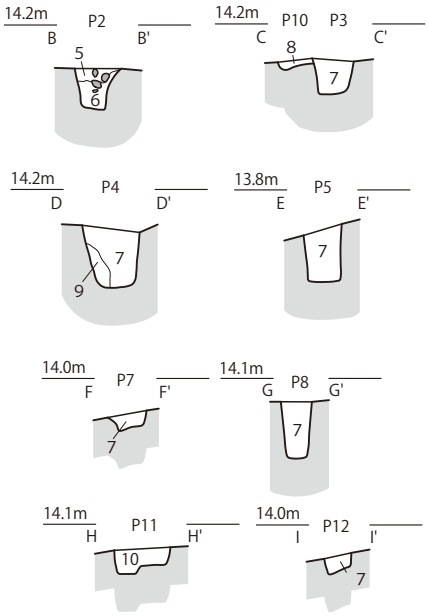
検出層位や出土遺物から帰属時期は古墳時代前期と考えられる。

３　掘立柱建物跡

掘立柱建物１（第22図　PL８－２～４、20－１）

Ｃ９グリッド、標高5.9～6.1mの平坦部に位置する。桁行２間(3.7～3.8m)以上、梁行１間(2.4～2.5m)の東西棟である。方位はＮ－80°－Ｗで、平面積は9.5㎡以上である。柱掘方は直径0.25～





1　10YR3/4暗褐色土
　φ1～5cm程の礫を少量含む　炭粒を少量含む
2　10YR3/4暗褐色土
　φ10～20cm程の礫を少量含む
　炭粒を少量含む
3　10YR3/4暗褐色土
　φ1～5cm程の礫を少量含む　炭粒を多く含む
4　10YR4/6褐色土
　炭粒をわずかに含む　灰褐色土ブロックを含む
　しまり強
5　10YR4/6褐色土　　拳大の礫を含む
6　10YR4/6褐色土　　粘性あり
7　10YR4/6褐色土　　炭粒を少量含む
8　10YR4/6褐色土　　炭粒を少量含む 粘性強
9　10YR4/6褐色土　　12よりしまり強
10　10YR4/6褐色土　　地山ブロックを含む

第21図　テラス４

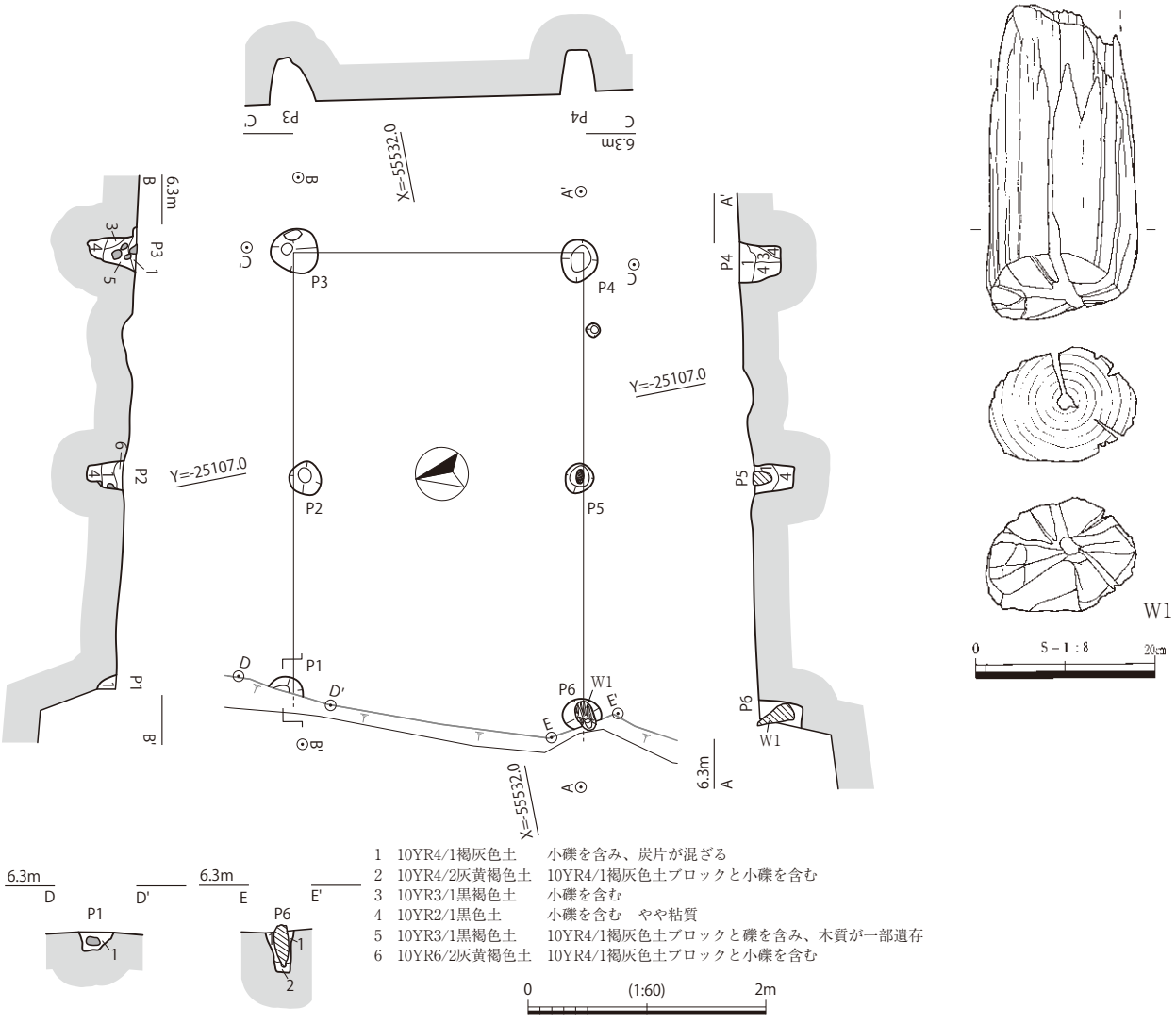
0.40mの円形で、深さは最大で0.41mを測る。Ｐ５・６には柱材が遺存しており、遺存状態の良いＰ６Ｗ１の柱径は14cmである。Ｐ３にも柱材の一部とみられる木質が遺存していた。柱穴埋土は黒色から褐色系で小礫を含んでおり、いずれの柱穴にも炭片を含む褐灰色のブロック土が混ざる。遺物はＰ５・６から土師器細片が僅かに出土しているが、遺構の時期を示すものではない。

出土遺物から建物の時期を特定できないが、Ｗ１について放射性炭素年代測定したところ、２σ暦年代範囲で1307calAD-1363calAD(70％)という結果が得られており、14世紀頃の建物跡と考えられる。

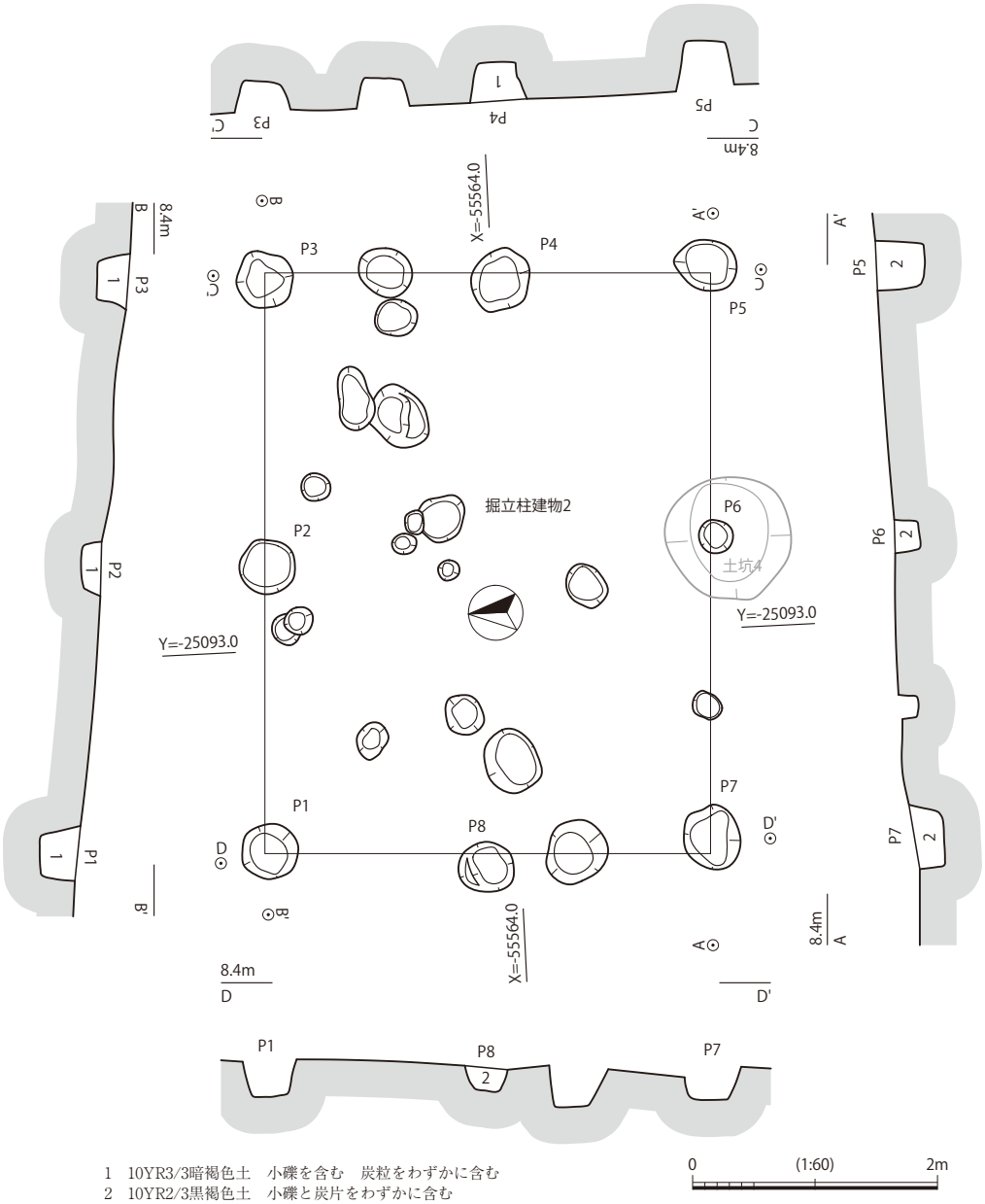
掘立柱建物２（第23図、PL９－１）

Ｆ８グリッド、標高7.6～8.2mの平坦部に位置する。Ｐ６は土坑４と重複し、土坑６に後出する。桁行２間(4.7m)、梁行２間(3.6m)の東西棟である。方位はＮ－88°－Ｅで、平面積は16.92㎡を測る。柱掘方は径0.28 ～0.53mの円形で、深さは最大で0.40mを測る。柱穴埋土は黒褐色、もしくは暗褐色の単層で、小礫と炭片を含んでいる。

Ｐ６を除く各柱穴から須恵器、土師器の細片が出土しているが、遺構の時期を示すものではない。建物の時期は詳細に特定できないが、土坑との重複関係から古墳時代以降と考えられる。



第22図　掘立柱建物１



第23図　掘立柱建物２

４　土坑

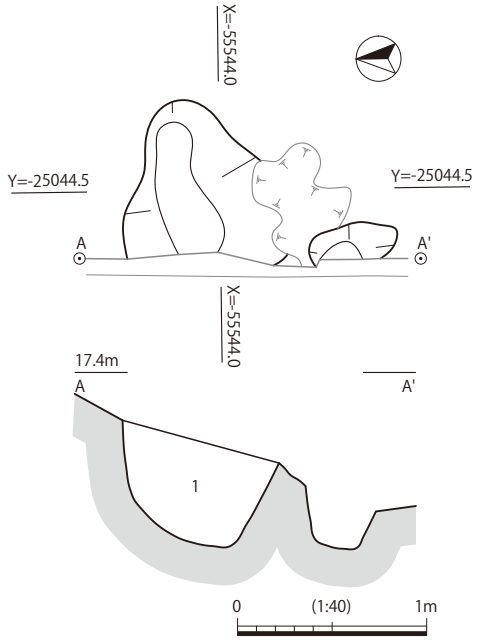
土坑１（第24図）

Ｄ３グリッド、標高17.0mの斜面部に位置する。西側はトレンチにより遺存していない。平面形は長軸1.22m、短軸0.88mの不整形を呈する。検出面からの深さは0.54mを測る。埋土は褐色土の単層で、遺物は出土していない。

遺構の時期、性格とも不明である。

土坑２（第25図　PL９－２）

Ｄ６・７グリッド、標高9.2～10.8mの丘陵裾の緩斜面に位置する大土坑である。斜面下方の遺構西端は削平され遺存していない。平面形はやや歪ながら楕円形を呈し、規模は長軸8.18m、短軸3.86mを測る。検出面から深さは最大0.5m測り、遺存状態の最も良い北壁は一部、オーバーハングする箇所が見られる。埋土は褐色系の単層である。底面からピットが５基確認されているが、本土坑に伴うものかは不明である。遺物は図化し得なかったが、青磁などの陶磁器や土師器の細片が僅かに出土



1　10YR4/4褐色土　φ1～5㎝程の礫を多く含む　炭粒を少量含む

第24図　土坑１

している。

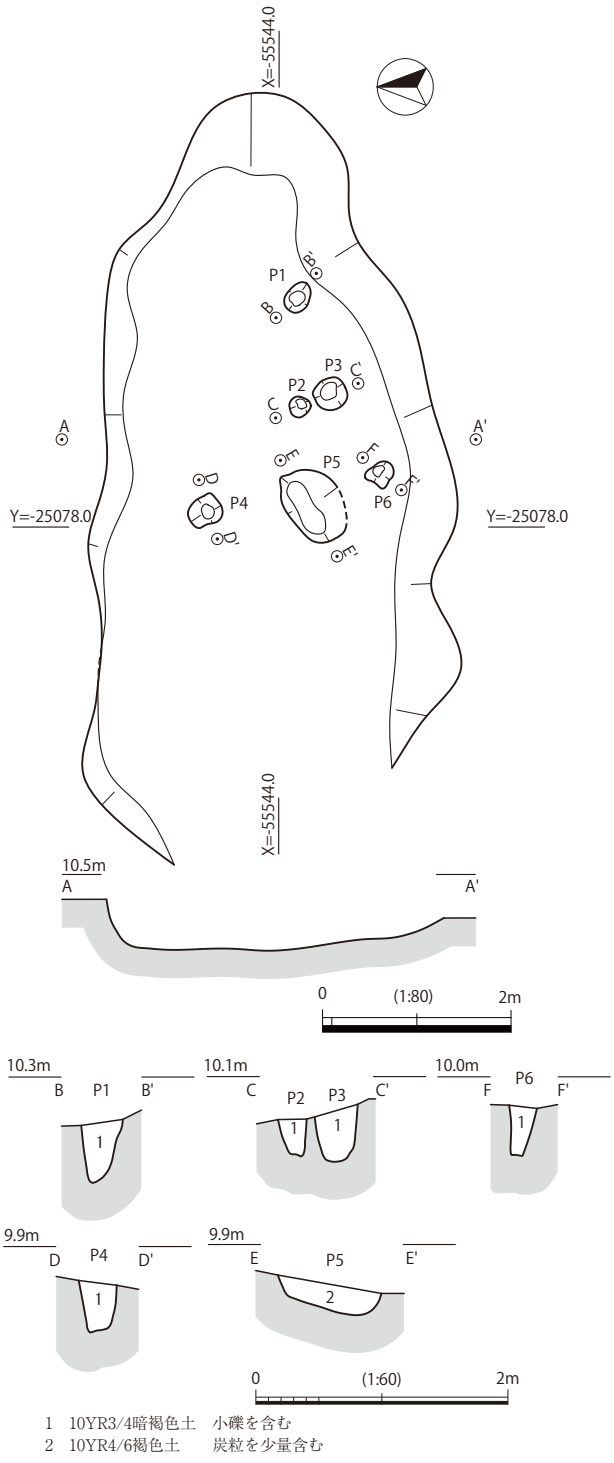
出土遺物から中世に帰属する遺構と考えられるが、性格は不明である。

土坑３（第26図　PL９－３）

Ｄ８グリッド、標高7.1mの平坦部に位置する。平面形は長軸1.50m、短軸1.04mのやや歪な楕円形で、検出面からの深さは最大で0.44mを測る。埋土は黒褐色の単層で、炭片を含んでいる。底面には大型の礫が落とし込まれている。埋土中から土師器、須恵器の細片が僅かに出土した。遺構の時期は不明である。

土坑４（第27図）

Ｆ８のグリッド、標高7.8mの平坦部に位置する。掘立柱建物２Ｐ６と重複し、掘立柱建物２に先行する。



1　10YR3/4暗褐色土　小礫を含む
2　10YR4/6褐色土　炭粒を少量含む

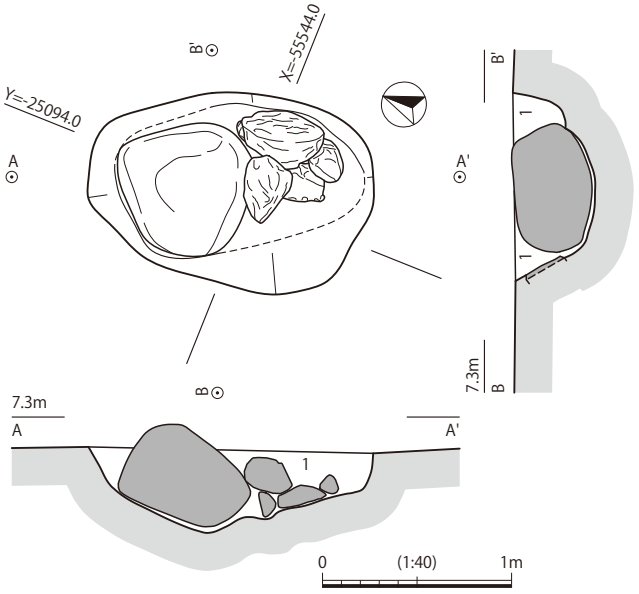
第25図　土坑２

平面形は径１ｍの円形で、検出面からの深さは最大で１ｍを測る。埋土は９層に分けられ、上層、中層、下層に大別することができる。上層は黄褐色系で炭片を含み、中層と下層は黒色から暗褐色系で径15㎝以下の礫を含んでいるが、下層は粘質が強くなり、さらに下層の下位には砂粒を多く含んでいる。遺物は埋土中から弥生土器、土師器の細片が出土している。

最下層に小礫と砂粒を多く含み、湧水が見られることから、井戸であった可能性も考えられる。遺構の時期は詳細に特定できないが、古墳時代前期以前の可能性がある。

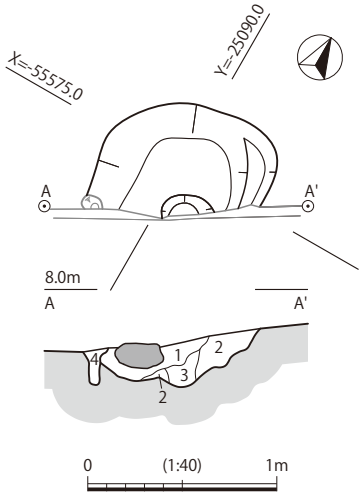
土坑５（第28図）

Ｇ７・８グリッド、標高7.6～7.8mの平坦部に位置する。南側はトレンチ掘削により消失しており、



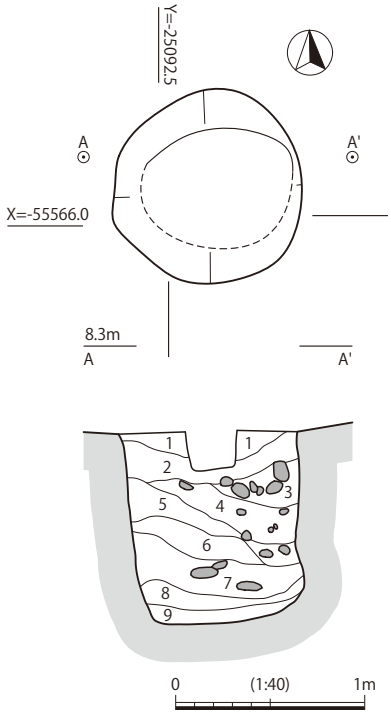
1　10YR3/2黒褐色土　小礫と炭片を含む

第26図　土坑３



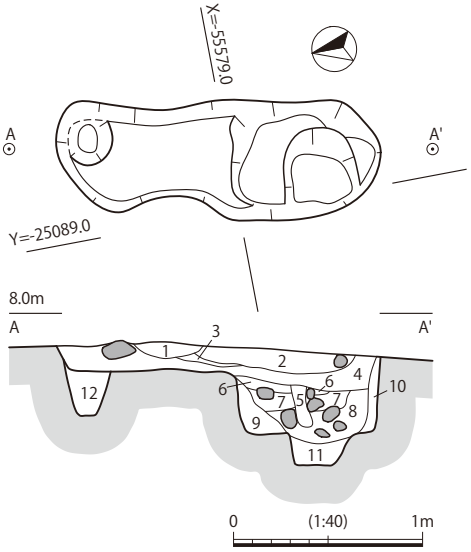
1　10YR4/1褐灰色土　10YR3/1黒褐色土ブロックと小礫を含む
2　10YR3/1黒褐色土　10YR4/1褐灰色土ブロックとφ～5cm程の礫を含む
3　10YR3/2黒褐色土　小礫を含む
4　10YR4/1褐灰色土　小礫を含む

第28図　土坑５



1　10YR4/3にぶい黄褐色土　小礫と炭片を含む
2　10YR4/2灰黄褐色土　小礫と炭片を含む
3　10YR3/1黒褐色土　φ～15cm程の礫を含む
4　10YR3/2黒褐色土　φ～10cm程の礫を含む
5　10YR3/3暗褐色土　φ～10cm程の礫を含む
6　10YR2/1黒色土　φ～15cm程の礫を含む　やや粘質
7　10YR2/3黒褐色土　φ～15cm程の礫を含む　やや粘質　しまりなし
8　10YR4/1褐灰色土　φ～5cm程の礫を含む　やや粘質
9　10YR3/1黒褐色土　φ～5cm程の礫と砂粒を多く含む　やや粘質

第27図　土坑４



1　10YR5/1褐灰色土　小礫を含む
2　10YR4/1褐灰色土　10YR3/4暗褐色土粒とφ～5cm程の礫を含む
3　10YR4/1褐灰色土　10YR3/4暗褐色土粒をわずかに含む
4　10YR3/1黒褐色土　10YR4/1褐灰色土小ブロックとφ～15cm程の礫を含む
5　10YR4/2灰黄褐色土　やや粘質　しまりなし
6　10YR3/1黒褐色土　φ～3cm程の礫を含む
7　10YR3/1黒褐色土　φ～5cm程の礫を含む　やや粘質　しまりなし
8　10YR2/1黒色土　φ～10cm程の礫を含む　やや粘質
9　10YR2/2黒褐色土　小礫を含む
10　10YR4/1褐灰色土　10YR3/4暗褐色土粒を多量に含む
11　10YR3/2黒褐色土　やや粘質
12　10YR4/1褐灰色土　小礫を含む

第29図　土坑６

南西隅に後世の杭痕跡が認められる。平面形は長軸0.96m、短軸0.6m以上の楕円形と考えられ、検出面からの深さは最大で0.24mを測る。埋土は黒色から黒褐色系を主体に３層に分けられ、地山ブロックを含んでいる。遺物は出土していない。

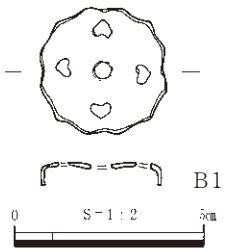
性格、時期ともに不明である。

土坑６（第29･30図　PL10-１）

Ｇ７グリッド、標高7.7mの平坦部に位置する。埋没谷５の埋土掘り下げ中に検出した遺構である。埋土の堆積状況から少なくとも２基の土坑が重複していると考えられる。北側底面でピット群３に含まれるピットを検出している。

古段階の平面形は、長軸0.76m以上、短軸0.64mの楕円形で、検出面からの深さは最大で0.60mを測る。段状に掘り込まれており、埋土は黒褐色系を主体に７層に分けられ、粘性が強く、10cm以下の礫を含んでいる。新段階の平面形は、長軸1.70m、短軸0.46mの歪な隅丸長方と考えられ、検出面からの深さは最大で0.20mを測る。埋土は褐灰色系を主体に４層に分けられ、古段階と同様に礫を含むが粘性は弱い。

古段階の埋土から銅製品（Ｂ１）が出土している。飾金具とみられ、中央に釘穴があり、その周囲に猪目文様の透かしが巡る。出土遺物から中・近世に帰属する遺構と考えられるが、性格は不明である。



第30図　土坑６出土遺物

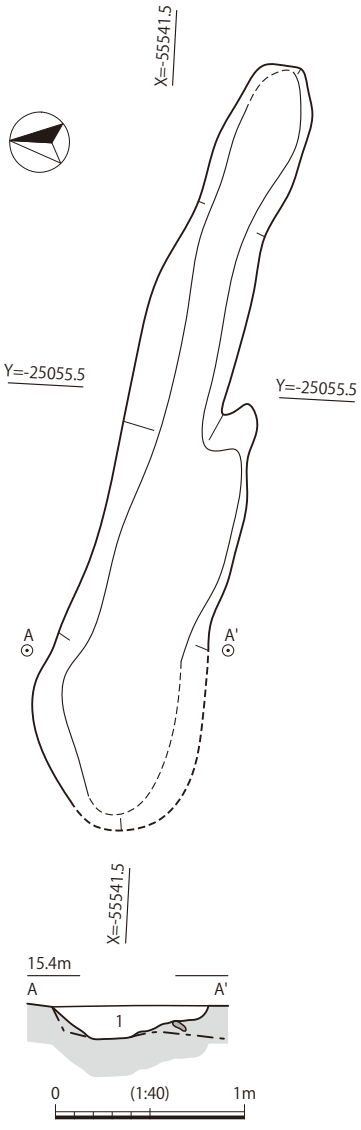
５　溝状遺構

溝１（第31図）

Ｄ４グリッド、標高15.0～15.7mの斜面部に位置する。長さは4.12mで、ほぼ東西方向に延びており、幅0.39～0.79m、深さ0.18mを測る。埋土は暗褐色土で、径１cm以下の礫、灰褐色土ブロックを含む。土層断面では確認できなかったが、溝中央部から北西部で幅が急に拡幅する部分がみられ、２条の溝が重複している可能性もある。出土遺物はないが、埋土や周辺の遺構検出状況から古墳時代前期の遺構の可能性がある。

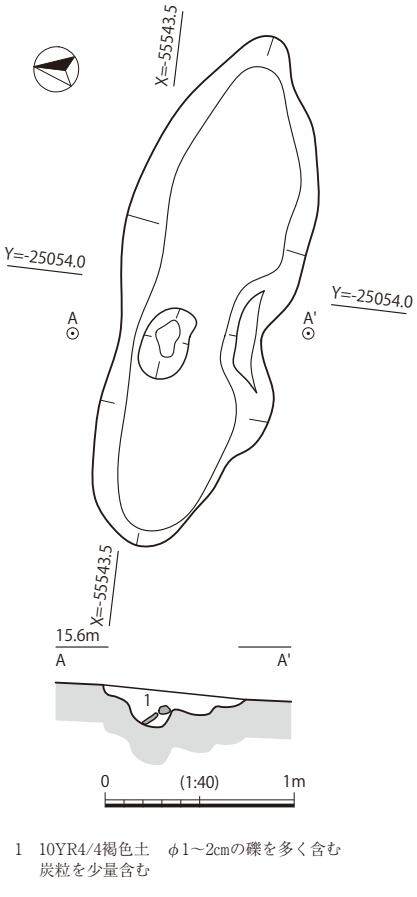
溝２（第32図）

Ｄ４グリッド、標高15.1～15.6m斜面部に位置する。長さは2.78mで、ほぼ東西方向に延びており、幅0.70～0.94m、深さ0.20mを測る。埋土は褐色土で、径２cm以下の礫を多く、炭粒を少量含む。出土遺物はないが、埋土や周辺の遺構検出状況から古墳時代前期の遺構の可能性がある。



1　10YR3/4暗褐色土　φ1cm以下の礫を少量含む
　灰褐色土ブロックを含む

第31図　溝１



1　10YR4/4褐色土　φ1～2cmの礫を多く含む
　炭粒を少量含む

第32図　溝２

６　ピット群

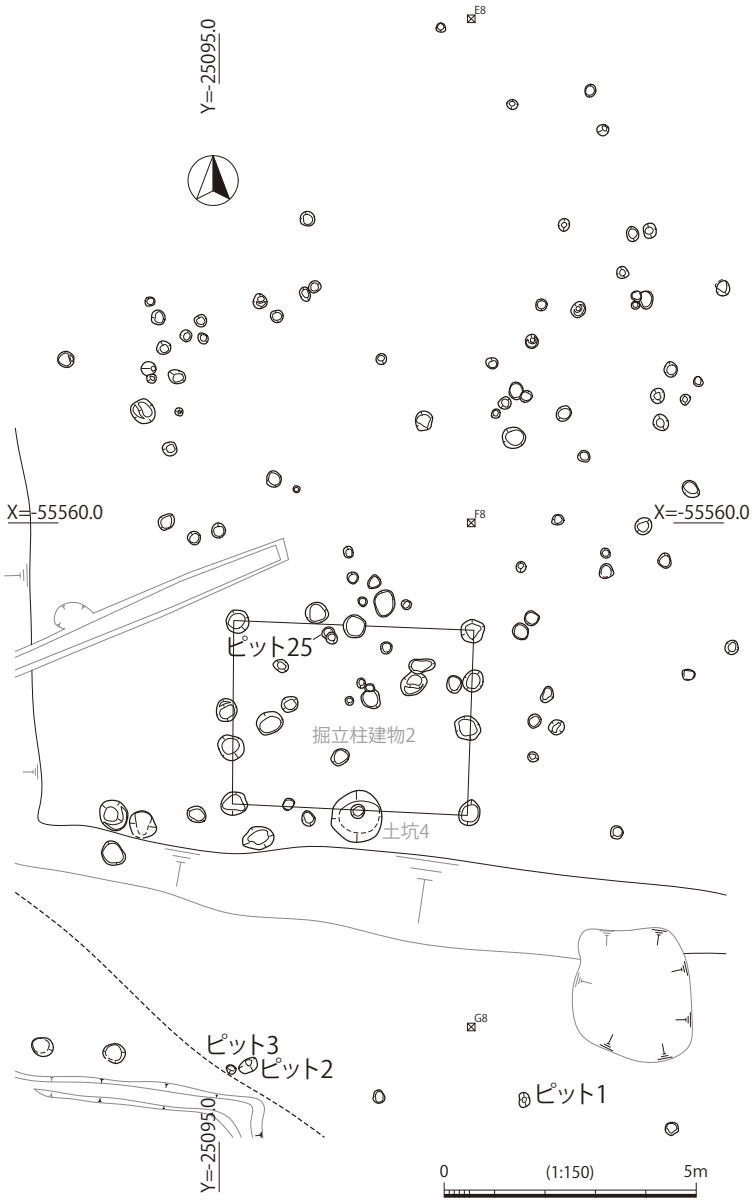
調査区平坦部のほぼ全域で建物に復元できない、数多くのピットを検出している。ここではピットが集中していた箇所をピット群１、ピット群２、ピット群３として記載する。柱材、もしくは杭材が遺存するものも多く、放射性炭素年代測定に依拠すれば、中世を通じて建物や何らかの構築物が存在していた可能性が高い。

ピット群１（第33・35図　PL10-２、20）

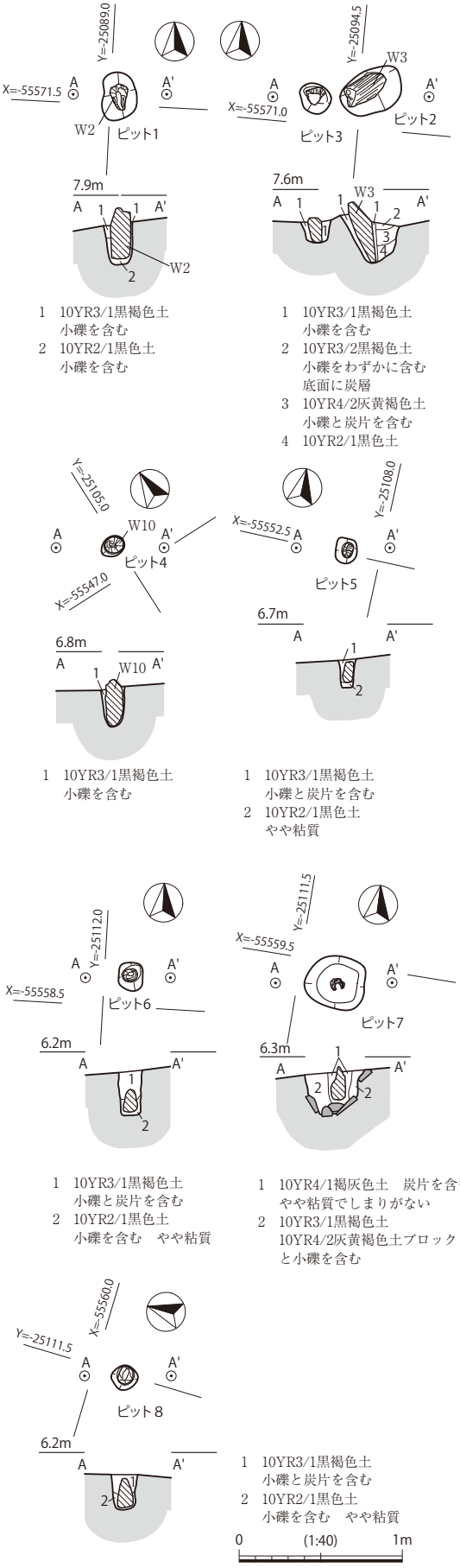
調査区中央付近、Ｅ７・８、Ｆ７・８グリッドの東から西に向けて舌状に延びる標高7.2～8.6mの緩斜面に位置する。総数110基程度のピットからなる。

掘方は大半が円形もしくは楕円形を呈する。規模は最大で長軸0.64mを測るが、平均すると径0.3m程度、深さは0.18mとなる。埋土は暗褐色土の単層で、炭片を含むものがほとんどである。遺物は埋土中から土師器、須恵器の細片が出土しているが、各ピットの帰属時期を示すものではない。４はピット25から出土した土師器坏である。

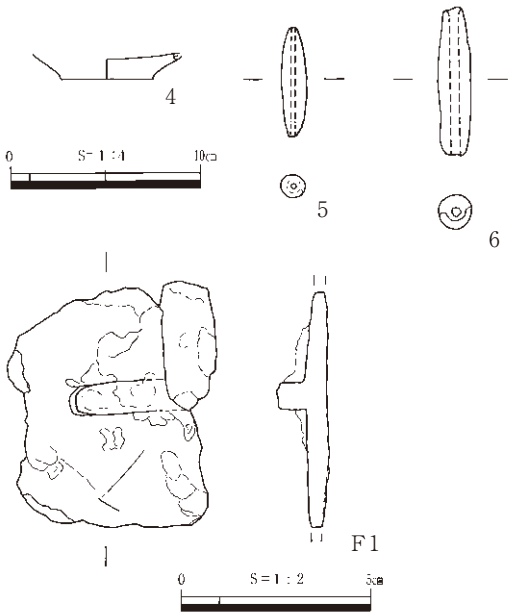
ピット群１の南側ではほぼ東西に直線的に並ぶピット１～３を検出し、いずれにも柱材が遺存して



第33図　ピット群１分布図



第34図　ピット群１・２



第35図　ピット群１・３出土遺物

いる。すべて角材で、図化したＰ１出土Ｗ２、Ｐ２出土Ｗ３は下端に加工痕が明瞭に残る。樹種はＷ２がクリ、Ｗ３がスギである。また、放射性炭素年代測定を行ったところ、２σ暦年代範囲でＷ２が1179calAD-1258calAD(93.7％)、Ｗ３が1190calAD-1263calAD(95.4％)という結果が得られている。よって、周囲に12～13世紀頃の建物や構築物が存在した可能性が高い。

ピット群２(第34・36図　PL10-３～６、20)

調査区中央西側Ｄ９・10、Ｅ９・10、Ｆ９・10グリッドに位置する。総数70基程度のピットからなる。埋没谷５検出面及び埋土中で検出したものが17基あるが、大半は谷の底面で検出している。

掘方は大半が円形もしくは楕円形を呈する。規模は最大で長軸が0.44ｍを測るが、平均すると径0.2ｍ程度、深さは0.12ｍとなる。埋土は埋没谷５の検出面及び埋土中で検出したピットが褐灰色から灰黄褐色系であるのに対し、埋没谷５の底面で検出したものは黒褐色から暗褐色系となり、単層で炭片を含むものがほとんどである。遺物は８基から土器細片が出土しているが、ピットの帰属時期を示すものではない。

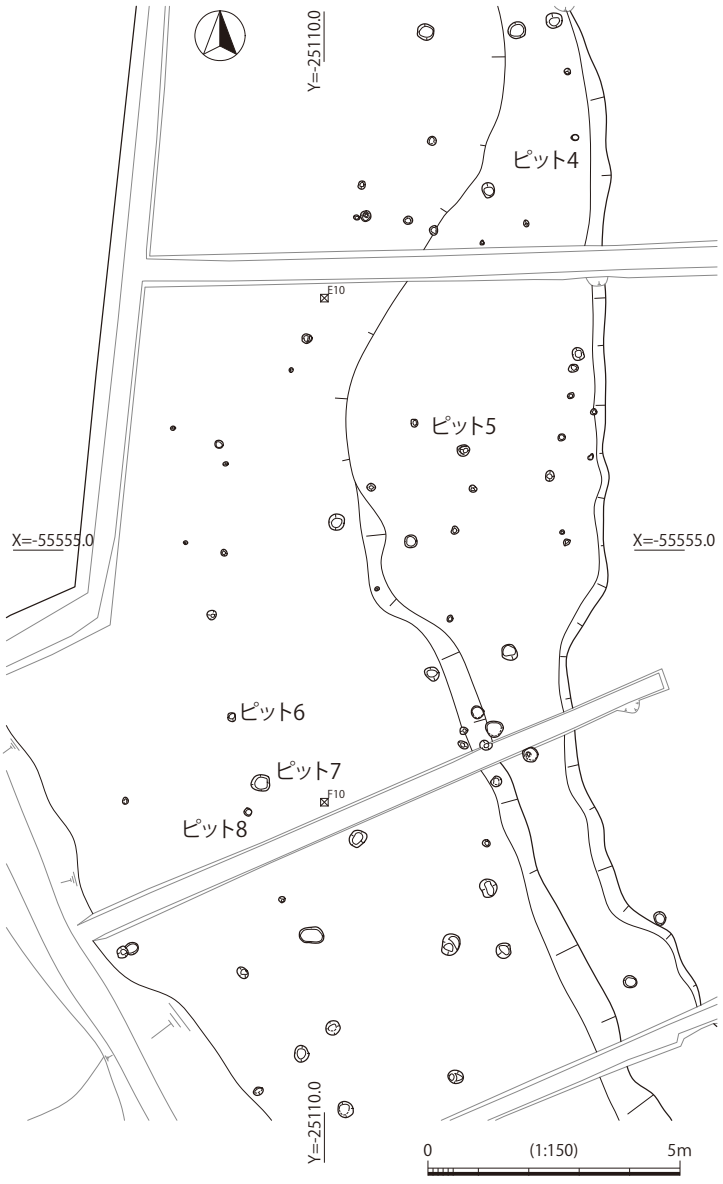
Ｐ４～８には柱材、もしくは杭材が遺存していた。Ｐ７は埋没谷５の埋土中、その他は底面で検出している。図化したＰ４Ｗ10は９㎝ほどの細い丸太材で、樹種はスギである。Ｗ10は放射性炭素年代測定したとこ

ろ、２σ暦年代範囲で1280calAD-1310calAD(53.3%)、1360calAD-1388calAD(42.1%)という結果が得られており、13世紀後半から14世紀後半の建物や構築物が存在した可能性が高い。

ピット群３(第35・37・38図　PL10-７・８、11-１・２、20)

調査区中央付近の南側Ｇ６～８、Ｈ７・８グリッドに位置する。総数110基程度のピットからなる。埋没谷５の北側及び東側と、埋没谷５の検出面及び埋土中で検出したものが、それぞれ39基で、その他は底面で検出している。

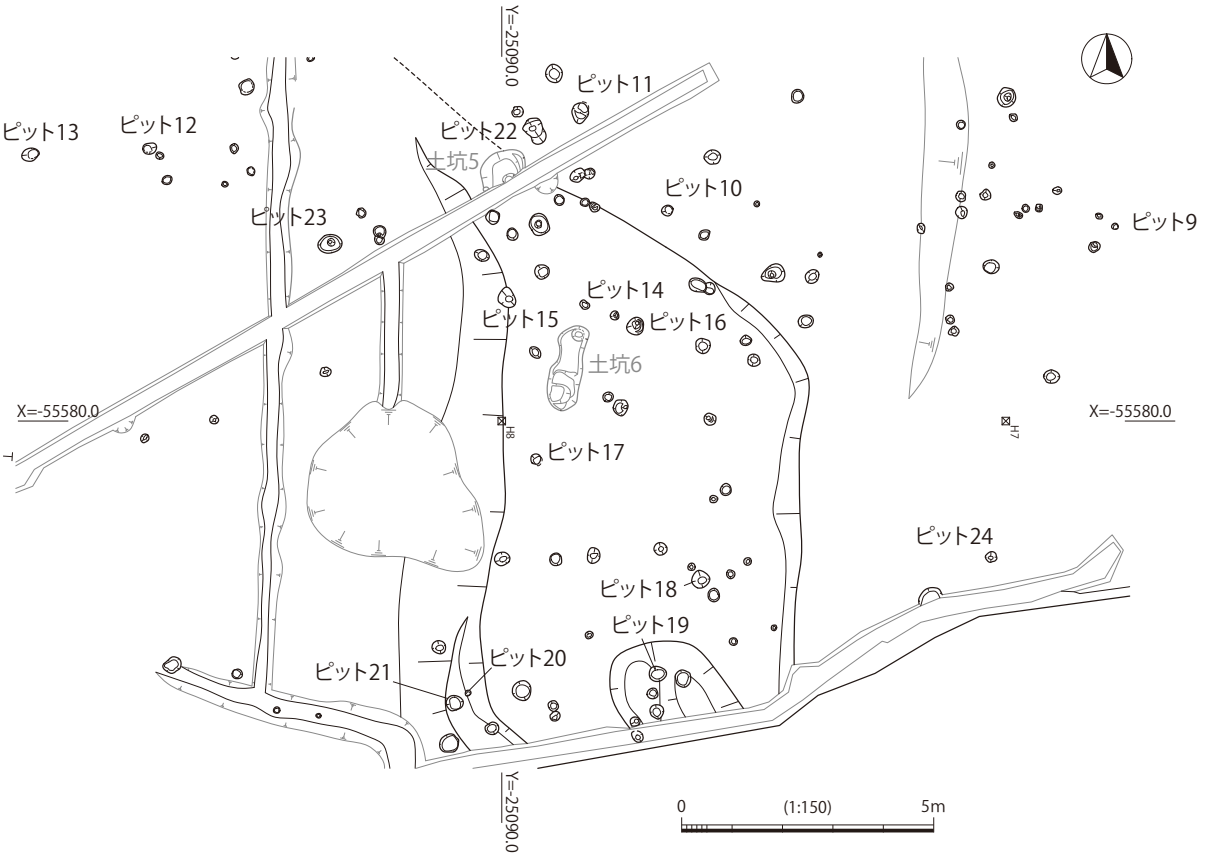
掘方は大半が円形もしくは楕円形を呈する。規模は最大で長軸が0.38mを測り、平均すると径0.25m程度、深さは0.16mとなる。埋土はピット群２と同様に、埋没谷５の検出面及び埋土中で検出したピットが褐灰色から灰黄褐色系であるのに対し、埋没谷５の底面、もしくは外側で検出したものは黒褐色系となり、単層で炭片を含むものが多くみられる。遺物は半数近いピットから弥生土器や土師器、須恵器の細片が出土しているが、ピットの帰属時期を示すものではない。５、６は土錘で、５がピット22、６がピット23から出土している。Ｆ１はピット10から出土した不明鉄製品で、鋳造品である。



第36図　ピット群２分布図

Ｐ９～21には柱材、もしくは杭材が遺存している。図化したもののうち、ピット12Ｗ４、ピット41Ｗ９はミカン割りの分割材、ピット13Ｗ５、ピット21Ｗ８は角材、ピット24Ｗ６、ピット15Ｗ７は丸太材である。樹種はＷ４、５、８がスギ、Ｗ７、９がクリである。これら柱材や杭材を放射性炭素年代測定したところ、２σ暦年代範囲でＷ４が1184calAD-1263calAD(95.4%)、Ｗ５が1,221calAD-1,273calAD(95.4%)、Ｗ７が1,539calAD-1,635calAD(63.0%)、Ｗ８が1,391calAD-1,420calBC(55.5%)、Ｗ９が1,491calBC-1,603calBC(76.8%)という結果が得られている。

よって、ピット群３周辺には中世を通じて、建物や構築物が存在していた可能性が高い。



第37図　ピット群３分布図

７　埋没地形と包含層出土遺物

埋没谷１（第40図　PL５-２・３、６-１、11-６・７）

埋没谷１は斜面部に位置する。幅は狭いが、深い谷地形を形成しており、丘陵裾かけて谷筋が扇状に広がっている。埋没谷２～４も調査区外で分断されているが、基本的に埋没谷１から派生した谷筋とみてよい。谷の幅は５ｍ～15m以上、深さは最大２ｍを測る。谷の埋土は褐色系の流土堆積（Ⅱ～Ⅳ層）であり、下層を中心に巨礫が数多く含まれていることなどから土石流によって埋没したと考えられる。

遺物は縄文晩期から近世に至る幅広い時期の土器や陶磁器等が出土している。出土遺物から埋没谷１は古墳時代前期以降に形成され、最終的に中世から近世にかけて完全に埋没してしまったと考えられる。

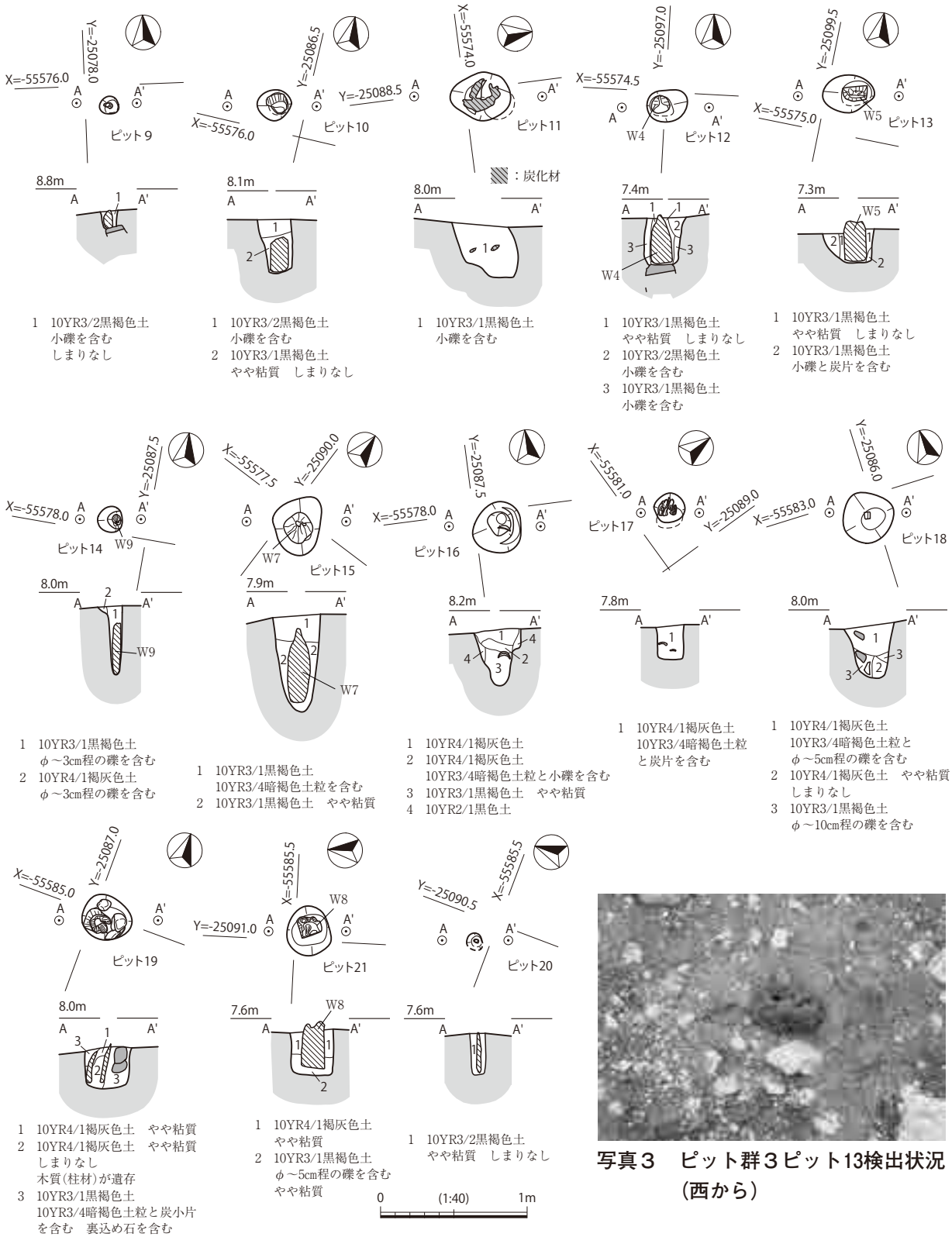
Ⅱ層出遺物（第41図　PL12-１）

Ⅱ層は中世から近世にかけての遺物を包含している。出土量はⅢ～Ⅳ層と比較して少ない。近世の陶磁器も僅かに出土しているが、細片のため図化し得なかった。７～９は中世の土師器で、７は坏、８は皿、９は柱状高台である。

Ⅲ層出土遺物（第42・43図　PL12～17）

Ⅲ層は弥生時代後期から中世にかけての遺物を包含している。10は土師器皿であるが、中世に帰属する資料はこの他に僅かしかない。

11～14は古墳時代後期から古代にかけての資料である。11は須恵器長頸瓶で、二段構成である。肩

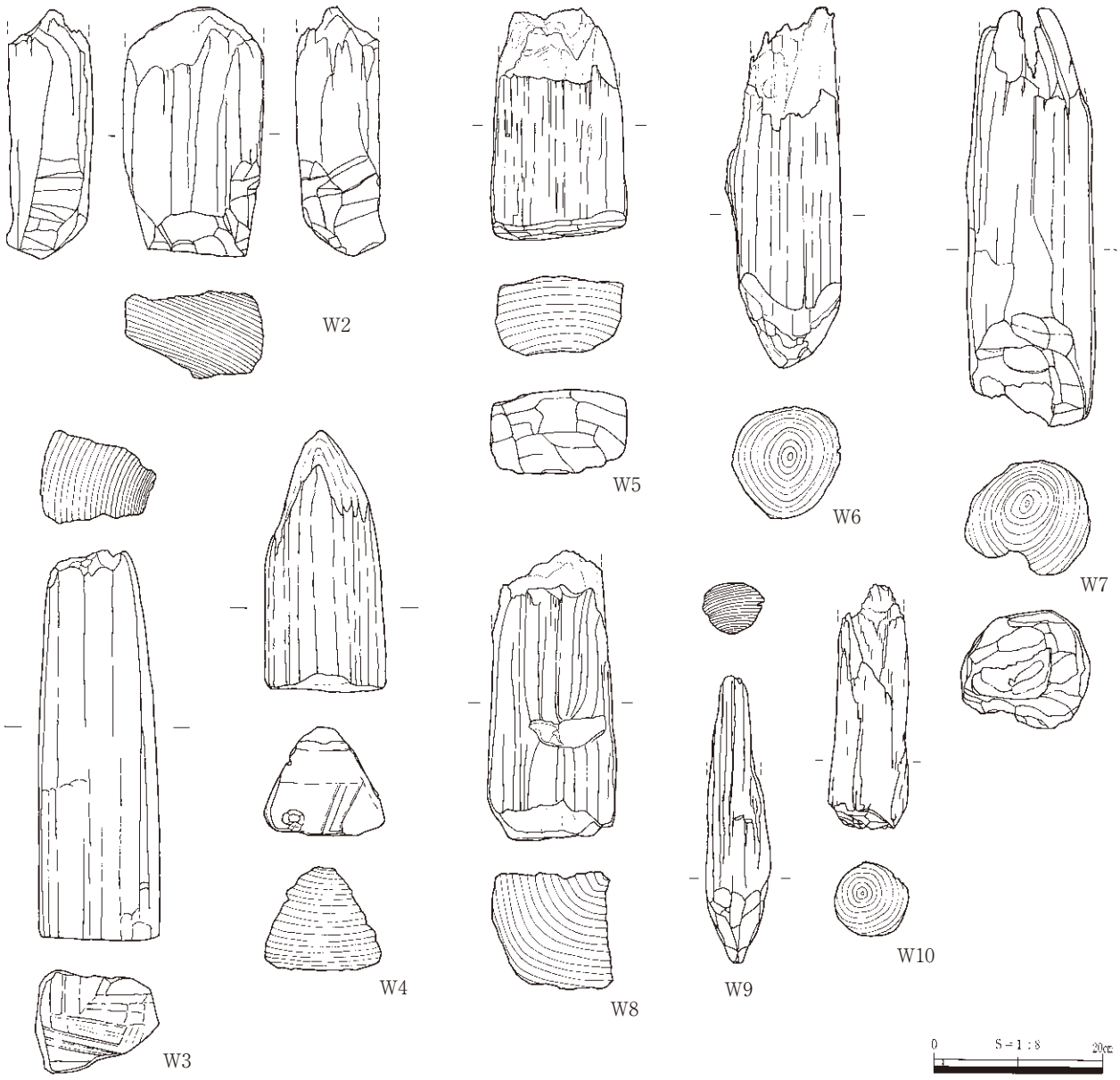


第38図　ピット群３

写真３　ピット群３ピット13検出状況（西から）

部はやや張るが、丸みを持っており、底部の切り離しは回転糸切りである。頸部中位に沈線が二条巡る。12、13は須恵器甕の口縁部破片、14は土師器甕である。

15～33は古墳時代前期から中期にかけての資料で、すべて土師器である。15は複合口縁の甕であるが、口縁部の退化が著しい。16、17は壺で、外反する口縁部を持つ。18はやや大型の直口壺である。20～27は甕で、複合口縁をもつもの(20～25)と布留系のもの(26、27)がある。前者のうち、23は小型



第39図　ピット群出土柱・杭材

の甕で、25は肩部に刺突文が施されている。29は甑、28、32は高坏、30は小型丸底壺、31は低脚坏である。33は土製支脚で、中実で二つの突起をもつものである。

34～36は弥生時代後期に帰属する資料で、34、35は甕、36は台付壺である。

Ｓ１は濃緑色を呈する碧玉の石核で、長さ2.9cm、幅2.8cm、厚さ2.9cmの立方体状を呈する。１面に礫面をもつ厚みのある剥片を素材に、主に単方向の両極打撃で管玉の素材を剥いだものと考えられる。大部分を色、質ともに不均等な辺材の部分が占めることから、割り切られた状態と考えられる。

Ⅳ層出土遺物（第44・45図　PL12～17）

Ⅳ層は縄文時代晩期から古代にかけての遺物を包含している。縄文土器については細片のため、図化し得なかった。

37～40は古墳時代から古代にかけての資料である。37は高い高台を持つ須恵器坏で、底部の切り離しは回転糸切りである。39は須恵器瓶の口縁部破片で、頸部には２条の沈線が巡る。頸部内面に胴部との接合痕が段差となって明瞭に残る。

41～48は古墳時代前期の土師器である。41、42は壺で、外方する複合口縁を持つ。43、44は甕、45

は鼓形器台で、受口部内面にミガキ調整がみられる。47は小型の高坏であるが、坏部が埦状を呈し、脚部が八の字に開く特異な形態をなしている。

49～53は弥生時代後期の資料である。49は蓋の完形品で、高さがある。50は壺で、肩部に刺突文が施される。51～53は甕で、52は口縁部内面にミガキ調整がみられる。

54は脚を持つ手捏ね土器で、外面にはユビオサエが明瞭に残り、成・整形は粗雑である。55は中空の土製支脚である。Ｓ２は敲石と考えられ、下端部と上面中央に敲打痕がみられる。Ｓ３はサヌカイト製の石匙である。ほぼ正三角形の素材剥片を、周辺のみ両面からの打撃で整形して仕上げているため、素材面が多く残っている。

Ⅱ～Ⅳ層出土遺物（第46図　PL12～17）

埋没谷１のトレンチ掘削時に出土し、Ⅱ～Ⅳ層のいずれに帰属するか特定できないものをここで報告する。

56～59は中世に帰属する資料である。56、57は土師器皿で、56は内面から口縁部外面にかけて煤が付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。58は備前焼の擂鉢で、重根編年ⅣB期の資料とみられる。59は瓦質土器羽釜で、口縁部が内傾する。

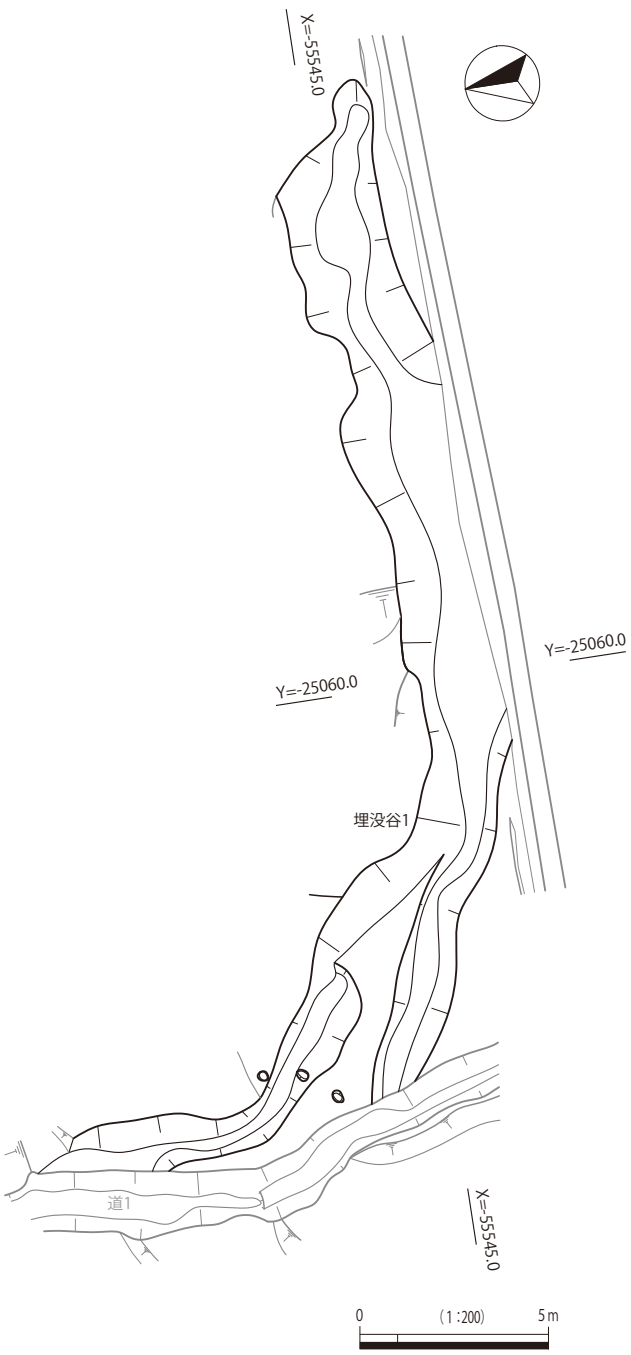
60～62は古墳時代後期から古代にかけての須恵器である。61は小型の壺とみられ、底部の切り離しが回転糸切りで、焼成も軟質で10世紀代の資料と考えられる。

63～66は古墳時代前期の土師器である。63は小型丸底壺で、66は有段の坏部を持つ。

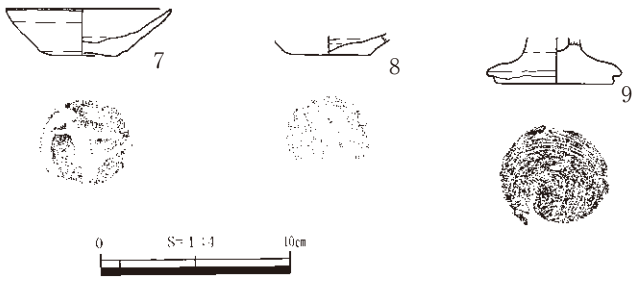
67、68は土錘、Ｓ３は斑糲岩製の茶臼である。

埋没谷２・３・４（第47図）

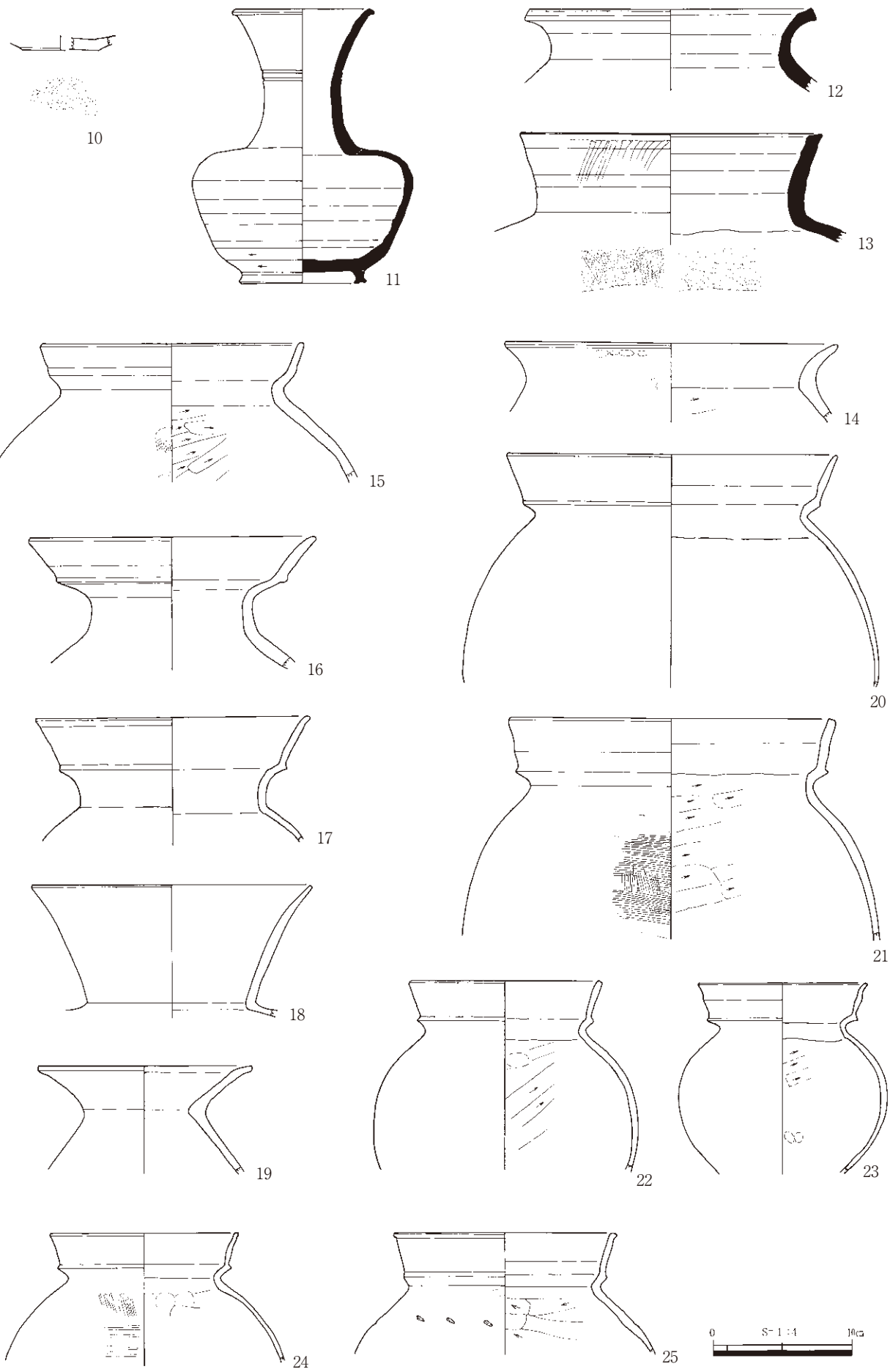
調査区中央部の東端、Ｅ６・７グリッドの東から西に傾斜する標高8.8～10.8m付近に位置する。後世の開墾により、埋没谷２・４の下方側は削平されている。



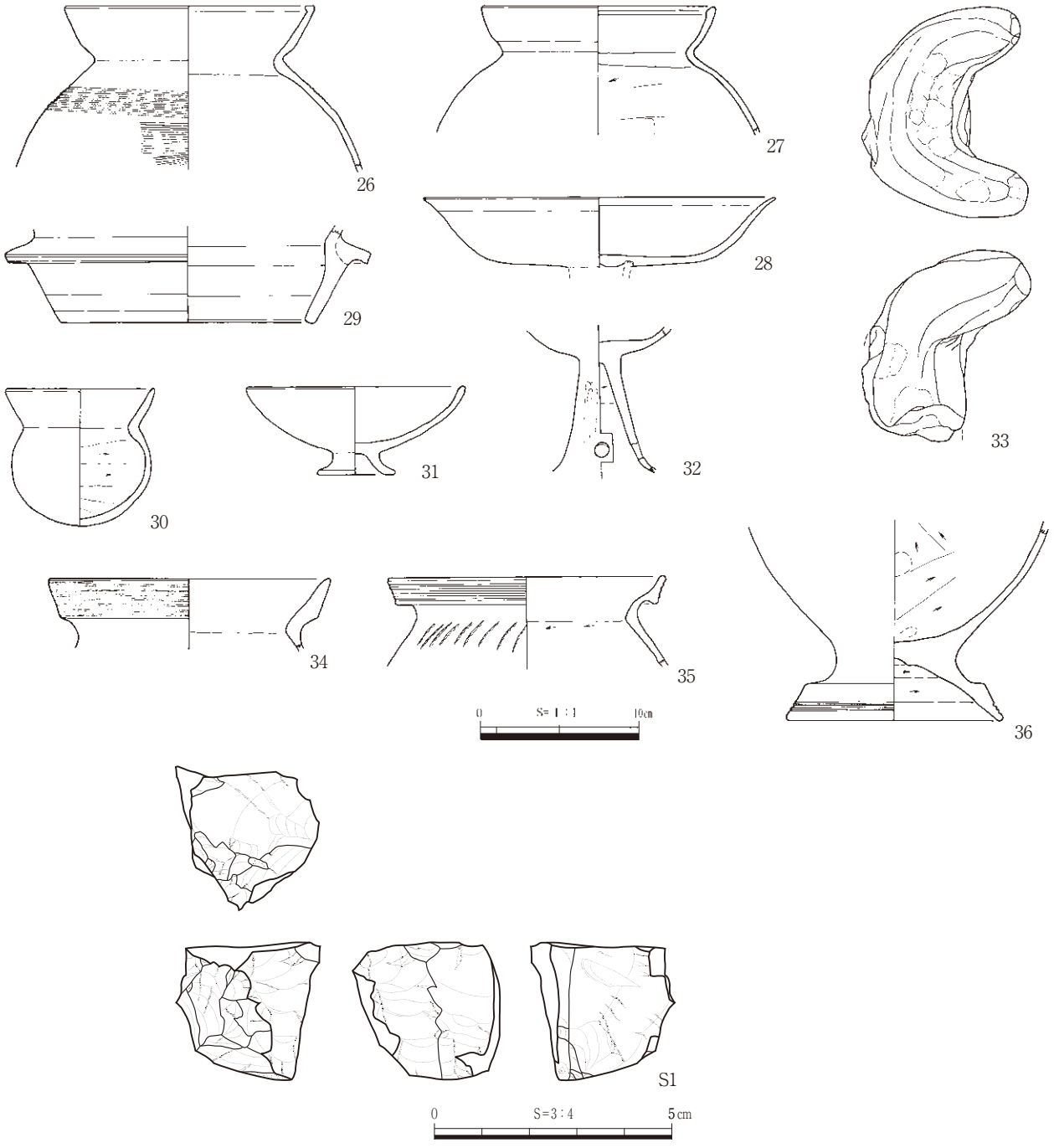
第40図　埋没谷１



第41図　埋没谷１Ⅱ層出土遺物



第42図　埋没谷１Ⅲ層出土遺物（１）



第43図　埋没谷１Ⅲ層出土遺物（２）

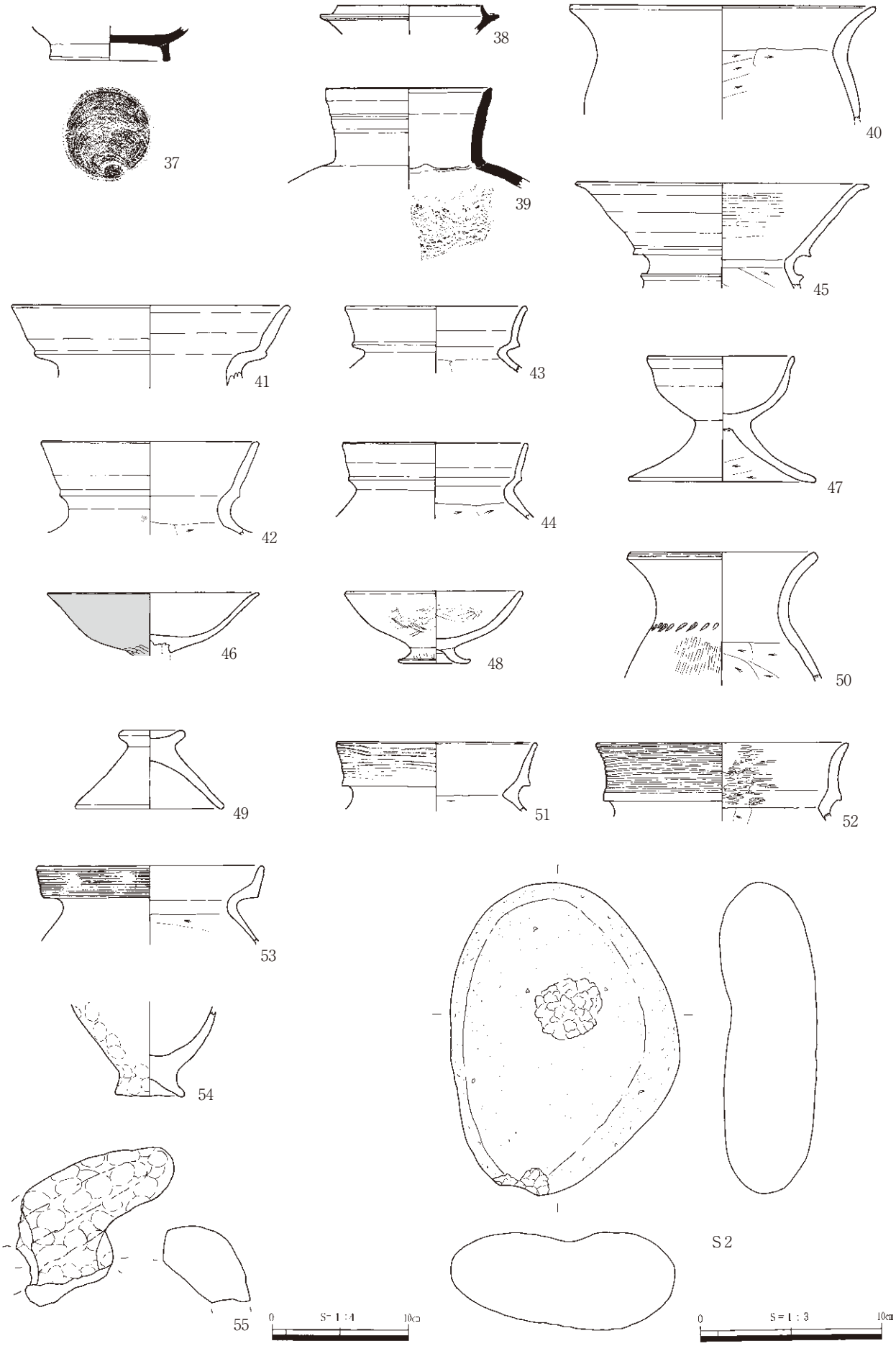
規模は、埋没谷２で幅１ｍ前後、最大幅1.22m、深さ最大0.27m、埋没谷３で幅1.0～2.5m前後、最大幅2.47m、深さ最大0.78m、埋没谷４で幅１ｍ前後、最大幅1.06m、深さ最大0.12mを測る。埋土はいずれも暗褐色土の単層で、比較的大型の礫を含んでいる。

遺物は出土していない。埋没谷１と同様に古墳時代前期以降に土石流によって埋没したものと考えられる。

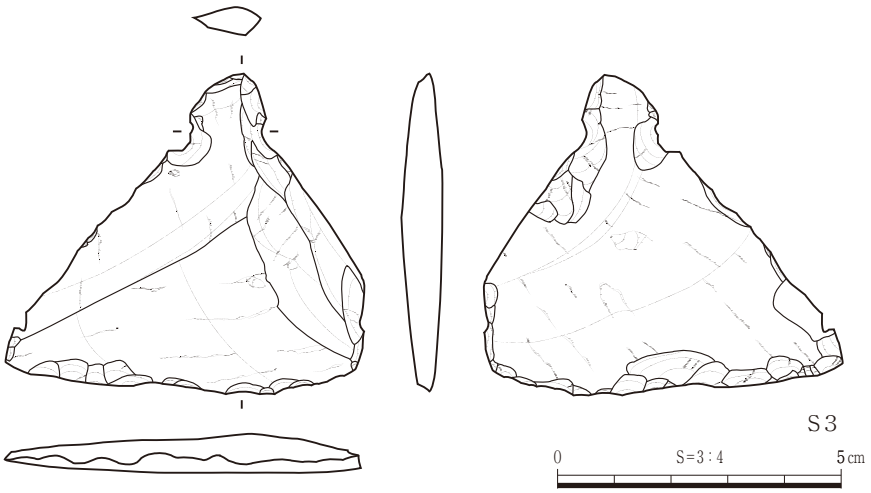
埋没谷５（第48・49図　PL６-２、11-３～５）

調査区西から南側一帯、Ｄ９・10、Ｅ９・10、Ｆ８～10、Ｇ７～10、Ｈ７～９グリッドの標高5.7～8.1ｍを測る緩斜面に位置し、南東から北西に延びる。北端と西側は後世の開墾等により削平されている。

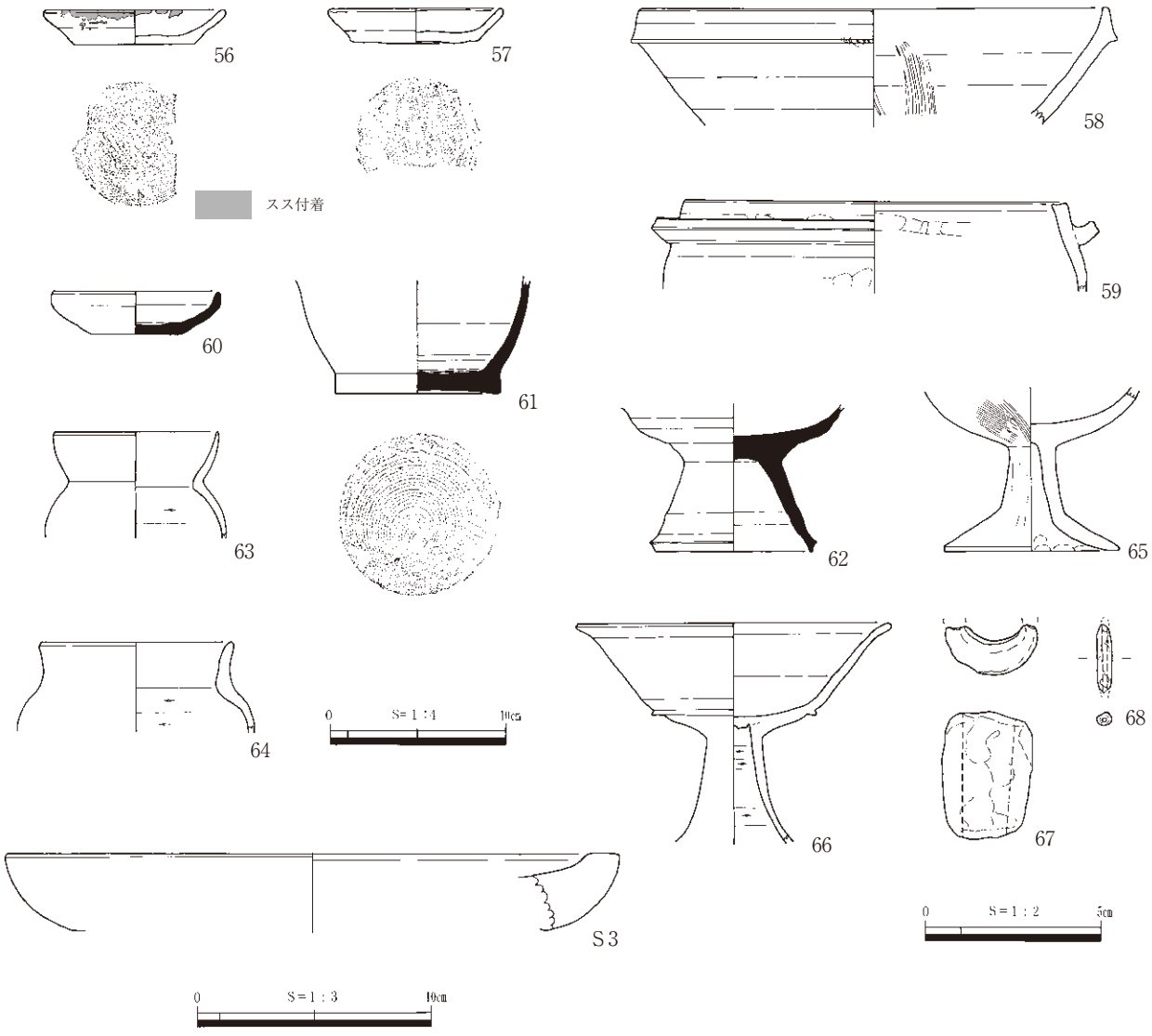
規模は幅8.7～17.2m、深さ最大0.7mで、長さは直線距離で48.4mを測る。埋土は黒褐色から暗褐色系で、いずれの層にも炭片と礫を含んでいる。



第44図　埋没谷１Ⅳ層出土遺物（１）

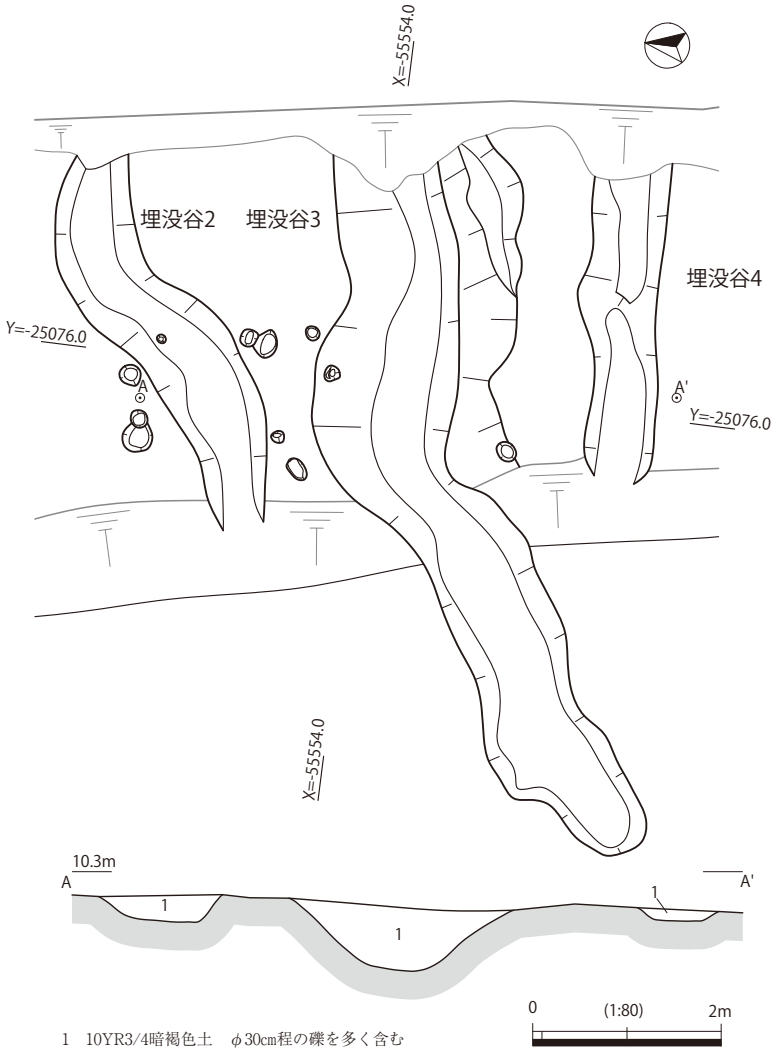


第45図　埋没谷１Ⅳ層出土遺物（２）



第46図　埋没谷１Ⅱ～Ⅳ層出土遺物

遺物は縄文時代から近世に至る幅広い時期の資料がみられ、その多くは、谷全体に堆積している極暗褐色土から出土しており、とくにＦ９、Ｇ８、Ｈ７グリッドにおいて密度が高い。また、Ｈ８グリッド南西隅では、最上層に堆積する黒褐色土から遺物が集中して出土している。なお、最下層の黒褐



第47図　埋没谷２～４

色土から出土した資料は僅かしかない。

埋土には礫を多く含むが、流水の痕跡は確認できない。谷の形成時期は不明だが、近世には完全に埋没してしまったと考えられる。

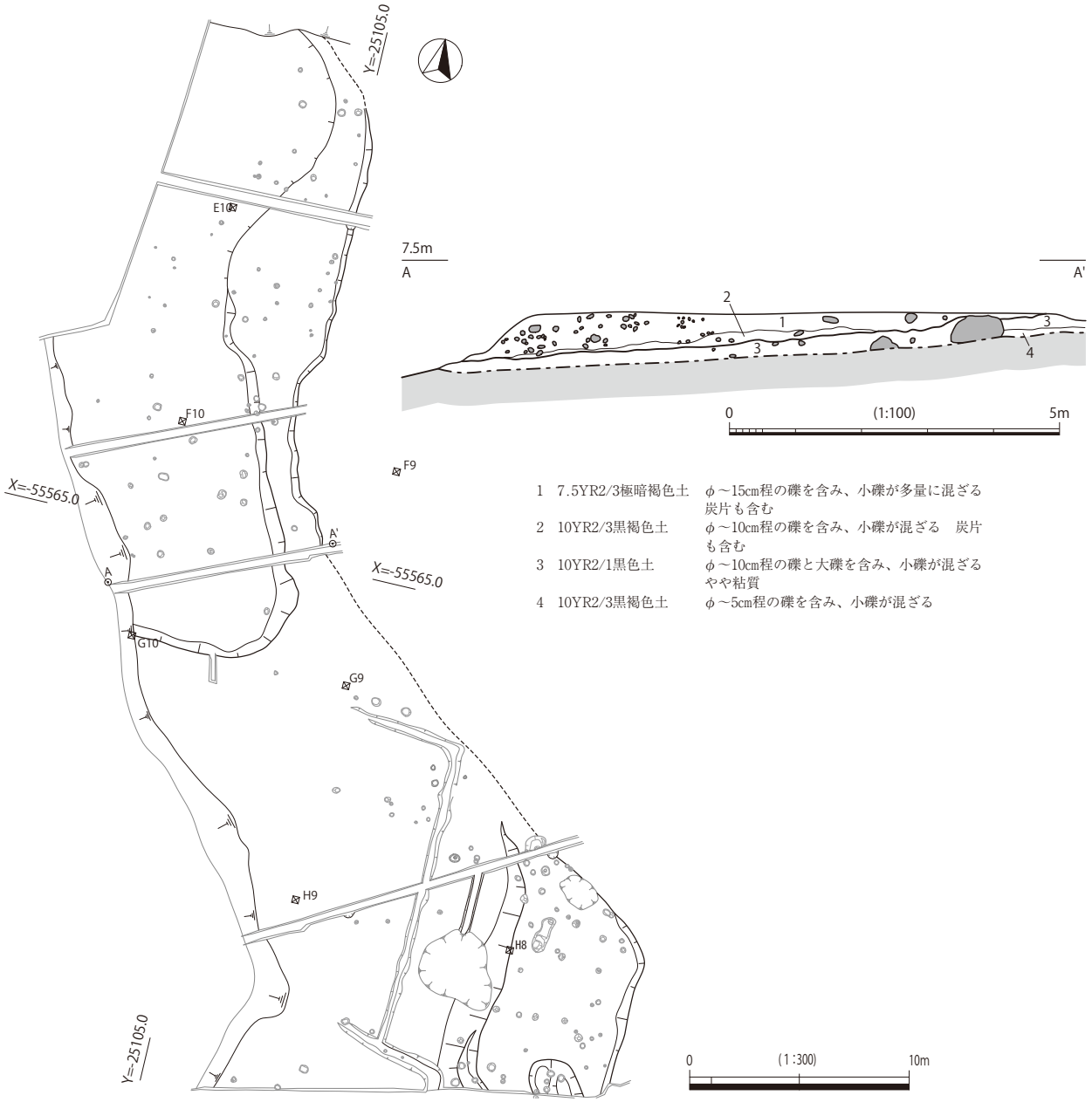
埋没谷５出土遺物（第50・51図　PL17・18）

69は近世に帰属する資料で、陶器碗である。

70～78は古代末～中世に帰属する資料である。70は白磁碗で、口縁部が玉縁を呈する白磁Ⅳ類である。71は青磁碗で、無文の龍泉窯系Ｅ類とみられる。74～76は土師器坏皿である。72、77、78は鍋で、72は瓦質のものである。77、78は土師質のもので、78は口縁部がくの字を呈し、内外面に粗いハケ調整が施される。

79～84は古墳時代後期から古代に帰属する資料である。80、81は輪状つまみをもつ須恵器坏蓋で、かえりがある。82は須恵器瓶とみられる頸部から口縁部破片で、外面にカキ目がみられる。83は須恵器高坏の脚部で、外面にやや特異な波状文が施されている。84は土師器埦で、口縁部がやや屈曲し外方へ広がる。

85～97は古墳時代前期の土師器である。85、86は壺で、外反する複合口縁をもつ。87は小型の甕である。88～89は小型丸底壺で、88は外面全面と口縁部内面に赤色塗彩が施されている。90は鼓形器台の受部である。91～93、97は高坏で、93は坏部の内外面に丁寧なミガキが施されている。94、95は低



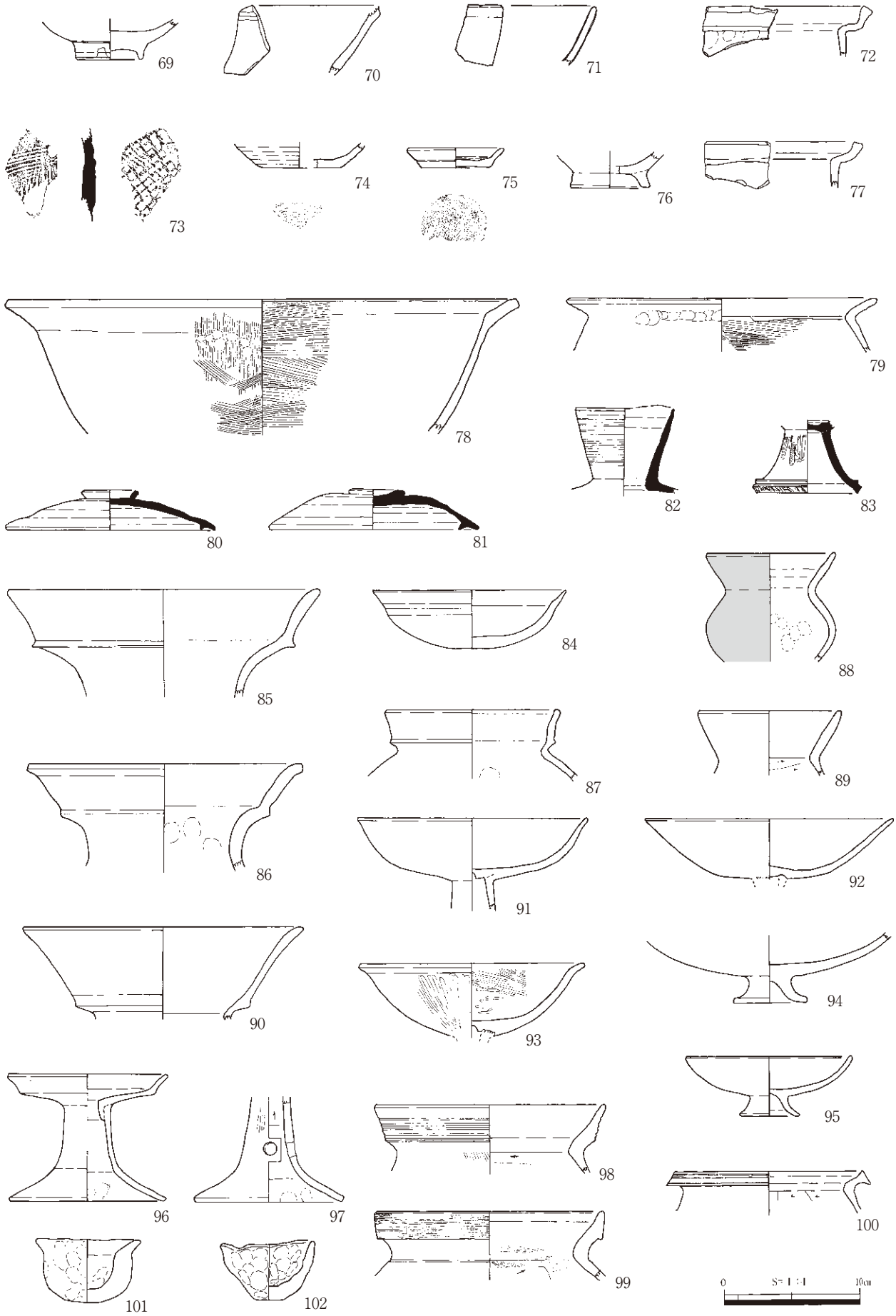
第48図　埋没谷５

脚坏で、94は坏部が大きく、皿状を呈する。96は小型器台で、高坏型を呈し、受部と脚部の接合痕が段差となって明瞭に残る。

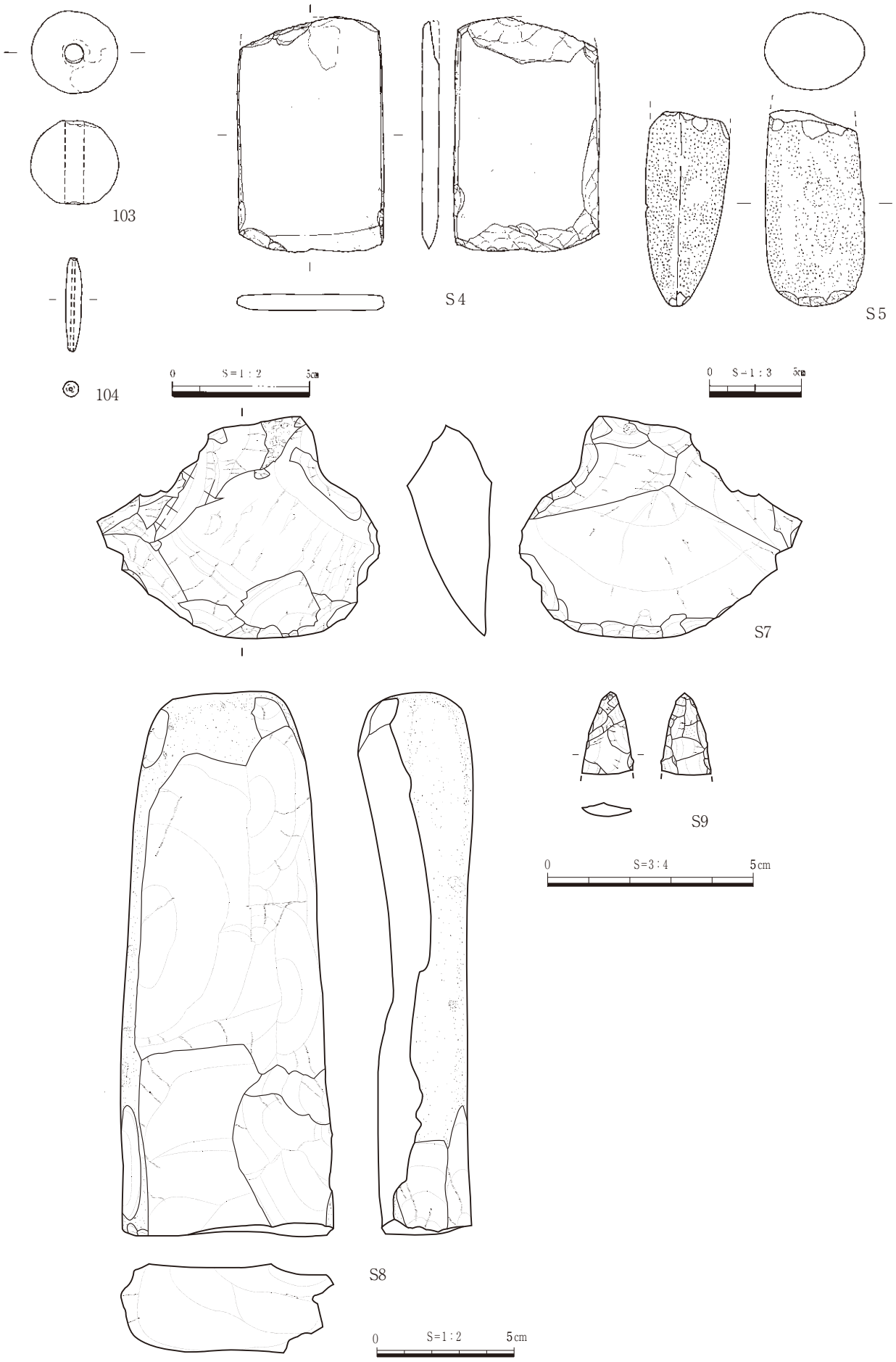
99、100は弥生土器で、いずれも後期に帰属する甕である。101、102は手捏ね土器で、内外面のユビオサエが顕著である。時期は特定できない。103は土玉、104は土錘である。

石器は５点を図化した。Ｓ５は大型の扁平片刃石斧で、刃部に使用時の剝離がみられる。Ｓ６は太型蛤刃石斧で、全面で細かな敲打痕がみられ、研磨痕はほとんど確認できない。S7はサヌカイト製の削器である。横形剥片を素材とし、末端辺のほぼ全辺に両面からの打撃で刃部を形成する。二次加工の深度は浅い。Ｓ８は礫石器で、扁平で細長い安山岩の円礫を素材に、側面を打面として厚みを減じる作業を行っている。途中で一端が折れるものの作業は継続されるが、中央部にできた段差を除去する打撃がうまくいかず、放棄されている。形態からみて石鍬を製作しようとしたものであろう。なお、裏面の礫面上に剥離面に先立つ線状痕と光沢面が認められるので、磨石を石鍬素材に転用したも

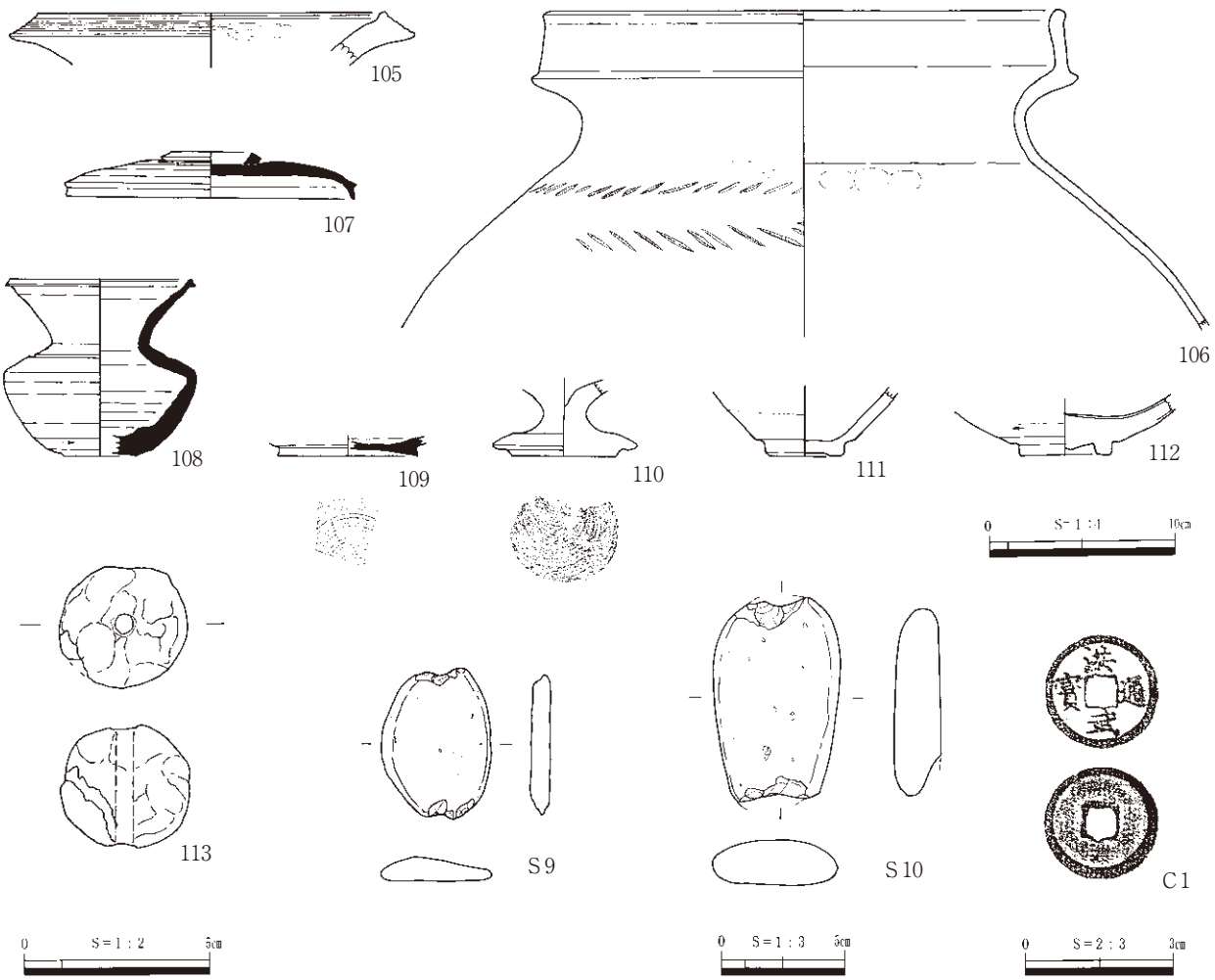
第49図　埋没谷５遺物出土状況図



第50図　埋没谷５出土遺物（１）



第51図　埋没谷５出土遺物（２）



第52図　表土・撹乱土等出土遺物

のである。Ｓ９はサヌカイト製の石鏃破片で、下半部を比較的新しい折れにより失っている。

８　その他の出土遺物

表土等出土遺物（第52図　PL19-１）

表土や耕作土、攪乱土からも遺物が出土しているが、出土量は僅かである。

105は弥生土器壺で、中期後葉の資料である。106は土師器壺で、口縁部が内傾し、肩部に羽状文の刺突がみられる。107は輪状つまみをもつ須恵器坏蓋で、108は須恵器甕である。110は須恵器坏の底部で、回転糸切りによる切り離しで、10世紀代に帰属する資料であろう。110は土師器柱状高台、111は瀬戸・美濃焼の天目茶碗、112は青磁の碗、もしくは鉢とみられる。

Ｓ９、10は打欠石錘で、いずれも扁平な礫を使用している。Ｃ１は洪武通宝である。

写真４　　斜面部調査風景

表２　土器・土製品観察表（１）

※復元値　△現存値

遺物番号	取上番号	遺構層位名	挿図PL	種類器種	法量（cm）	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	149	集石土坑１	第16図 PL18-1	青磁 碗	器高：1.9△	外面：施釉　片切彫の蓮弁 内面：施釉	密	良好	施釉：オリーブ灰	龍泉窯系碗ＢⅡ類
2	532	道１	第16図 PL12-2	土師器 皿	器高：1.0△ 底径：4.0※	外面：回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：にぶい橙色	
3	528	道１	第16図 PL12-3	磁器 紅皿	口径：4.8 器高：1.4 底径：1.6	外面：施釉 内面：施釉	密	良好	施釉：灰白色	
4	1112	ピット群１ ピット４	第32図 PL12-2	土師器 坏	器高：1.4△ 底径：4.8※	外面：回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：浅黄橙色	
5	1167	ピット群３ ピット22	第32図	土錘	長さ：2.9 外径：0.7 孔径：0.1	外面：ナデ	密	良好	赤褐色	重さ1.30ｇ
6	1109	ピット群３ ピット23	第32図	土錘	長さ：3.9 外径：0.9 孔径：0.2	外面：ナデ	密	良好	浅黄色	重さ2.66ｇ
7	139	D5 Ⅱ層	第41図	土師器 坏	口径：8.7※ 器高：2.5 底径：2.9※	外面：回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	外面：浅黄橙色 内面：黄橙色	
8	113	D5 Ⅱ層	第41図	土師器 皿	器高：1.2△ 底径：4.4※	外面：回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：浅黄橙色	
9	457	D5 Ⅱ層	第41図 PL12-3	土師器 柱状高台	器高：2.3△ 底径：6.0※	外面：回転ナデ　底部回転糸切り	密	良好	外面：黄褐色	
10	535	D4 Ⅲ層 C-C'	第42図 PL16-1	土師器 坏／皿	器高：1.1△ 底径：5.4※	外面：回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	外面：にぶい黄褐色 内面：浅橙色	
11	517	D3 Ⅲ層 A-A'	第42図 PL12-3	須恵器 長頸瓶	口径：9.6 器高：15.8 底径：9.0	外面：回転ナデ　胴部下半回転ヘラケズリ　底部回転糸切り後丁寧なナデ消し 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：灰～灰白色	
12	217	D3 Ⅲ層	第42図 PL15-1	須恵器 甕	口径：20.3※ 器高：6.0△	外面：口縁部回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ　頸部以下同心円当具痕	密	良好	内外面：灰色	
13	230	D4 Ⅲ層	第42図 PL12-3	須恵器 甕	口径：21.5※ 器高：7.8△	外面：口縁部回転ナデ　頸部施文　胴部平行タタキ 内面：口縁部回転ナデ　頸部以下同心円当具痕	密	良好	内外面：灰色	
14	545	D3 Ⅲ層 A-A'	第42図	土師器 甕	口径：23.8※ 器高：5.6△	外面：口縁部ユビオサエ　頸部以下ハケ 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ	密	良好	内外面：明褐色	
15	271	D3 Ⅲ層	第42図 PL16-1	土師器 甕	口径：18.6※ 器高：10.0△	外面：口縁部ナデ、胴部ハケ、一部ユビオサエ 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ	密	良好	内外面：にぶい黄褐色	
16	229	D5 Ⅲ層	第42図	土師器 壺	口径：20.4※ 器高：9.5△	内外面：風化により調整不明	密	良好	内外面：黄橙色	
17	86	D4 Ⅲ層	第42図	土師器 壺	口径：19.2※ 器高：9.0△	内外面：風化により調整不明	密	良好	内外面：橙色	
18	254	D4 Ⅲ層	第42図 PL12-3	土師器 直口壺	口径：20.1※ 器高：9.4△	内外面：風化により調整不明	密	良好	内外面：橙色	
19	240	D4 Ⅲ層	第42図 PL16-1	土師器 壺	口径：15.2※ 器高：7.5△	内外面：風化により調整不明	密	良好	内外面：黄橙色	
20	184	D2 Ⅲ層	第42図	土師器 甕	口径：23.6※ 器高：16.6△	内外面：風化により調整不明	密	良好	内外面：浅黄橙色	
21	184	D2 Ⅲ層	第42図 PL16-1	土師器 甕	口径：20.6※ 器高：15.8△	外面：口縁部ナデ　頸部以下ハケ 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ後ナデ	密	良好	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい褐色～にぶい橙色	
22	283	D2 Ⅲ層	第42図	土師器 甕	口径：13.4※ 器高：13.6△	外面：風化により調整不明 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ後一部ユビオサエ	やや粗	良好	内外面：明褐色	
23	539	D3 Ⅲ層 A-A'	第42図 PL14-1	土師器 甕	口径：11.8※ 器高：13.7△	外面：風化により調整不明 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ後ユビオサエ	密	良好	内外面：橙～にぶい褐色	
24	564	D2 Ⅲ層 B-B'	第42図 PL14-1	土師器 甕	口径：13.2※ 器高：9.3△	外面：口縁部ナデ　頸部以下ハケ 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ・ユビオサエ	密	良好	内外面：にぶい黄褐色	
25	563	D2 Ⅲ層 B-B'	第42図	土師器 甕	口径：15.9※ 器高：8.7△	外面：口縁部ナデ　肩部刺突文 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ後ナデ	密	良好	内外面：浅黄橙色	
26	184	D2 Ⅲ層	第43図 PL16-1	土師器 甕	口径：15.2※ 器高：10.2△	外面：口縁部ナデ、肩部８条平行沈線、ハケ 内面：風化により調整不明	やや密	良好	外面：にぶい黄橙色 内面：浅黄橙色	
27	222	D3 Ⅲ層	第43図 PL16-1	土師器 甕	口径：15.2※ 器高：10.2△	外面：口縁部ナデ、肩部以下風化により調整不明 内面：頸部以下ケズリ	密	良好	外面：明黄褐色 内面：橙色	
28	188	D3 Ⅲ層	第43図 PL15-1	土師器 高坏	口径：22.1※ 器高：4.4△	外面：風化により調整不明 内面：風化により調整不明	密	良好	内外面：浅黄橙色	
29	218	D3 Ⅲ層	第43図 PL15-1	土師器 甑	口径：16.1※ 器高：6.1△	内外面：ナデ	密	良好	内外面：橙色	
30	254	D4 Ⅲ層	第43図 PL13-1	土師器 小型丸底壺	口径：9.2 器高：8.7	外面：ナデ、一部ミガキ 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ後ナデ	密	良好	外面：褐色 内面：明黄褐色	

表３　土器・土製品観察表（２）

※復元値　△現存値

遺物番号	取上番号	遺構層位名	挿図PL	種類器種	法量（cm）	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
31	228	D4 Ⅲ層	第43図 PL12-3	土師器 低脚坏	口径：13.6※ 器高：4.8 底径：4.8※	内外面：風化により調整不明	密	良好	内外面：浅黄橙色	
32	433	D3 Ⅲ層	第43図	土師器 高坏	器高：9.1△	外面：脚部ミガキ　3方向の透かし 内面：脚部上位ケズリ、下位ナデ	密	良好	内外面：にぶい黄褐色	
33	218	D3 Ⅲ層	第43図 PL17-1	土製支脚	器高：12.6△	外面：ナデ、ユビオサエ	密	良好	外面：橙色～褐灰色	
34	240	D4 Ⅲ層	第43図 PL16-1	弥生土器 甕	口径：17.6※ 器高：4.5△	外面：口縁部平行沈線 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ	やや粗	良好	内外面：橙色	
35	240	D4 Ⅲ層	第43図 PL16-1	弥生土器 甕	口径：17.2※ 器高：5.6△	外面：口縁部4条凹線　肩部貝殻による刺突文 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ	密	良好	内外面：浅黄橙色	
36	245	D4 Ⅲ層	第43図 PL13-1	弥生土器 台付壺	器高：12.5△ 底径：13.2※	外面：調整不明　脚部凹線 内面：胴部ケズリ後ナデ、一部ユビオサエ　脚部ケズリ後ナデ	密	良好	内外面：浅黄橙色	
37	130	D3 Ⅳ層	第44図 PL14-1	須恵器 坏	器高：2.5△ 底径：8.6	外面：回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：灰色	
38	331	D2 Ⅳ層	第44図	須恵器 坏	口径：10.6※ 器高：2.1△	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外面：灰色 内面：灰白色	
39	384	D3 Ⅳ層	第44図 PL15-1	須恵器 瓶	口径：12.1※ 器高：7.4△	外面：回転ナデ　頸部沈線２条　頸部以下平行タタキ 内面：口縁部回転ナデ　頸部以下同心円当具痕	密	良好	外面：青灰色 内面：灰色	
40	384	D3 Ⅳ層	第44図 PL14-1	土師器 甕	口径：22.2※ 器高：8.4△	外面：口縁部ナデ 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ	密	良好	外面：明褐色～褐 内面：明褐色～暗褐色	
41	80	D4 Ⅳ層	第44図	土師器 壺	口径：19.8※ 器高：6.0△	内外面：口縁部ナデ	密	良好	内外面：にぶい黄橙色	
42	331	D2 Ⅳ層	第44図 PL13-1	土師器 甕	口径：15.7※ 器高：6.8△	外面：口縁部ナデ　頸部以下ハケか 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ	密	良好	内外面：浅黄橙色	
43	123	D3 Ⅳ層	第44図 PL12-3	土師器 甕	口径：13.2※ 器高：4.9△	外面：口縁部ナデ 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ	密	良好	内外面：浅黄橙色	
44	350	D2 Ⅳ層	第44図 PL14-1	土師器 甕	口径：13.4※ 器高：5.6△	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ	密	良好	内外面：浅黄橙色	
45	370	D5 Ⅳ層	第44図 PL	土師器 器台	口径：21.3※ 器高：7.3△	外面：受口部ナデ 内面：受口部ミガキ　脚台部ケズリ	密	良好	内外面：橙色	
46	86	D3 Ⅳ層	第44図 PL15-1	土師器 高坏	口径：15.3※ 器高：4.0△	外面：風化により調整不明、一部ミガキ 内面：風化により調整不明	密	良好	内外面：橙色	内外面赤色塗彩
47	314	D3 Ⅳ層	第44図 PL13-1	土師器 小型高坏	口径：10.7 器高：9.2 底径：13.6	外面：風化により調整不明 内面：坏部調整不明　脚部：ケズリ	密	良好	内外面：浅黄橙色	
48	337	D2 Ⅳ層	第44図 PL15-1	土師器 低脚坏	口径：12.9※ 器高：5.3 底径：4.7※	外面：ハケ　脚部ミガキ 内面：ミガキ	密	良好	内外面：浅黄橙色	
49	327	D3 Ⅳ層	第44図 PL13-1	弥生土器 蓋	口径：10.6 器高：5.7	内外面：ナデ	やや粗	良好	内外面：黒褐色～橙色	
50	329	D4 Ⅳ層	第44図	土師器 壺	口径：13.4※ 器高：9.4△	外面：口縁部ナデ　肩部刺突文　胴部ミガキ 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ	密	良好	外面：浅黄橙色 内面：明黄褐色	
51	328	Ⅳ層	第44図 PL14-1	弥生土器 甕	口径：17.0※ 器高：5.0△	外面：口縁部平行沈線　頸部ハケ 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ	密	良好	内外面：にぶい黄橙色	
52	312	D3 Ⅳ層	第44図 PL14-1	弥生土器 甕	口径：18.3※ 器高：5.7△	外面：口縁部平行沈線 内面：口縁部ミガキ　頸部以下ケズリ	密	良好	外面：にぶい橙色 内面：褐灰色	
53	330	D4 Ⅳ層	第44図 PL13-1	弥生土器 蓋	口径：16.4※ 器高：5.7△	外面：口縁部：平行沈線 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ	密	良好	内外面：灰黄色	
54	369	D2 Ⅳ層	第44図	土師器 小型品	器高：6.7△ 底径：4.5	外面：ナデ後ユビオサエ 内面：ナデ	密	良好	内外面：浅黄橙色	
55	148	D3 Ⅳ層	第44図 PL17-1	土製支脚	器高：5.6△	外面：ナデ、ユビオサエ	密	良好	外面：にぶい黄橙色	中空
56	823	D7 Ⅱ～Ⅳ層	第46図 PL14-1	土師器 皿	口径：10.0※ 器高：1.99 底径：6.8※	外面：回転ナデ　底部回転糸切り　板目圧痕 内面：回転ナデ	密	良好	外面：にぶい橙色 内面：明黄褐色	灯明皿
57	823	D7 Ⅱ～Ⅳ層	第46図 PL14-1	土師器 皿	口径：8.7※ 器高：2.0 底径：7.0※	外面：回転ナデ　底部回転糸切り　板目圧痕 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：橙色	
58	800	D6 Ⅱ～Ⅳ層	第46図 PL14-1	備前焼 擂鉢	口径：26.6※ 器高：6.6△	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ　卸目	密	良好	外面：褐灰色～にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
59	33	D4 Ⅱ～Ⅳ層	第46図 PL14-1	瓦質土器 羽釜	口径：21.6※ 器高：5.1△	外面：回転ナデ・ユビオサエ 内面：回転ナデ	密	良好	外面：灰色 内面：灰白色	
60	19	D2 Ⅱ～Ⅳ層	第46図 PL14-1	須恵器 坏	口径：9.4※ 器高：2.4△ 底径：5.0※	外面：回転ナデ　底部ヘラ切り後回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：灰色	
61	34	D5 Ⅱ～Ⅳ層	第46図 PL15-1	須恵器 壺	器高：6.6△ 底径：9.15※	外面：回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	外面：灰白～灰色 内面：灰白色	

表４　土器・土製品観察表（３）

※復元値　△現存値

遺物番号	取上番号	遺構 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量（cm）	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
62	20	D3 Ⅱ～Ⅳ層	第46図	須恵器 高坏	器高：8.4△ 底径：8.8※	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：灰白色	
63	34	D5 Ⅱ～Ⅳ層	第46図 PL13-1	土師器 小型丸底壺	口径：9.2※ 器高：6.0△	外面：調整不明 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ	密	良好	内外面：浅黄橙色	
64	222 414	D3 Ⅲ層	第46図	土師器 小型壺	口径：10.8※ 器高：5.1△	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ　頸部以下ケズリ	密	良好	内外面：にぶい黄橙色	
65	30	D4 Ⅱ～Ⅳ層	第46図	土師器 高坏	器高：9.2△ 底径：10.0※	外面：坏部ハケ　脚部ミガキか。 内面：坏部調整不明　脚部下半ユビオサエ	密	良好	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色～黄橙色	
66	27・28	D2 Ⅱ～Ⅳ層	第46図 PL13-1	土師器 高坏	口径：16.6※ 器高：12.5△	外面：ナデ　有段坏部を持つ。 内面：坏部ミガキ　脚部ケズリ	密	良好	内外面：浅黄橙色	
67	631	C5 Ⅳ層	第46図	土錘	長さ：3.7 外径：2.6 孔径：1.4	外面：ナデ、ユビオサエ	密	良好	外面：橙色 内面：橙色～にぶい橙色	8.96ｇ△
68	15	D3 Ⅱ～Ⅳ層	第46図	土錘	長さ：3.9 外径：0.9 孔径：0.25	外面：ナデ・ユビオサエ	密	良好	橙色	
69	921	埋没谷５ 1層	第50図 PL18-1	陶器 碗	器高：3.0△ 底径：4.6※	内外面：施釉　削出し高台	密	良好	施釉：オリーブ灰色 露胎：にぶい赤橙色	
70	754	埋没谷５ 1層	第50図 PL18-1	白磁 碗	器高：5.1△	内外面：施釉　口縁部玉縁	密	良好	外面：灰白色 内面：淡黄色	白磁碗Ⅳ類
71	635	埋没谷５ 1層	第50図 PL18-1	青磁 碗	器高：4.4△	内外面：施釉　無文	密	良好	施釉：オリーブ灰	龍泉窯系碗Ｅ類
72	782	埋没谷５ 1層	第50図 PL18-1	瓦質土器 鍋	器高：3.7△	外面：ナデ　一部ユビオサエ 内面：ナデ	密	良好	内外面：黄灰色	
73	755	埋没谷５ 1層	第50図 PL18-1	中世須恵器 甕	器高：6.8△	外面：格子タタキ 内面：粗いハケ	密	良好	外面：浅黄色 内面：灰黄色	亀山系
74	663	埋没谷５ 1層	第50図	土師器 坏	器高：1.8△ 底径：2.8※	外面：回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい黄褐色	
75	243	埋没谷５ 上面	第50図 PL18-1	土師器 皿	口径：6.9※ 器高：1.49 底径：5.1※	外面：回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：橙色	
76	388	埋没谷５ 1層	第50図 PL81-1	土師器 坏	器高：2.7△ 底径：5.7※	内外面：回転ナデ	密	良好	内外面：明橙色	
77	664	埋没谷５ 1層	第50図 PL18-1	土師器 鍋	器高：3.5△	内外面：回転ナデ	密	良好	外面：褐灰色 内面：にぶい黄褐色～褐灰色	
78	667	埋没谷５ 1層	第50図 PL18-1	土師器 鍋	口径：37.4※ 器高：10.0△	外面：ハケ　頸部一部ユビオサエ 内面：ハケ	密	良好	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
79	798	埋没谷５ 1層	第50図	土師器 甕	口径：22.5※ 器高：4.0△	外面：ナデ　頸部一部ユビオサエ 内面：口縁部ナデ　頸部以下ハケ	密	良好	内外面：にぶい褐色～褐灰色	
80	399	埋没谷５ 1層	第50図 PL18-1	須恵器 坏蓋	口径：15.4※ 器高：3.0	外面：回転ナデ　天井部回転ヘラケズリ後回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：灰色	
81	398	埋没谷５ 1層	第50図 PL17-3	須恵器 坏蓋	口径：15.4 器高：3.0	外面：回転ナデ　天井部回転ヘラケズリ後回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：灰色	
82	349	埋没谷５ 1層	第50図 PL18-1	須恵器 瓶	口径：7.2※ 器高：6.4△	外面：口縁～頸部下カキ目 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：灰色	焼き歪みあり
83	761	埋没谷５ 1層	第50図 PL17-3	須恵器 高坏	器高：5.4△ 底径：7.4※	外面：回転ナデ　脚部波状文 内面：回転ナデ	密	良好	外面：暗青灰色 内面：明青灰色	
84	278	埋没谷５ 1層	第50図	土師器 埦	口径：14.2※ 器高：4.8△	内外面：風化により調整不明	密	良好	内外面：にぶい橙色	
85	672	埋没谷５ 1層	第50図	土師器 壺	口径：22.8※ 器高：7.9△	内外面：ナデ	密	良好	内外面：浅黄橙色	
86	700	埋没谷５ 黒色系土	第50図 PL18-1	土師器 壺	口径：20.0※ 器高：8.0△	外面：ナデ 内面：ナデ、一部ユビオサエ	やや密	良好	内外面：褐色	
87	853	埋没谷５ 黒色系土	第50図 PL18-1	土師器 甕	口径：12.4※ 器高：5.3△	外面：ナデ 内面：調整不明、一部ユビオサエ	密	良好	外面：浅黄橙色 内面：灰白色	
88	305	埋没谷５ 1層	第50図 PL18-1	土師器 小型丸底壺	口径：9.2※ 器高：8.0△	外面：ナデ、赤色塗彩 内面：口縁部ナデ、頸部以下ナデ後一部ユビオサエ　口縁部赤色塗彩	密	良好	内外面：浅黄橙色	
89	722	埋没谷５ 黒色系土	第50図	土師器 小型丸底壺	口径：10.4※ 器高：4.7△	外面：調整不明 内面：ナデ、頸部以下ケズリ	やや粗	良好	外面：明赤褐色 内面：橙色	
90	674	埋没谷５ 1層	第50図 PL18-1	土師器 器台	口径：20.5※ 器高：6.8△	内外面：風化により調整不明	密	良好	内外面：浅黄橙色	
91	673	埋没谷５ 1層	第50図	土師器 高坏	口径：16.8※ 器高：6.7△	内外面：風化により調整不明	密	良好	内外面：浅黄橙色	
92	1200	埋没谷５ 黒色系土	第50図	土師器 坏	口径：18.4※ 器高：4.5△	内外面：風化により調整不明	密	良好	内外面：橙色	

表５　土器・土製品観察表（４）

※復元値　△現存値

遺物番号	取上番号	遺構層位名	挿図PL	種類器種	法量（cm）	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
93	1201	埋没谷５ 黒色系土	第50図	土師器 高坏	口径：16.0 器高：5.4△	外面：ミガキ、工具痕あり 内面：ハケ後ミガキ	やや粗	良好	内外面：橙色	
94	712	埋没谷５ 黒色系土	第50図	土師器 低脚坏	器高：5.0△ 底径：5.4	内外面：風化により調整不明	密	良好	外面：灰白色 内面：褐灰色	
95	715	埋没谷５ 黒色系土	第50図	土師器 低脚坏	口径：12.1※ 器高：4.4 底径：4.0※	外面：風化により調整不明 内面：坏部調整不明、脚部ナデ	密	良好	外面：浅黄橙色～褐灰色 内面：にぶい黄褐色	
96	801	埋没谷５ 1層	第50図 PL17-3	土師器 小型器台	口径：11.6※ 器高：9.4 底径：11.4※	外面：風化により調整不明 内面：風化により調整不明　脚部ハケ	密	良好	内外面：浅黄橙色	
97	718	埋没谷５ 黒色系土	第50図	土師器 高坏	器高：7.6△ 底径：10.9※	外面：脚部摩耗が著しいが、ミガキか。３方向に円形透かしあり。 内面：脚部上半ケズリ後ナデ、下半ユビオサエ	密	良好	内外面：浅黄橙色	
98	739	埋没谷５ 1層	第50図 PL18-1	弥生土器 甕	口径：16.7※ 器高：5.0△	外面：口縁部平行沈線、頸部以下一部ハケ 内面：口縁部ナデ、一部ハケ　頸部以下ケズリ	密	良好	内外面：にぶい黄褐色	
99	887	埋没谷５ 黒色系土	第50図 PL18-1	弥生土器 甕	口径：16.7※ 器高：5.0△	外面：口縁部平行沈線、頸部以下ナデ 内面：口縁部ナデ、一部ハケ　頸部以下ケズリ	密	良好	内外面：にぶい黄褐色	
100	738	埋没谷５ 1層	第50図 PL18-1	弥生土器 甕	口径：14.0※ 器高：3.01△	外面：口縁部３条凹線 内面：頸部以下ケズリ	密	良好	内外面：にぶい黄褐色	
101	820	埋没谷５ 1層	第50図 PL17-3	手捏土器	口径：7.3※ 器高：4.7△	外面：ユビオサエ 内面：ナデ・ユビオサエ	密	良好	内外面：にぶい黄橙色	
102	311	埋没谷５ 1層	第50図 PL17-3	手捏土器	口径：6.8※ 器高：4.4△	外面：ユビオサエ　底部板目 内面：ユビオサエ	密	良好	内外面：にぶい黄橙色	
103	928	埋没谷５ 1層	第51図	土玉	外径：3.1 孔径：0.7	外面：ナデ、ユビオサエ	密	良好	外面：黒～灰褐色	重量26.67ｇ
104	781	埋没谷５ 1層	第51図	土錘	長さ：3.4 外径：0.6 孔径：0.1	外面：ナデ	密	良好	内外面：橙色～にぶい橙色	重量1.28ｇ
105	250	F8 表土	第52図 PL19-1	弥生土器 壺	口径：18.7※ 器高：2.8△	外面：口縁部5条凹線 内面：口縁部ハケ	密	良好	内外面：橙色	
106	5 39 40	D3 表土	第52図 PL17-3	土師器 壺	口径：27.2※ 器高：17.0△	外面：口縁部ナデ　肩部刺突文 内面：調整不明　肩部一部ユビオサエ	密	良好	内外面：浅黄橙色	
107	91	F9 表土	第52図	須恵器 坏蓋	口径：15.4 器高：1.6	外面：天井部回転ヘラケズリ後ナデ　回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：灰色	
108	91	F9 表土	第52図	須恵器 甕	口径：9.8※ 器高：9.55 底径：4.1※	外面：回転ナデ　胴部下半回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：青灰色	
109	1	表土	第52図 PL19-1	須恵器 坏	器高：1.1△ 底径：7.6※	外面：回転ナデ　底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：青灰色	
110	189	G7	第52図	土師器 柱状高台	器高：4.1△ 底径：5.6※	外面：回転ナデ　底部回転糸切り	密	良好	外面：オリーブ褐色 内面：にぶい黄褐色～黄灰色	
111	655	H8 撹乱土	第52図 PL19-1	瀬戸・美濃焼 天目茶碗	器高：3.7△ 底径：3.8※	外面：鉄釉　体部下半・高台は露胎 内面：鉄釉	密	良好	釉：黒色 胎土：にぶい黄褐色	大窯期
112	432	F10 撹乱土	第52図 PL19-1	青磁 碗	器高：3.1△ 底径：5.0※	外面：施釉　体部下半・高台は露胎 内面：施釉	密	良好	釉：明緑灰白色 胎土：淡黄色	龍泉窯系
113	417	F8 表土	第52図	土玉	外径：3.5 孔径：0.5	外面：ナデ・ユビオサエ	密	良好	外面：黒褐色	重さ30.7ｇ

表６　石器・石製品観察表

※復元値　△現存値

遺物番号	地区 遺構・層位名	取上番号	挿図 PL	種　類	石　材	法　量（cm）	重量（g）	備　考
Ｓ１	Ⅲ層	261	第43図 PL19-3	石核	碧玉	最大長:2.9　最大幅:2.8　最大厚:2.9	30.3	
Ｓ２	Ｄ2 Ⅳ層	351	第44図 PL19-4	敲石	デイサイト	最大長:17.0　最大幅:12.5　最大厚:5.4	1560	
Ｓ３	Ｄ2 Ⅳ層	324	第45図 PL19-3	石匙	サヌカイト	最大長:5.6　最大幅:6.2　最大厚:0.7	20.2	
Ｓ４	Ｄ6 Ⅱ～Ⅲ層	783	第51図 PL17-2	茶臼	斑糲岩	径:34.8※　最大厚:3.1	401	
Ｓ５	埋没谷５ １層	690	第51図 PL19-4	扁平片刃石斧	緑色片岩	最大長:12.6　最大幅:7.9　最大厚:0.9	201	
Ｓ６	埋没谷５ １層	1203	第51図 PL19-4	太型蛤刃石斧	閃緑岩	最大長:10.6△　最大幅:4.5　最大厚:4.2	390	
Ｓ７	埋没谷５ １層	1006	第51図 PL19-4	石鏃未成品	安山岩	最大長:19.7　最大幅:7.7　最大厚:4.1	955	
Ｓ８	埋没谷５ １層	288	第51図 PL19-3	石鏃	サヌカイト	最大長:2.1△　最大幅:1.2△　最大厚:0.3	0.87	
Ｓ９	埋没谷５ １層	511	第51図 PL19-3	削器	サヌカイト	最大長:5.4　最大幅:6.7　最大厚:2.0	59.04	
Ｓ10	Ｂ7 表土	519	第52図	打欠石錘	デイサイト	最大長:8.0　最大幅:5.0　最大厚:1.8	101	
Ｓ11	Ｃ6 表土	420	第52図 PL19-4	打欠石錘	デイサイト	最大長:6.1　最大幅:4.4　最大厚:0.9	34.6	

表７　木製品観察表

△現存値

遺物番号	地区 遺構・層位名	取上番号	挿図 PL	種　類		樹　種	法　量（cm）	備　考
Ｗ１	掘立柱建物１ Ｐ６	541	第22図 PL20-1	柱材	芯持丸太材	クリ	最大長:35.1△　最大幅:16.6　最大厚:12.8	
Ｗ２	ピット群１ ピット１	1153	第39図 PL20-1	柱材	芯去角材	スギ	最大長:10.6△　最大幅:4.5　最大厚:4.2	
Ｗ３	ピット群１ ピット２	1148	第39図 PL20-2	柱材	芯去角材	スギ	最大長:46.4△　最大幅:14.6　最大厚:13.6	
Ｗ４	ピット群３ ピット12	1147	第39図 PL20-1	柱材	分割材	スギ	最大長:31.1△　最大幅:14.2　最大厚:13.2	
Ｗ５	ピット群３ ピット13	1152	第39図 PL20-1	柱材	芯去角材	スギ	最大長:27.0△　最大幅:16.1　最大厚:8.9	
Ｗ６	ピット群３ ピット24	1175	第39図 PL20-2	柱材	芯持丸太材	－	最大長:40.0△　最大幅:13.5　最大厚:13.0	
Ｗ７	ピット群３ ピット15	1029	第39図 PL20-2	柱材	芯持丸太材	クリ	最大長:48.0△　最大幅:15.0　最大厚:14.0	
Ｗ８	ピット群３ ピット21	1032	第39図	柱材	芯去角材	スギ	最大長:33.9△　最大幅:15.1　最大厚:13.6	
Ｗ９	ピット群３ ピット14	1030	第39図 PL20-1	柱材／杭材	分割材	クリ	最大長:34.1△　最大幅:7.5　最大厚:6.1	
W10	ピット群２ ピット４	602	第39図 PL20-1	柱材	芯持丸太材	スギ	最大長:29.2△　最大幅:9.3　最大厚:8.7	

表８　金属製品観察表

△現存値

遺物番号	地区 遺構・層位名	取上番号	挿図 PL	種　類	法　量（cm）	重量（g）	備　考
Ｂ１	土坑６	967	第30図 PL19-2	飾金具 （銅製品）	最大径:3.3　孔径:0.5　最大厚:0.12	201	猪目文様の透かしを持つ。
Ｆ１	ピット群３ ピット10	1171	第35図 PL19-2	不明鉄製品 （鋳造品）	最大長:10.6△　最大幅:4.5　最大厚:4.2	－	突起部を持つ。
Ｃ１	Ｂ7 表土	519	第52図 PL19-2	銅銭 洪武通宝	最大長:8.0　最大幅:5.0　最大厚:1.8	2.22	明銭(初鋳1368年)

第４章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
小林紘一・Zaur Lomtatidze・小林克也

１　はじめに

鳥取県鳥取市に位置する乙亥正大角遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行われている（第２節参照）。

２　試料と方法

試料は、掘立柱建物１Ｐ６の柱Ｗ１（試料№１：PLD-31755）、ピット群１ピット１の柱Ｗ２（試料№２：PLD-31756）、ピット群１ピット２の柱Ｗ３（試料№３：PLD-31757）、ピット群２ピット４の柱W10（試料№４：PLD-31758）、ピット群３ピット12の柱Ｗ４（試料№５：PLD-31759）、ピット群３ピット13の柱Ｗ５（試料№６：PLD-31760）、ピット群３ピット14の柱Ｗ９（試料№７：PLD-31761）、ピット群３ピット15の柱Ｗ７（試料№８：PLD-31762）、ピット群３ピット21の柱Ｗ８（試料№９：PLD-31763）の、計９点の生材である。いずれも共伴遺物等はみられず、時期は不明である。

試料№４と７、８には最終形成年輪が残っていた。試料№１は最終形成年輪が残っている可能性があり、試料№９は辺材部が残っていたが、それ以外の試料（試料№２、３、５、６）では最終形成年輪が残っていなかった。樹種同定の結果では、試料№２、３、４、５、６、９はスギ、試料№１、７、８はクリであった。測定試料の情報、調製データは表９のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

３　結果

表10に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代を、図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範

囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４　考察

以下、２σ暦年代範囲(確率95.4%)に着目して、暦年代の古い順に結果を整理する。

ピット群１ピット１の試料№２(PLD-31756)は1170-1174calAD(1.7%)および1179-1258calAD(93.7%)、ピット群１ピット２の試料№３(PLD-31757)は1190-1263calAD(95.4%)、ピット群３ピット12の試料№５(PLD-31759)は1184-1263calAD(95.4%)で、いずれも12世紀後半～13世紀後半の暦年代を示した。これは、平安時代後期から鎌倉時代に相当する。これらの３試料は、いずれも最終形成年輪が残っていなかった。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の測定結果は古木効果の影響を受けていると考えられ、実際に木が枯死もしくは伐採されたのは、測定結果よりも新しい年代であったと考えられる。

ピット群３ピット13の試料№６(PLD-31760)は1221-1273calAD(95.4%)で、13世紀代の暦年代を示した。これは、鎌倉時代に相当する。この試料は最終形成年輪が残っていなかったため、実際に木が枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりも新しい年代であった可能性がある。

ピット群２ピット４の試料№４(PLD-31758)は1280-1310calAD(53.3%)および1360-1388calAD(42.1%)で、13世紀後半～14世紀後半の暦年代を示した。これは、鎌倉時代から室町時代に相当する。この試料は最終形成年輪が残っており、測定結果は木の枯死もしくは伐採年代を示している。

掘立柱建物１Ｐ６の試料№１(PLD-31755)は1307-1363calAD(70.0%)および1385-1409calAD(25.4%)、ピット群３ピット21の試料№９(PLD-31763)は1320-1350calAD(39.9%)および1391-1420calAD(55.5%)で、いずれも14世紀前半～15世紀前半の暦年代を示した。これは、鎌倉時代から室町時代に相当する。試料№１は最終形成年輪が残っている可能性があり、試料№９は辺材部が残っていた。したがって、これらの試料の枯死もしくは伐採年代は、測定結果よりも少しだけ新しい年代であったと考えられる。

ピット群３ピット14の試料№７(PLD-31761)は1491-1603calAD(76.8%)および1614-1640calAD(18.6%)、ピット群３ピット15の試料№８(PLD-31762)は1476-1530calAD(32.4%)および1539-1635calAD(63.0%)で、15世紀後半～17世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代から江戸時代前期に相当する。この試料はいずれも最終形成年輪が残っており、測定結果は木の枯死もしくは伐採年代を示している。

【参考文献】

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫2000放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」：3-20, 日本第四紀学会.

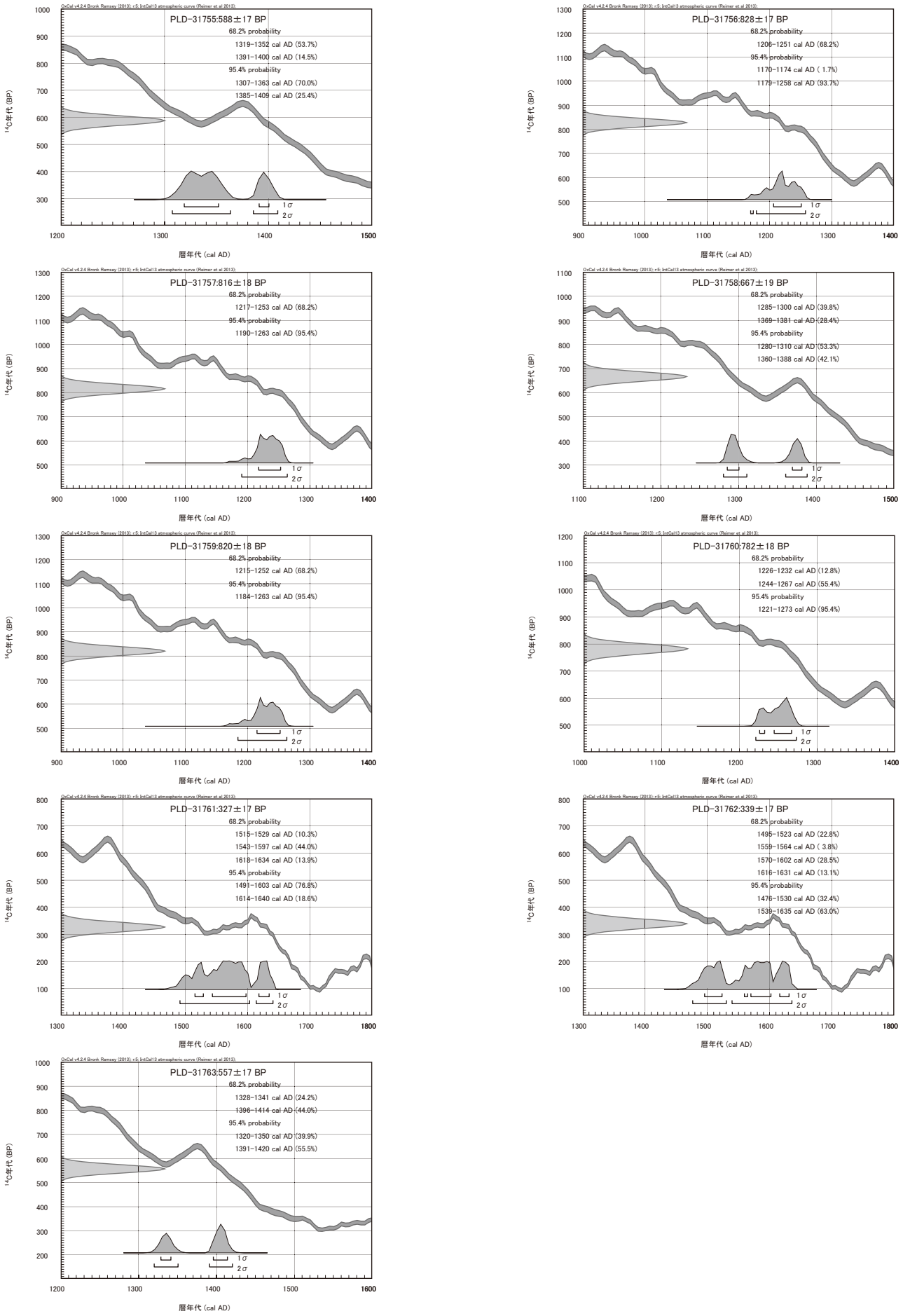
Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

表９　測定試料及び処理

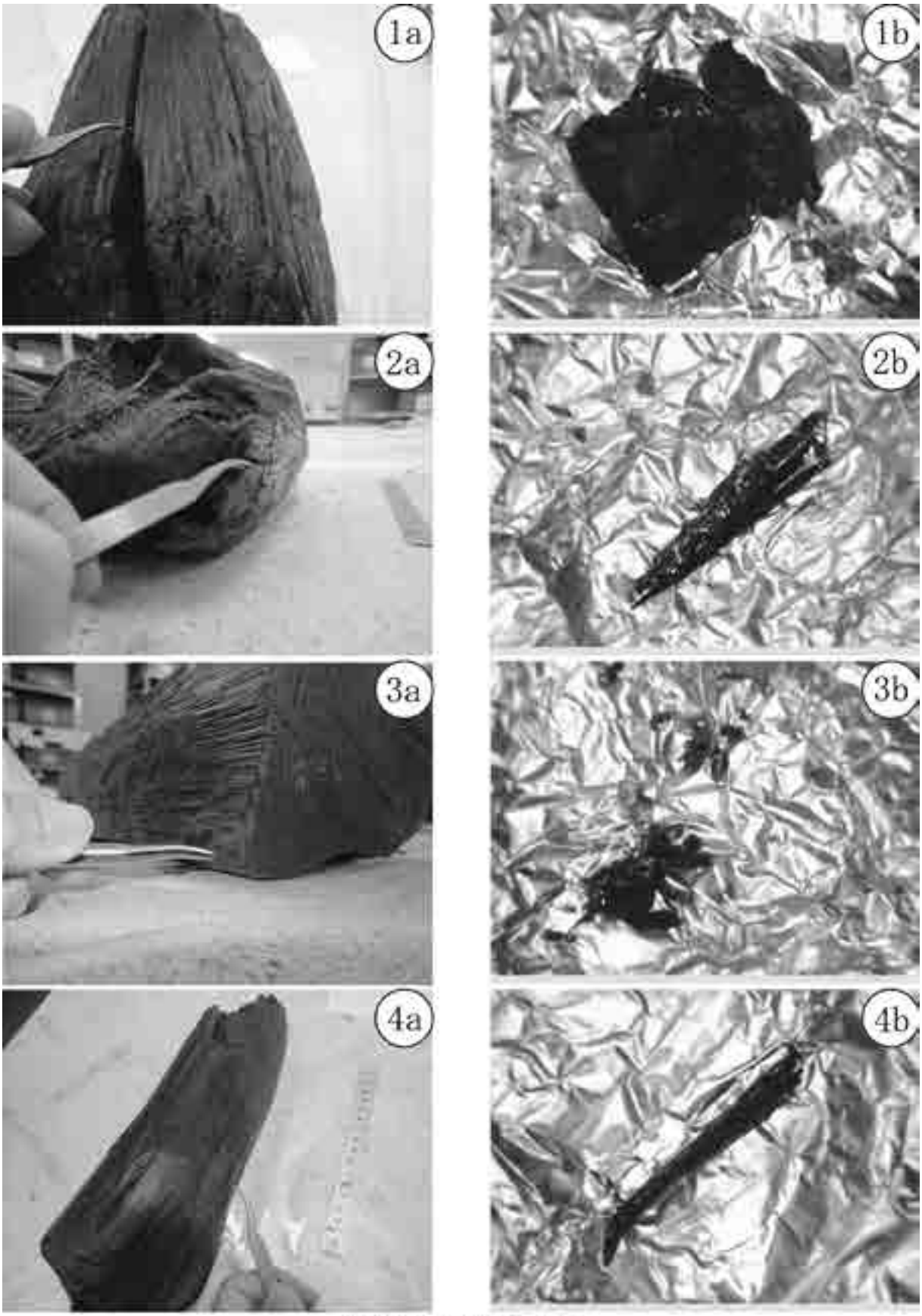
測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-31755	試料№１ Ｗ１ 遺構：掘立柱建物１Ｐ６ 色調：黒	種類：生材(クリ) 試料の性状：辺材(最終形成年輪?) 器種：柱　角材 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-31756	試料№２ Ｗ２ 遺構：ピット群１ピット１ 色調：黒褐色	種類：生材(スギ) 試料の性状：心材(部位不明) 器種：柱　角材 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-31757	試料№３ Ｗ３ 遺構：ピット群１ピット２ 色調：茶褐色	種類：生材(スギ) 試料の性状：心材(部位不明) 器種：柱　角材 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-31758	試料№４ Ｗ10 遺構：ピット群２ピット４ 色調：黒褐色	種類：生材(スギ) 試料の性状：辺材(最終形成年輪) 器種：柱　角材 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-31759	試料№５ Ｗ４ 遺構：ピット群３ピット12 色調：黒褐色	種類：生材(スギ) 試料の性状：心材(部位不明) 器種：柱　角材 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-31760	試料№６ Ｗ５ 遺構：ピット群３ピット13 色調：黒褐色～茶	種類：生材(スギ) 試料の性状：心材(部位不明) 器種：柱　角材 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-31761	試料№７ Ｗ９ 遺構：ピット群３ピット14 色調：黒褐色	種類：生材(クリ) 試料の性状：辺材(最終形成年輪) 器種：柱　角材 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-31762	試料№８ Ｗ７ 遺構：ピット群３ピット15 色調：黒褐色～茶	種類：生材(クリ) 試料の性状：辺材(最終形成年輪) 器種：柱　角材 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-31763	試料№９ Ｗ８ 遺構：ピット群３ピット21 色調：黒褐色～茶	種類：生材(スギ) 試料の性状：辺材(最終形成年輪以外) 器種：柱　角材 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)

表10　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±１σ)	^{14}C年代 (yrBP±１σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
PLD-31755 試料№１ Ｗ１	-25.91±0.17	588±17	590±15	1319-1352calAD(53.7%) 1391-1400calAD(14.5%)	1307-1363calAD(70.0%) 1385-1409calAD(25.4%)
PLD-31756 試料№２ Ｗ２	-23.47±0.14	828±17	830±15	1206-1251calAD(68.2%)	1170-1174calAD(1.7%) 1179-1258calAD(93.7%)
PLD-31757 試料№３ Ｗ３	-24.98±0.15	816±18	815±20	1217-1253calAD(68.2%)	1190-1263calAD(95.4%)
PLD-31758 試料№４ Ｗ10	-25.79±0.16	667±19	665±20	1285-1300calAD(39.8%) 1369-1381calAD(28.4%)	1280-1310calAD(53.3%) 1360-1388calAD(42.1%)
PLD-31759 試料№５ Ｗ４	-24.84±0.16	820±18	820±20	1215-1252calAD(68.2%)	1184-1263calAD(95.4%)
PLD-31760 試料№６ Ｗ５	-23.51±0.18	782±18	780±20	1226-1232calAD(12.8%) 1244-1267calAD(55.4%)	1221-1273calAD(95.4%)
PLD-31761 試料№７ Ｗ９	-28.93±0.15	327±17	325±15	1515-1529calAD(10.3%) 1543-1597calAD(44.0%) 1618-1634calAD(13.9%)	1491-1603calAD(76.8%) 1614-1640calAD(18.6%)
PLD-31762 試料№８ Ｗ７	-27.90±0.17	339±17	340±15	1495-1523calAD(22.8%) 1559-1564calAD(3.8%) 1570-1602calAD(28.5%) 1616-1631calAD(13.1%)	1476-1530calAD(32.4%) 1539-1635calAD(63.0%)
PLD-31763 試料№９ Ｗ８	-24.97±0.17	557±17	555±15	1328-1341calAD(24.2%) 1396-1414calAD(44.0%)	1320-1350calAD(39.9%) 1391-1420calAD(55.5%)


OxCal v4.2.4 Bronk Ramsey (2013); r:5; IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013);
PLD-31755:588±17 BP
68.2% probability
1319–1352 cal AD (53.7%)
1391–1400 cal AD (14.5%)
95.4% probability
1307–1363 cal AD (70.0%)
1385–1409 cal AD (25.4%)
PLD-31756:828±17 BP
68.2% probability
1206–1251 cal AD (68.2%)
95.4% probability
1170–1174 cal AD (1.7%)
1179–1258 cal AD (93.7%)
PLD-31757:816±18 BP
68.2% probability
1217–1253 cal AD (68.2%)
95.4% probability
1190–1263 cal AD (95.4%)
PLD-31758:667±19 BP
68.2% probability
1285–1300 cal AD (39.8%)
1369–1381 cal AD (28.4%)
95.4% probability
1280–1310 cal AD (53.3%)
1360–1388 cal AD (42.1%)
PLD-31759:820±18 BP
68.2% probability
1215–1252 cal AD (68.2%)
95.4% probability
1184–1263 cal AD (95.4%)
PLD-31760:782±18 BP
68.2% probability
1226–1232 cal AD (12.8%)
1244–1267 cal AD (55.4%)
95.4% probability
1221–1273 cal AD (95.4%)
PLD-31761:327±17 BP
68.2% probability
1515–1529 cal AD (10.3%)
1543–1597 cal AD (44.0%)
1618–1634 cal AD (13.9%)
95.4% probability
1491–1603 cal AD (76.8%)
1614–1640 cal AD (18.6%)
PLD-31762:339±17 BP
68.2% probability
1495–1523 cal AD (22.8%)
1559–1564 cal AD (3.8%)
1570–1602 cal AD (28.5%)
1616–1631 cal AD (13.1%)
95.4% probability
1476–1530 cal AD (32.4%)
1539–1635 cal AD (63.0%)
PLD-31763:557±17 BP
68.2% probability
1328–1341 cal AD (24.2%)
1396–1414 cal AD (44.0%)
95.4% probability
1320–1350 cal AD (39.9%)
1391–1420 cal AD (55.5%)
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)
1σ
2σ

第53図　暦年較正結果

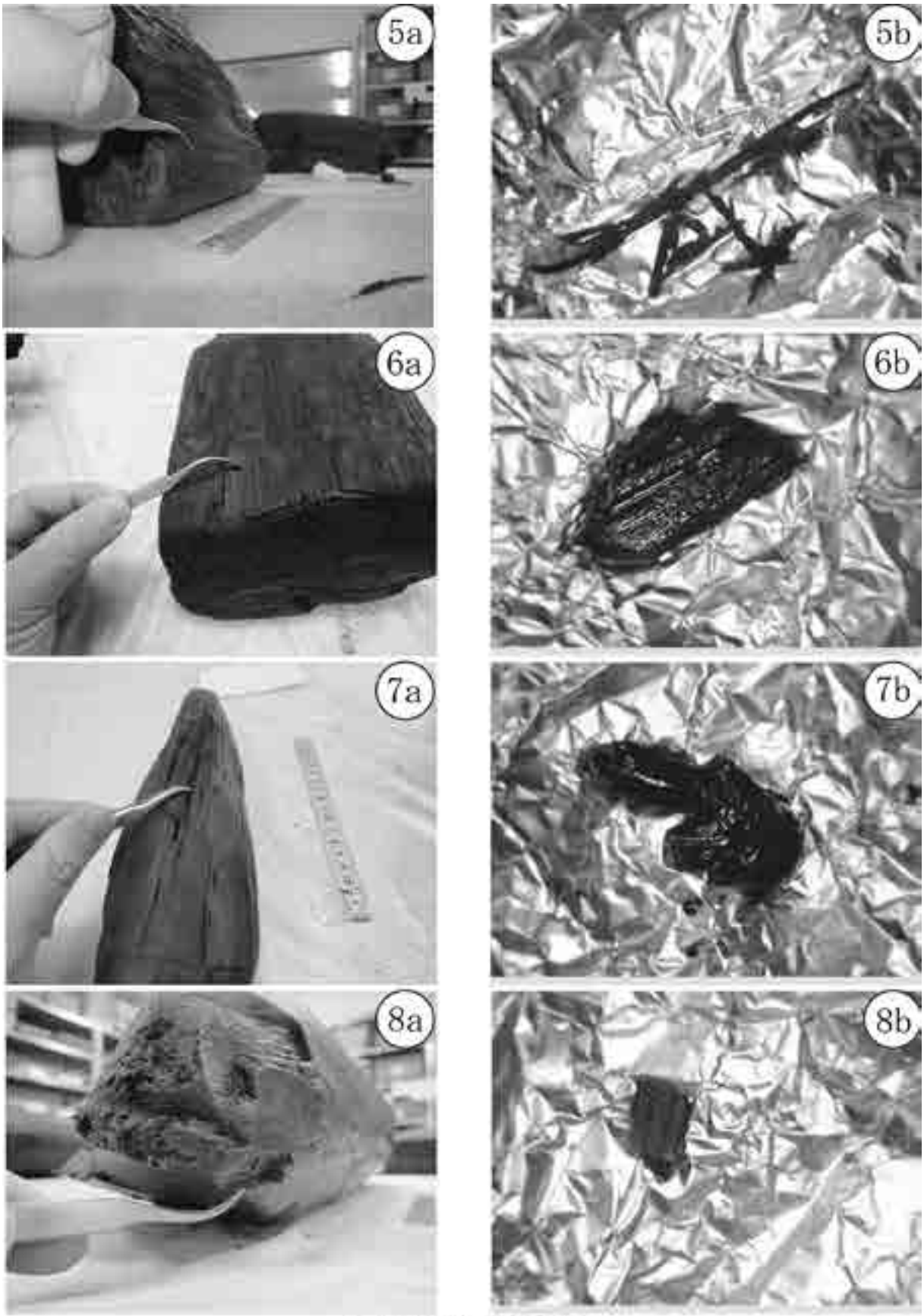


放射性炭素年代測定試料(1)

1a-1b, 試料No. 1(PLD-31755)、2a-2b, 試料No. 2(PLD-31756)

3a-3b, 試料No. 3(PLD-31757)、4a-4b, 試料No. 4(PLD-31758)

a：試料採取位置，b：年代測定を行った試料

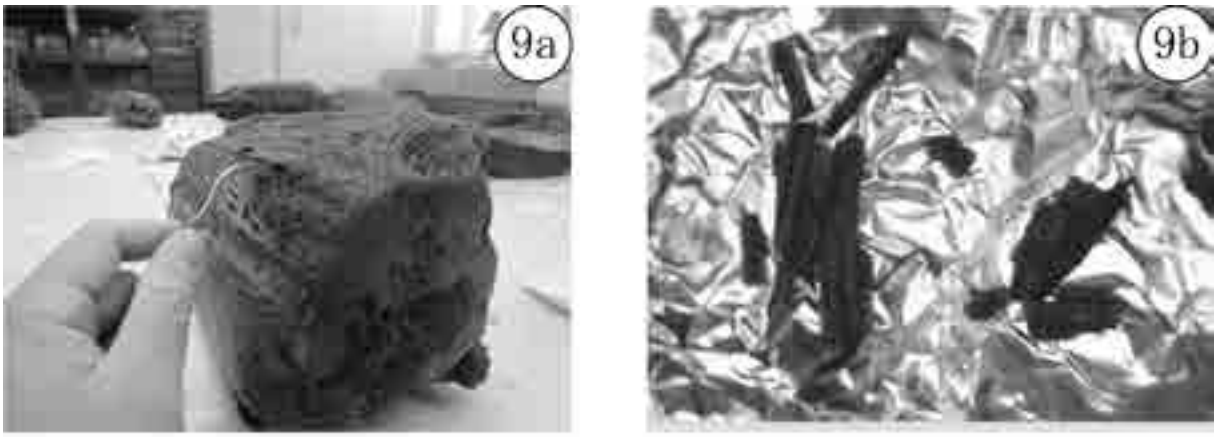


放射性炭素年代測定試料(2)

1a-1b, 試料No. 5(PLD-31759)、2a-2b, 試料No. 6(PLD-31760)

3a-3b, 試料No. 7(PLD-31761)、4a-4b, 試料No. 8(PLD-31762)

a：試料採取位置，b：年代測定を行った試料



放射性炭素年代測定試料(1)
9a-9b. 試料No. 9(PLD-31763)
a：試料採取位置、b：年代測定を行った試料

第２節　樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

１　はじめに

鳥取県鳥取市の乙亥正大角遺跡から出土した柱の樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている(第１節参照)。

２　試料と方法

試料は、掘立柱建物１P６、ピット群１のピット１と２、ピット群２ピット４、ピット群３のピット12、13、14、15、21から出土した柱材、計９点である。放射性炭素年代測定の結果、試料№２、３、５は平安時代後期から鎌倉時代、試料№６は鎌倉時代、試料№１、４、９は鎌倉時代から室町時代、試料№７と№８は室町時代から江戸時代前期の暦年代を示した。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。

樹種同定は、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

３　結果

同定の結果、針葉樹のスギと、広葉樹のクリの、計２分類群がみられた。スギが６点、クリは３点であった。同定結果を表11に、一覧を表12に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

⑴スギ　Cryptomeria japonica (L.f.) D.Don　ヒノキ科　図版１・２　1a-1c(№２)、2a-2c(№３)、3a-3c(№４)、4a-4c(№５)、5a-5c(№６)、6a-6c(№９)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ２～15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、１分野に普通２個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

⑵クリ　Castanea crenata Siebold. et Zucc.　ブナ科　図版３　7a-7c(№１)、8a-8c(№７)、9a-9c(№８)

年輪のはじめに大型の道管が１～３列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列となる。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

４　考察

掘立柱建物およびピットの柱は、スギとクリであった。木取りをみると、スギは芯持丸木やみかん割り、角材など、多様性があり、クリは芯持丸木とみかん割りであった。スギは木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良く、クリは堅硬で耐朽性が高く、軸方向に割裂性が良いという材質を持つ(伊東ほか，2011)。

試料の時期と樹種をみると、平安時代後期から鎌倉時代の試料№２、３、５はいずれもスギ、鎌倉時代の試料№６はスギ、鎌倉時代から室町時代の試料№１はクリ、№４と№９はスギ、室町時代から江戸時代前期の試料№７、８はクリあった。鳥取県の集成では、平安時代以降の柱にクリやシイ属などの広葉樹が利用される事例が多く(伊東・山田，2012)、今回の乙亥正大角遺跡の試料はそれとはやや異なる傾向を示した。乙亥正大角遺跡の周辺の森林環境が、知られている事例の遺跡とは異なっていた可能性がある。

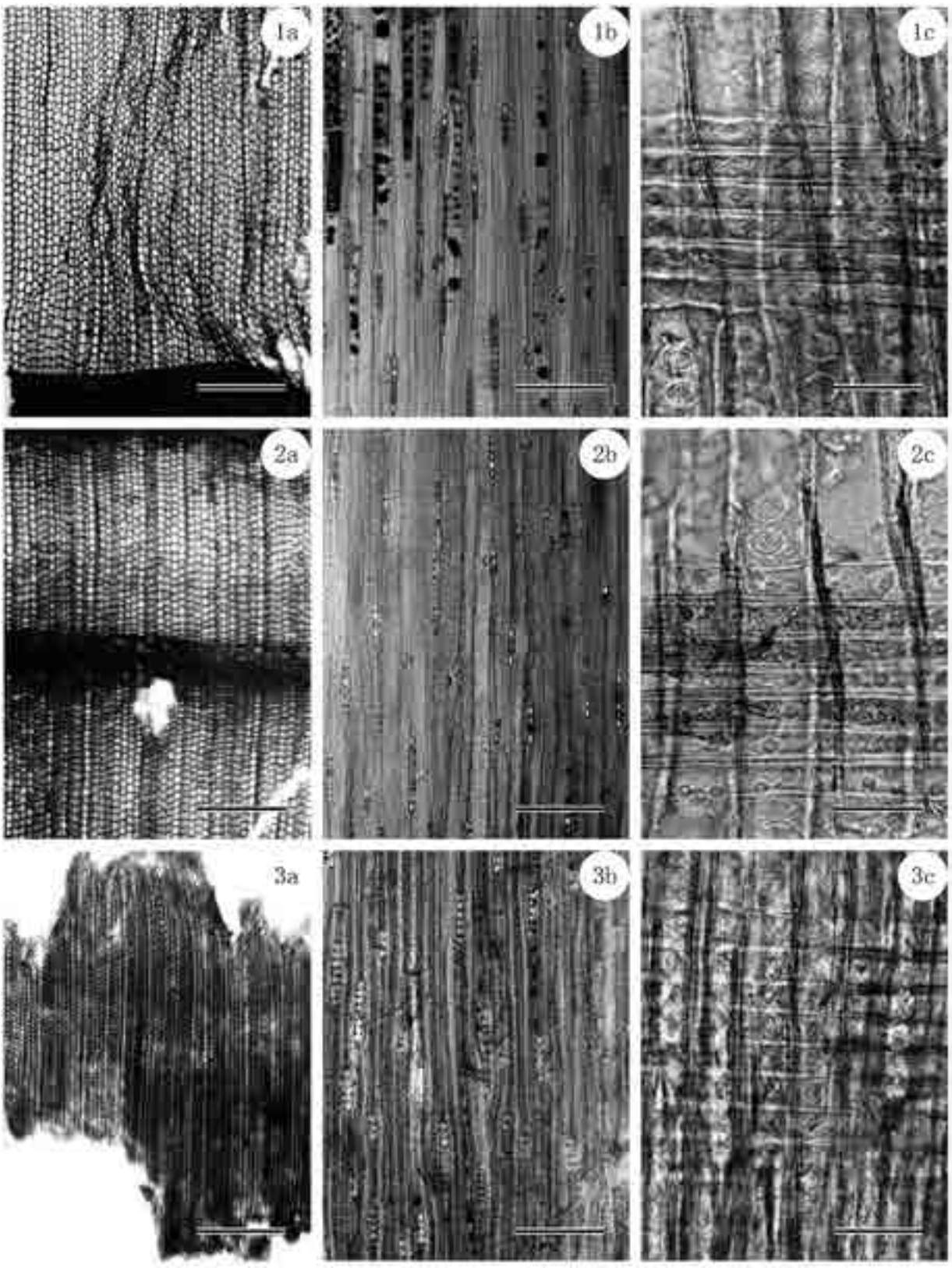
【引用文献】
平井信二(1996)木の大百科－解説編－．642p，朝倉書房.
伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂(2011)日本有用樹木誌，238p，海青社.
伊東隆夫・山田昌久編(2012)木の考古学―出土木製品用材データベース―．449p，海青社.

表11　樹種別同定結果

試料の時期	平安時代後期～鎌倉時代	鎌倉時代	鎌倉時代～室町時代	室町時代～江戸時代前期	合計
樹種　種別	柱	柱	柱	柱	
スギ	3	1	2		6
クリ			1	2	3
合計	3	1	3	2	9

表12　樹種同定結果一覧

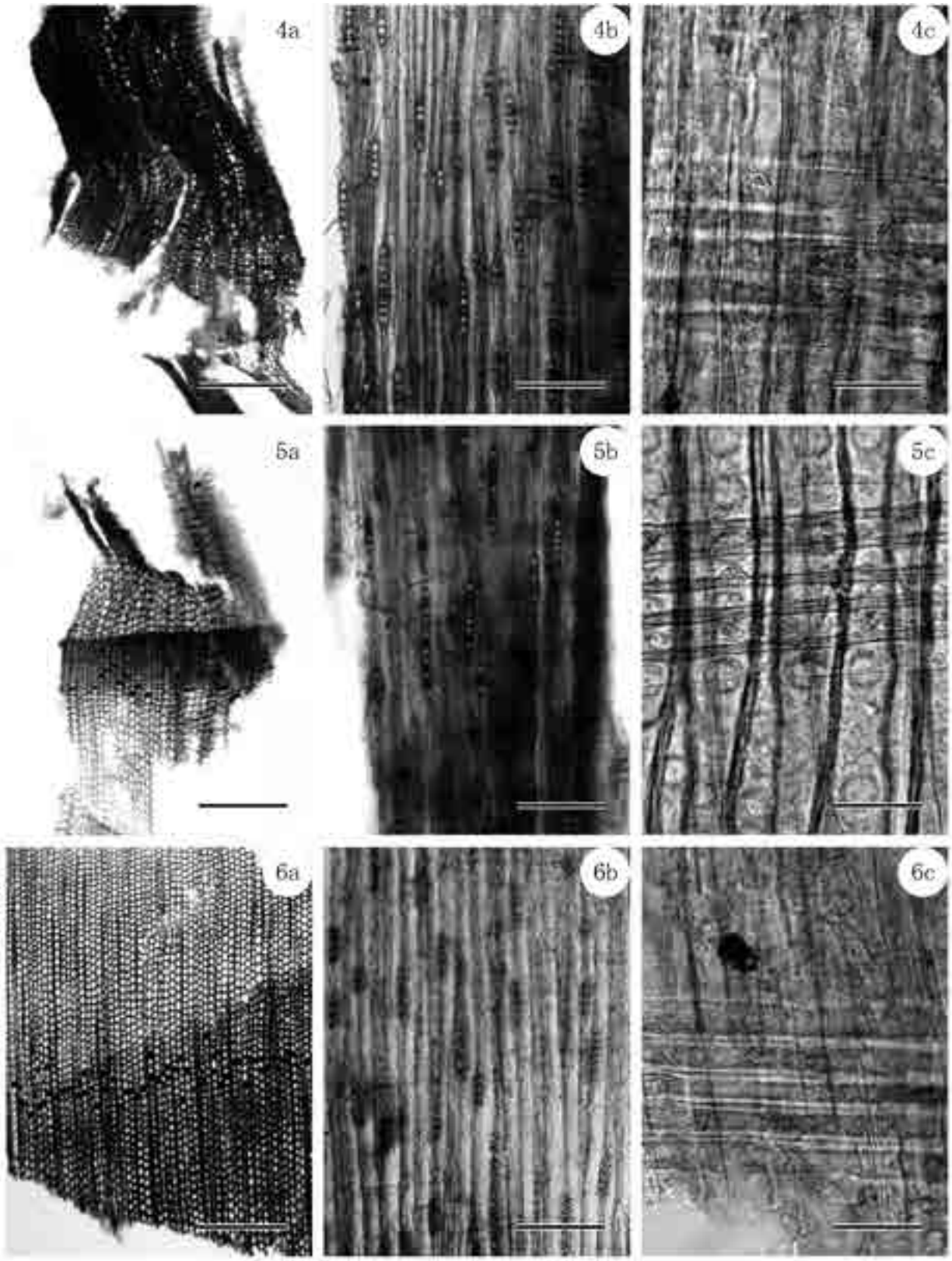
試料No.	遺物No.	出土遺構	器種	樹種	木取り	年代測定番号
1	Ｗ１	掘立柱建物１Ｐ６	柱	クリ	芯持丸木	PLD-31755
2	Ｗ２	ピット群１ピット１	柱	スギ	角材	PLD-31756
3	Ｗ３	ピット群１ピット２	柱	スギ	芯去みかん割り	PLD-31757
4	W10	ピット群２ピット４	柱	スギ	芯持丸木	PLD-31758
5	Ｗ４	ピット群３ピット12	柱	スギ	みかん割り	PLD-31759
6	Ｗ５	ピット群３ピット13	柱	スギ	板目	PLD-31760
7	Ｗ９	ピット群３ピット14	柱	クリ	みかん割り	PLD-31761
8	Ｗ７	ピット群３ピット15	柱	クリ	芯持丸木	PLD-31762
9	Ｗ８	ピット群３ピット21	柱	スギ	角材	PLD-31763



図版1　乙亥正大角遺跡出土の柱の光学顕微鏡写真(1)

1a-1c. スギ(No. 2)、2a-2c. スギ(No. 3)、3a-3c. スギ(No. 4)

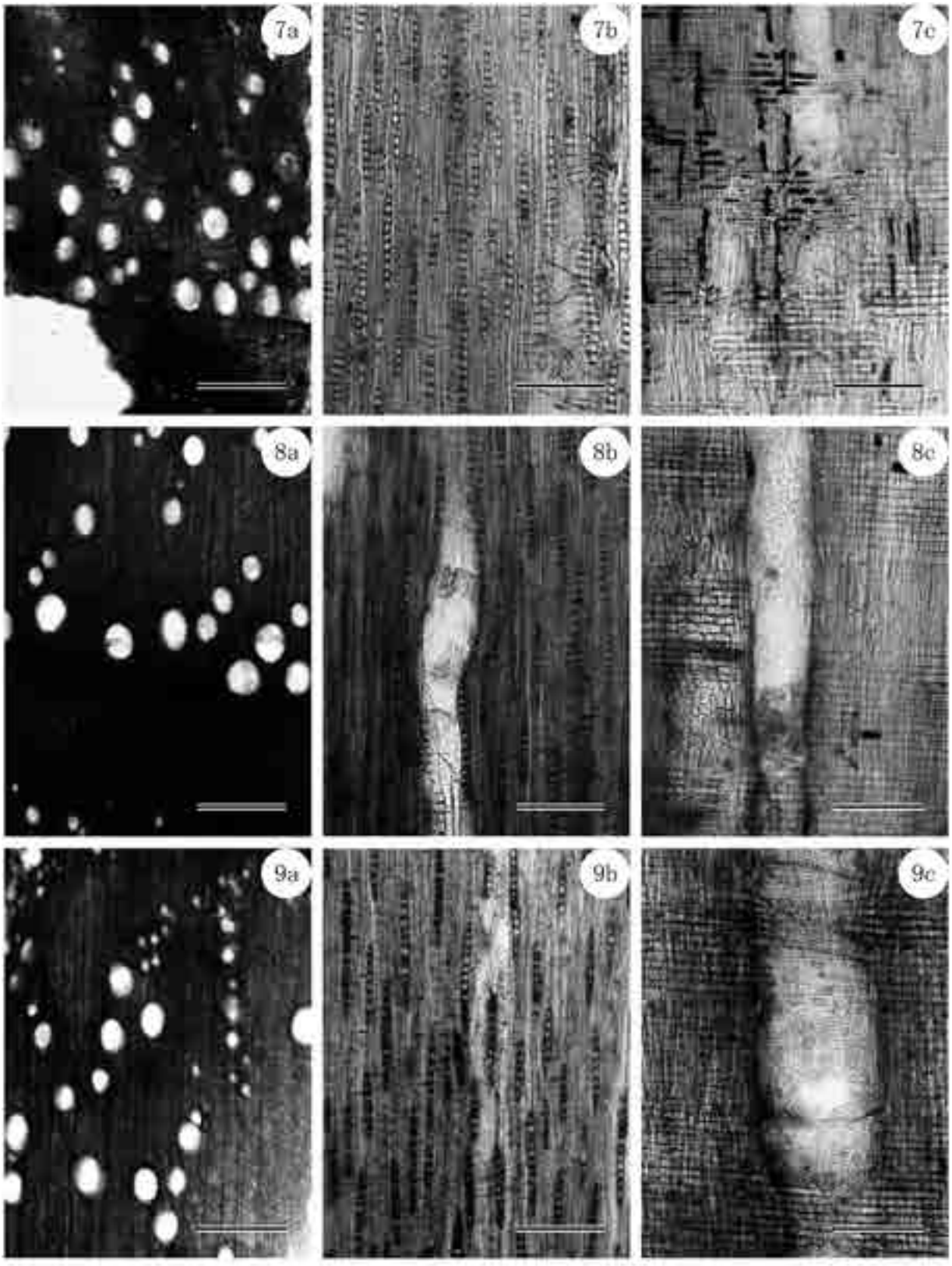
a:横断面(スケール=500 μm)、b:接線断面(スケール=200 μm)、c:放射断面(スケール=50 μm)



図版2　乙宮正大角遺跡出土の柱の光学顕微鏡写真(2)

4a-4c. スギ(No. 5)、5a-5c. スギ(No. 6)、6a-6c. スギ(No. 9)

a:横断面(スケール=500 μm)、b:接線断面(スケール=200 μm)、c:放射断面(スケール=50 μm)



図版3　乙亥正大角遺跡出土の柱の光学顕微鏡写真(3)

7a-7c. クリ(No. 1)、8a-8c. クリ(No. 7)、9a-9c. クリ(No. 8)

a:横断面(スケール=500 μm)、b:接線断面(スケール=200 μm)、c:放射断面(スケール=200 μm)

第５章　調査のまとめ

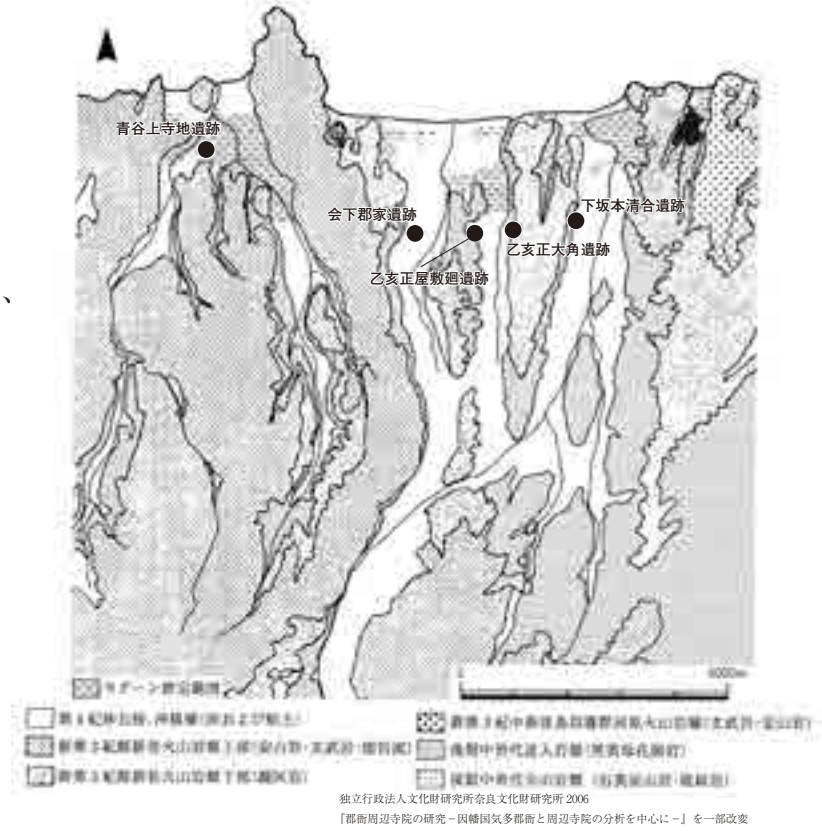
乙亥正大角遺跡では、縄文時代晩期から近世にかけての遺構や遺物を確認した。遺構は希薄であるが、遺物の出土量を考慮すれば、弥生時代後期から古墳時代前期と中・近世を中心とする遺跡であることが分かる。よって、両時期における遺跡の性格を検討することで、本書のまとめとしたい。

まず、弥生時代後期から古墳時時代前期にかけては丘陵斜面を中心に小規模な集落が営まれたと考えられる。調査地ではテラス１～４が造成されているが、埋没谷１から当該期の土器が多量に出土しており、周囲の斜面にはさらに多く段状遺構が営まれていたことが推測される。断片的ではあるが、鳥取市教育委員会が調査を実施した隣接地（第３トレンチ）でも段状遺構の周壁溝とみられる溝が検出されている（鳥取市教育委員会2014）。

遺跡周辺では当該期の集落として、乙亥正屋敷廻遺跡や会下郡家遺跡、下坂本清合遺跡などを挙げることができる。とりわけ、平野を隔てた西側丘陵裾に位置する乙亥正屋敷廻遺跡はこの地域における拠点的集落と目される。本遺跡と同様に急峻な斜面地に段状遺構を雛壇状に多数築くことで居住域を形成しており、丘陵上には墳丘墓（重山１号墓）も築造されている。さらに、斜面裾から低地にかけては大規模な木造構造物などが確認され、膨大な量の土器や木製品に加え、八禽鏡の破鏡や巴形銅器などが出土している点は特筆される[1)]。集落に適さない狭隘な谷部に遺跡が営まれた背景には、当時平野に形成されていたとみられる潟湖の存在が大きいと考えられる（第54図）。復元された古地形を見ると、乙亥正屋敷廻遺跡はその潟湖に面した、もしくは意識した立地といえ、「港湾集落」と評される青谷上寺地遺跡と同様に海上交通の拠点としての役割を担っていた可能性も十分にあろう。よって、本遺跡は潟湖に面し、乙亥正屋敷廻遺跡周辺に営まれた衛星的な集落の一つと評価しておきたい。

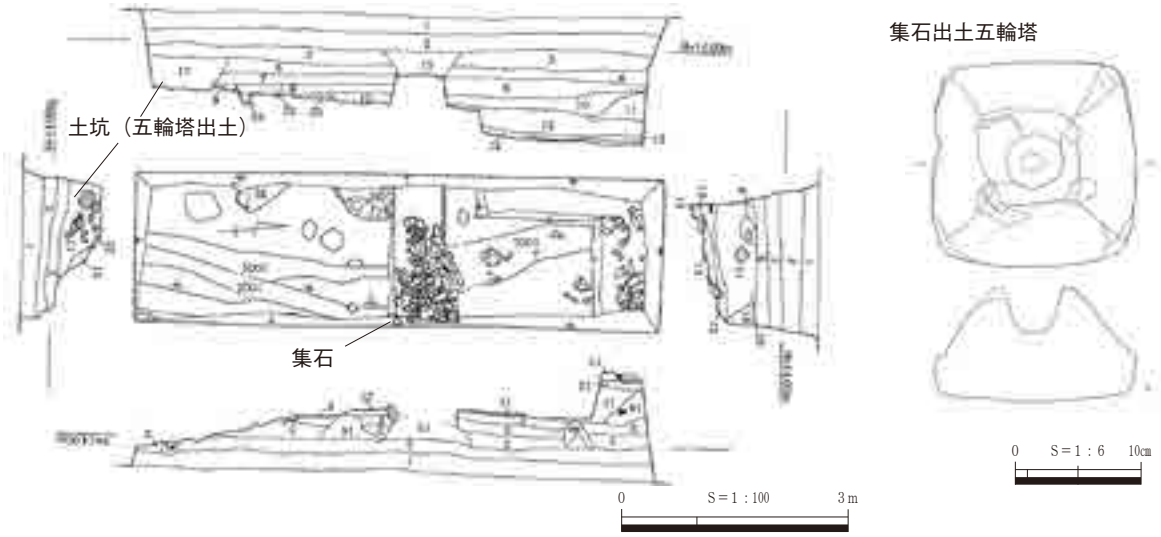
次に、中世から近世にかけては斜面裾の平坦部に建物群が営まれ、斜面部は墓地として利用されたことが窺える。建物群の性格は特定できないが、放射性炭素年代測定結果に依拠すれば、中世を通じて継続的に営まれた可能性がある。

墓地については今回の調査地で明確な墳墓を確認したわけではないが、先述した試掘調査の第３トレンチで検出された集石と土坑が注目される（第55図）。「集石」は掘方を有し、内部に充填された礫の中には五輪塔火輪が含まれている。また、「土坑」とされる遺構にも礫が充填され、五輪塔水輪が出土している。両遺構は基本的に同一の性格を有するとみられ、人骨や副葬品は出土していないものの、墓制の一形態として捉えることは可能であろう。鳥取県内の五



独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 2006
『郡衙周辺寺院の研究－因幡国気多郡衙と周辺寺院の分析を中心に－』を一部改変

第54図　遺跡周辺の地形と地質



第55図　乙亥正大角遺跡試掘トレンチと出土五輪塔

輪塔の出土状況を検討した中森祥は埋葬施設を伴わない石積基壇や集石、マウンドが「詣り墓」となる可能性を指摘している(中森2004)。集石土坑はさらに斜面に造成された平場を中心に複数基営まれたことが推測され、ある程度のまとまりを持った墓域を形成されていた可能性も十分にある。今回検出した集石土坑２、３や道路遺構１～４についてもこうした葬送に関わる遺構とみてよいであろう。字名等に遺存していないが、地元の人によると調査地周辺は『大五輪』と呼ばれていたようであり、本来、相当数の石塔が築かれていたことは想像に難くない。遺跡周囲には中世山城や砦も数多く築かれ、発掘調査でも寺内廃寺、寺内京内遺跡、柄杓目遺跡などで中世墓や多数の五輪塔や宝篋印塔が出土しており、戦国末期を中心とした因伯を巡る激しい争乱を物語る資料といえるのかもしれない。

今後、周辺地域の発掘調査成果を加味し、さらに当該地域の歴史が解明されることを期待したい。

【註】

１）2017年度報告書刊行予定

【参考文献】

鳥取市教育委員会2014『平成25(2013)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』

中森祥2004「五輪塔はどこに立てられたか－山陰地方における発掘調査からみたその様相―」『伯耆文化研究』第６号伯耆文化研究会

【図出典】

第54図：山中敏史編2006『郡衙周辺寺院の研究－因幡国気多郡衙と周辺寺院の分析を中心に－』独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所

第55図：鳥取市教育委員会2014『平成25(2013)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』を一部改変

写真５　調査地周辺に集積された五輪塔

PLATE

1　調査後航空写真（北から）

2　調査後航空写真（西から）

1　調査後航空写真（上が東）

2　斜面部第１遺構面完掘状況（東から）

1　集石土坑１検出状況（東から）

2　集石土坑１半裁状況（東から）

3　集石土坑２検出状況（北から）

1　集石土坑３検出状況（南から）

2　道１完掘状況（北から）

3　道２完掘状況（北から）

1　道３・４完掘状況（北から）

2　斜面部第２遺構面完掘状況（東から）

3　斜面部第２遺構面完掘状況（西から）

1　埋没谷１土層堆積状況（北西から）

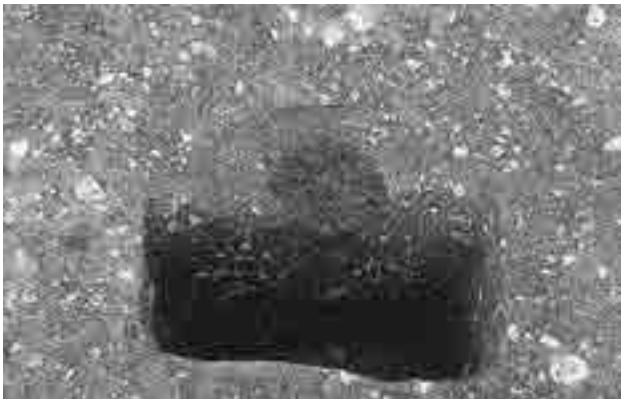
2　平坦部埋没谷５完掘状況（北西から）

1　テラス１・２完掘状況（北西から）

2　テラス３完掘状況（北西から）

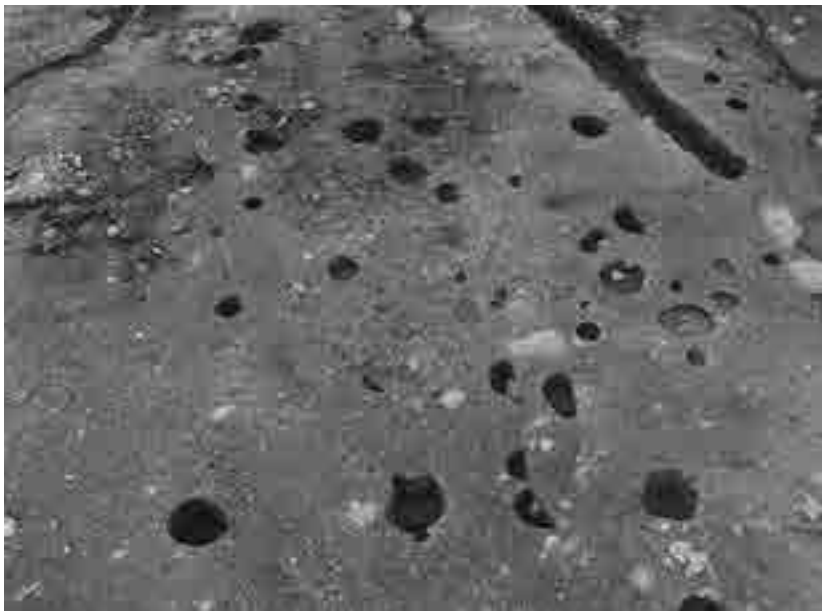
1　テラス４完掘状況（南から）

2　掘立柱建物１完掘状況（西から）



3　掘立柱建物１柱穴５土層断面（南から）

4　掘立柱建物１柱穴６土層断面（南西から）



1　掘立柱建物２完掘状況（東から）

2　土坑２完掘状況（西から）

3　土坑３完掘状況（南東から）

PL.10

1　土坑６完掘状況（南から）

2　ピット群１ピット２・３土層断面（南から）

3　ピット群２ピット４土層断面（南西から）

4　ピット群２ピット7検出状況（南から）

5　ピット群２ピット８土層断面（西から）

7　ピット群３ピット12土層断面（南から）

6　ピット群２ピット６土層断面（西から）

8　ピット群３ピット13土層断面（南から）

1　ピット群３ピット19土層断面（南から）

2　ピット群３ピット21土層断面（南西から）

3　埋没谷５遺物出土状況（１）（北から）

4　埋没谷５遺物出土状況（２）（南東から）

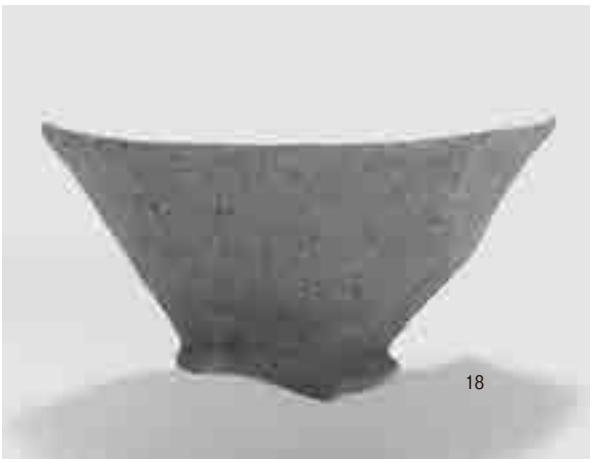
5　埋没谷５遺物出土状況（３）（北西から）

6　埋没谷１遺物出土状況（１）（南から）

7　埋没谷１遺物出土状況（２）（南西から）

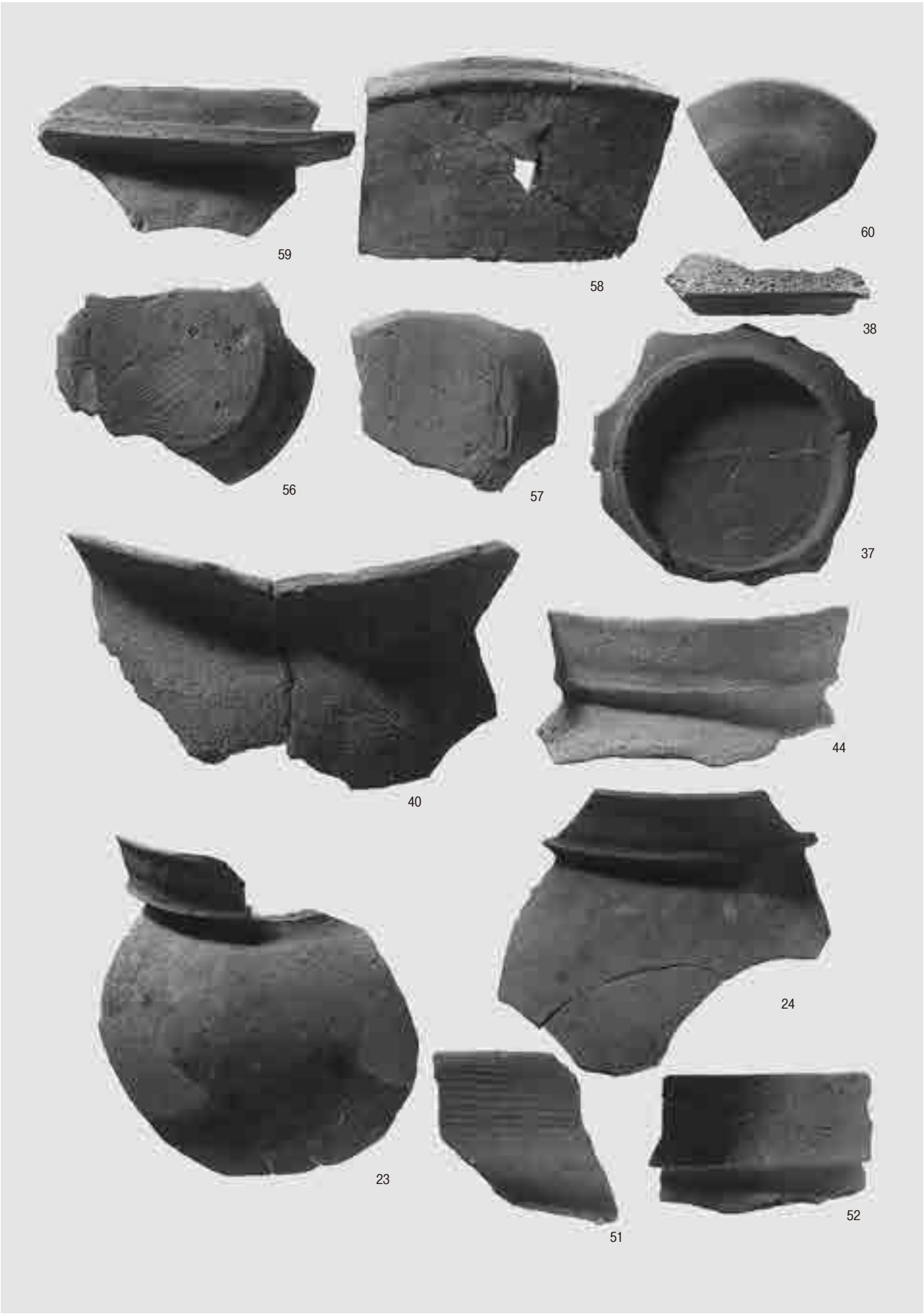
1　道１出土磁器

2　道１・ピット群・埋没谷１出土土器

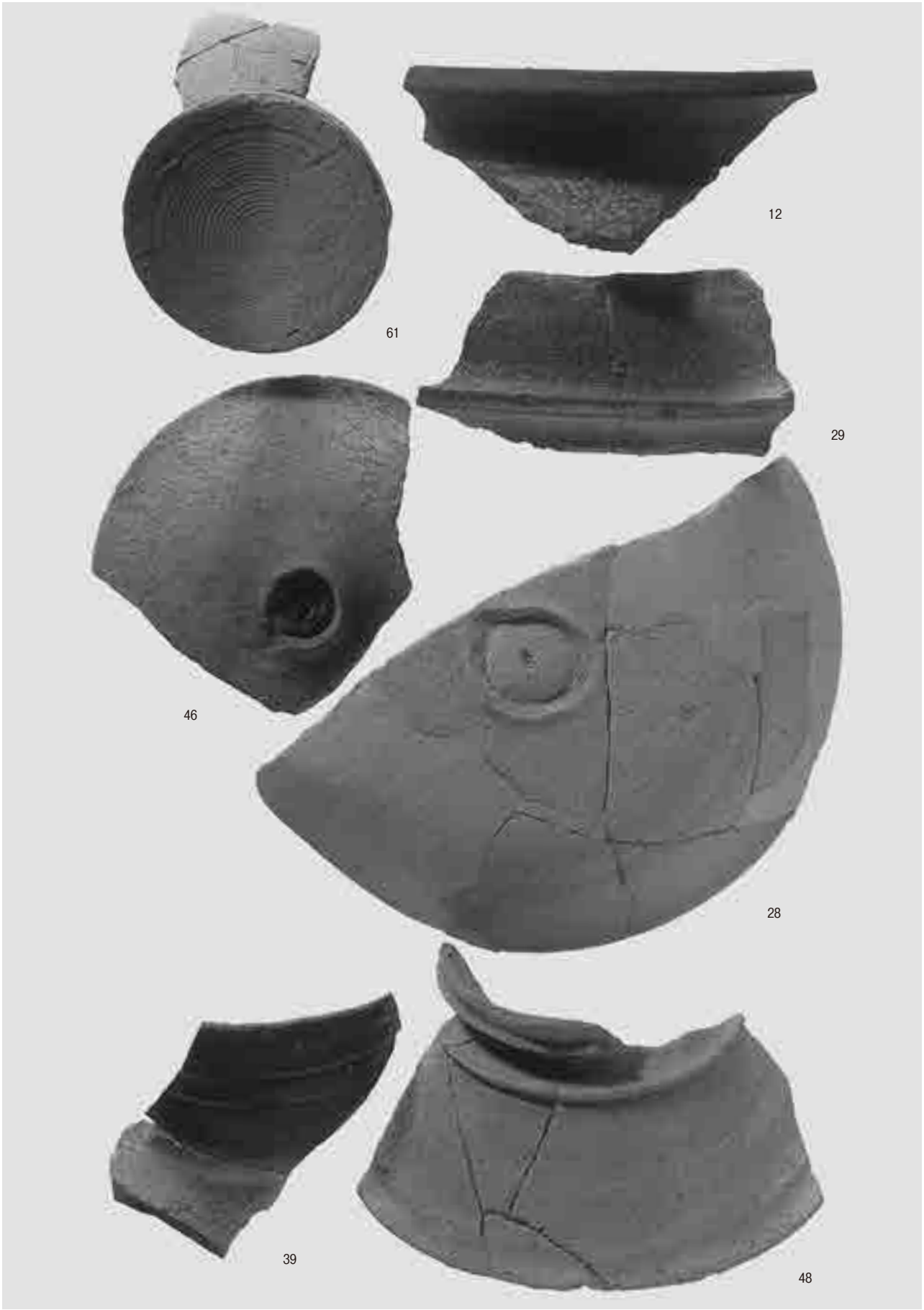


3　埋没谷１出土土器（１）

1　埋没谷１出土土器（２）



1　埋没谷１出土遺物（３）



1　埋没谷１出土遺物（４）

1　埋没谷１出土遺物（５）

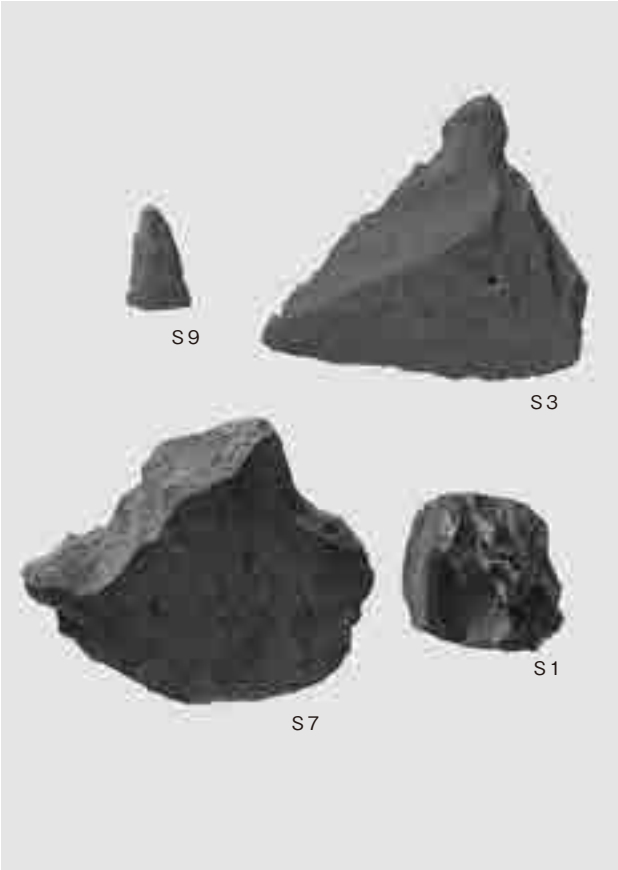
1　埋没谷１出土土製支脚

2　埋没谷５・表土出土遺物

1　集石土坑１・埋没谷５出土遺物

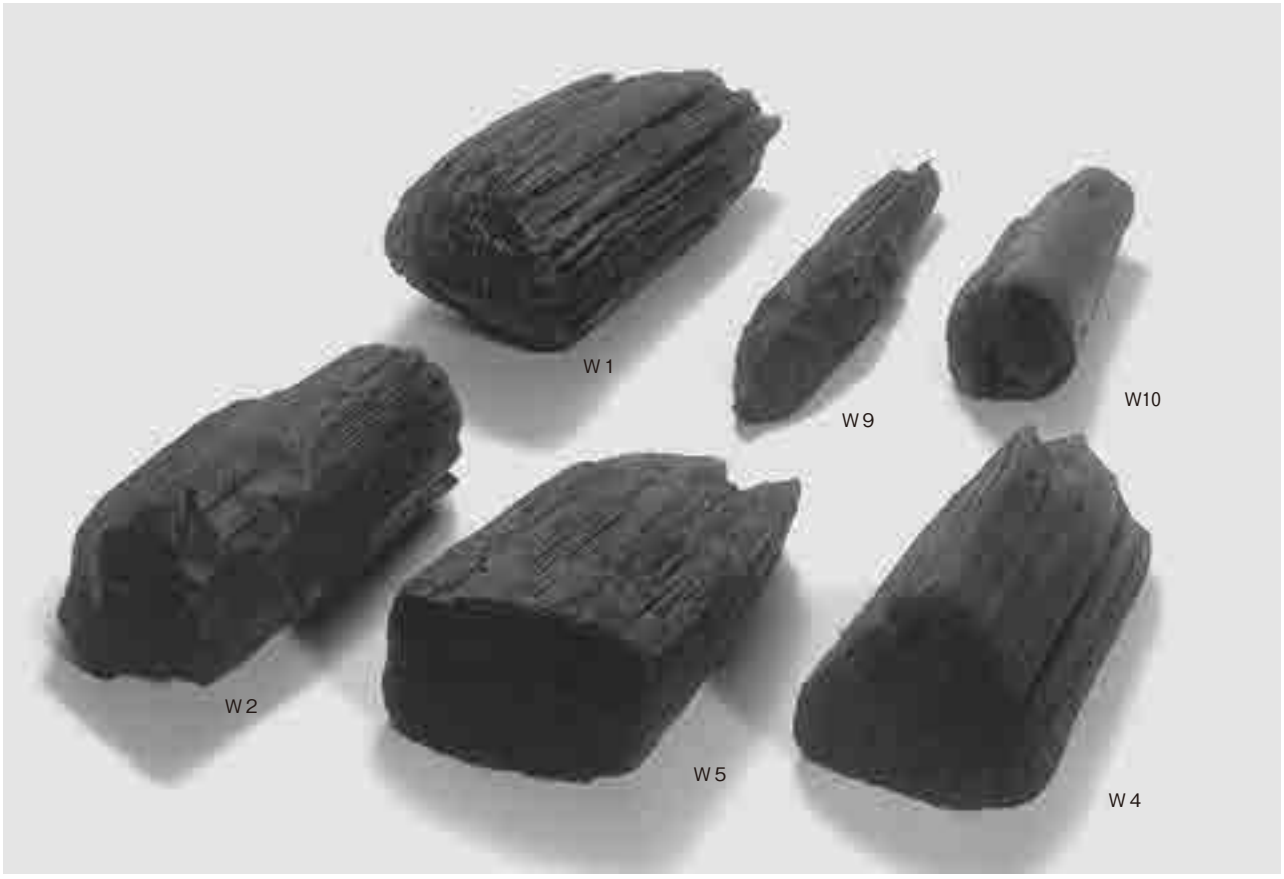
1　表土等出土土器

2　鉄製品・銅製品・古銭



3　剝片石器・玉作関連遺物

4　石　器



1　掘立柱建物１・ピット群出土柱・杭材

2　ピット群出土柱・杭材

報告書抄録

ふりがな	おつがせおおすみいせき
書名	乙亥正大角遺跡
副書名	一般国道９号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	ⅩⅩⅩⅡ
シリーズ名	鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	62
編著者名	原田雅弘、坂本嘉和
編集機関	鳥取県埋蔵文化財センター
所在地	〒680－0151　鳥取県鳥取市国府町宮下1260番地　TEL（0857)27－6711
発行年月日	2016(平成28)年10月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
乙亥正大角 (おつがせおおすみいせき) 遺跡	鳥取県鳥取市鹿野町乙亥正128外	31201	16－245	35°29′56″	134°03′24″	20140616～20141121	3,800㎡	一般国道９号(鳥取西道路)の改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
乙亥正大角遺跡	集　落	古墳時代	段状遺構	土師器 須恵器 土製品 石器	
	集　落	中世～近世	掘立柱建物跡 集石土坑 道路遺構	輸入陶磁器 国産陶磁器 灯明皿 五輪塔	

要　約

乙亥正大角遺跡では、縄文時代から近世に至る遺構や遺物を確認した。

古墳時代前期では斜面にテラスが造成され掘立柱建物が築かれるなど、周囲に小規模な集落が形成されていたことが窺える。

中世から近世にかけては斜面裾の平野部に建物群が営まれ、斜面部は墓地が成形されていたと考えられる。建物の具体的な性格は明らかではないが、放射性炭素年代測定結果に依拠すれば、中世を通じて集落が継続的に営まれた可能性がある。

鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 62
一般国道９号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅩⅫ

鳥取県鳥取市鹿野町

乙亥正大角遺跡

発　行　2016年10月31日
編　集　鳥取県埋蔵文化財センター
〒680－0151　鳥取市国府町宮下1260番地
電　話(0857)27－6711
発行者　鳥取県埋蔵文化財センター
印　刷　株式会社鳥取平版社
〒680－0845　鳥取市富安1丁目79番地